令和２年度

史跡古津八幡山　弥生の丘展示館
企画展関連講演会

記録集

2021

新潟市文化財センター

目　次

第１章　企画展関連講演会の記録

企画展２関連講演会（第１回）
東日本における弥生時代後期の交流（石川日出志）　……1

企画展２関連講演会（第２回）
天王山式土器からみた東日本の弥生社会－古津八幡山遺跡成立期の動向－（渡邊朋和）……21

企画展３関連講演会（第３回）
縄文時代から中世の大沢谷内遺跡（相田泰臣）……49

第２章　企画展の概要と企画展関連講演会アンケート結果

（１）令和２年度「史跡古津八幡山　弥生の丘展示館」企画展の概要 ……71
（２）企画展関連講演会アンケート結果 ……73

本書は、新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（以下、市文化財センター）が、令和２年度に催した「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」企画展関連講演会の記録集である。

図面やスライドは講演会で使用されたものを基本的に収録したが、都合により編集したものや除いたものが一部ある。また、当日紙で配布された資料については、紙幅の都合上、一部を除いて省略した。

第２章には企画展の概要と関連講演会のアンケート結果を収録した。

本書の編集は田中真理・相田泰臣・八藤後智人（市文化財センター）が行った。

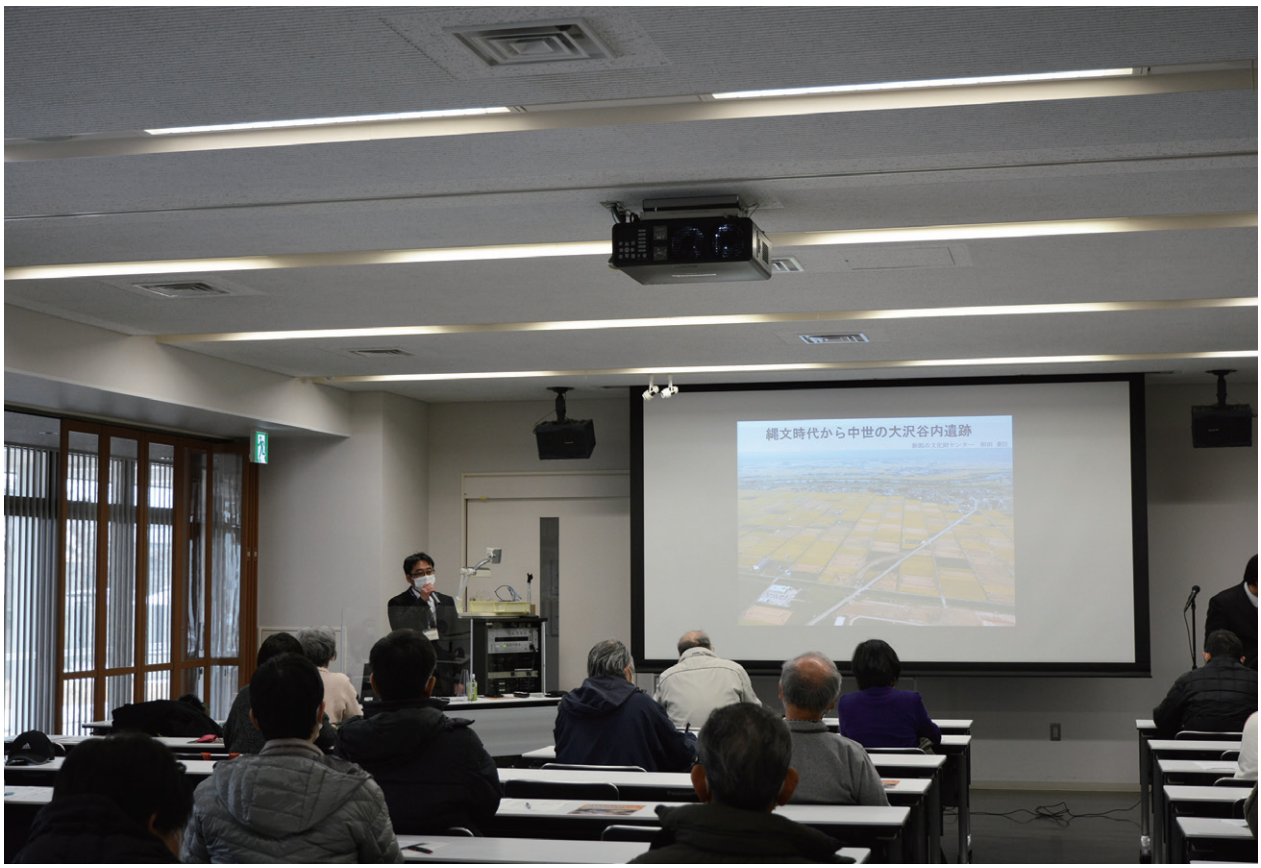
※表紙写真：古津八幡山遺跡（北から）

講演風景（第１回）

講演風景（第１回）

講演風景（第２回）

講演風景（第２回）



講演風景（第３回）

講演風景（第３回）

企画展１　展示風景

企画展１　展示解説風景

企画展２　展示風景 - 1

企画展２　展示風景 - 2（市文化財センター）

企画展２　展示解説風景 - 1

企画展２　展示解説風景 - 2（市文化財センター）

企画展３　展示風景

企画展３　展示解説風景

■令和２年度 企画展２関連講演会（第１回）

東日本における弥生時代後期の交流

石川日出志（明治大学文学部教授）

本日の話の内容

本日の私の論題は「東日本における弥生時代後期の交流」です（スライド１）。今回、こちらの新潟市文化財センターで「天王山土器から見た東日本の弥生社会」という展示会が開催されています。その主役は古津八幡山遺跡と、天王山式土器です。今から2,000年近く前ですので、よくわからないことも多いのですが、しかし私たちが想像する以上に、いろんな地域の間で人びとが往来し、かなり遠隔地の人びととも直接・間接に交流し、いろんな物資や情報を手に入れている。その様子をご紹介しようと思います。

この新潟市には、全国的に著名な弥生時代後期の遺跡が２つあります（スライド２）。一つは、国の史跡で整備されました古津八幡山遺跡、もう一つはここのすぐ近くにある、曽和インターチェンジの脇にあります六地山（ろくじやま）遺跡です。新潟市、新潟県にとってはもちろんですが、それだけでなく東日本の弥生時代の文化や活動の様子を語る上で、とても重要な遺跡です。また、終盤にお話ししますが、さらに西日本や東アジア世界までも視野に入れることが必要な、そんな時代であることを気付かせてくれる遺跡でもあります。

さて、考古学から新潟県域の歴史を描く、あるいは考える場合、その地理的環境を視野に入れておくことがとても重要です。私が考古学の道に迷い込むきっかけになった人物に、関雅之という先生がいました。その関先生は、新潟県域は文化の吹き溜まりのような様相を呈していると、昔論文に書いていました。でも私は逆に、文化の吹き溜まりじゃなくて、いろんなものが新潟に入ってくるけど、逆に行ってもいるんだから、むしろ「往来の舞台」と考えた方がよいのではないかと考えるようになりました。新潟県域は、西は富山・石川という北陸方面、北は庄内から秋田方面、それから東の会津・福島方面、さらに南の長野、あるいは群馬。このように、周囲の東西南北いろんな地域と交流を重ねている。それは現在もそうですし、実は過去も、縄文時代であれ、弥生時代であれ、どの時代もそれが新潟県域の際立った特徴だと思うんですね。

今日取り上げる弥生時代の後期は、西暦でいうと紀元後１世紀から３世紀ごろです。この時代を生きた人々の躍動がよく見えるのが古津八幡山・六地山両遺跡ですし、新潟県内の遺跡です。その辺をご紹介します。

今回の展示の主役となる遺物は天王山式土器という土器型式です。その詳細なお話は、次回（11月15日）、私もお邪魔して拝聴する予定ですが、渡邊朋和さんが、当センターの所長がお話しされます。私はその前座で、私たちが土器をどのように見ているのか、その要点・ツボをご紹介しようと思います。

天王山式土器とは？

さて、天王山式土器とはどんな土器型式なのか、その要点を紹介します（スライド４）。考古学でいう「土器型式」とは、縄文･弥生時代に限らず、いつでもどこでも同じ土器がつくり使われてるということはなく、ある地域のある時期の土器群には特徴のまとまりがあります。それが定まれば、例えばある土器が見つかったとして、その特徴を判別すると、その土器はいつの時代のどこの地域の土器なのか分かります。天王山式土器であれば、弥生時代後期の東北地方の土器で、東北一円から新潟県域にかけて分布するものだと分かります。こうした土器を判別する基準、これを土器型式といいます。その名称はその土器型式が認識されるきっかけとなった遺跡名をとります。新潟県内の縄文時代中期の火焔土器ですと、長岡の馬高遺跡の名をとって馬高式と言い、それに続くのが栃尾の栃倉式土器とかと言います。今日の主役である天王山式は、福島県白河市にある天王山遺跡が発掘調査されて初めて一つの土器型式と認定されたものです。

この天王山遺跡は、福島県の中通りの一番南の端で、ひと山越えれば、栃木県・関東という地にある遺跡です。この遺跡が、昭和25年（1950年）に地元の藤田定市さんという方が中心となって発掘調査されて、東北地方の弥生時代遺跡では、本格的な発掘

調査としては最初のもので、大量の土器が出てきました。それが東北地方の弥生時代の一時期を特徴づけることから、天王山式土器という名称が同年に提唱されました。

土器の説明はなかなか難しく感じられると思いますので、少しずつ馴れていきましょう。まず第１ラウンドから入りましょう。天王山式土器の代表例の図面と写真をスライドに示しました。

最初に土器の形を見てみましょう。縄文土器は、東北地方の縄文時代後・晩期には小形の壺も出てきますが、煮炊き用の深鉢（鍋のこと）が圧倒的多数を占めます。一方、弥生土器では、頸がすぼまった壺形の土器が、全体の半数まではいきませんがかなりの割合を占めます。これが弥生土器の際立った特徴です。天王山遺跡の土器には壺がたくさんありましたので弥生時代の土器だということはすぐにわかったんです。

ところが、文様を見るとまるで縄文土器みたいで、とても不思議なんですね（スライド５）。例えば口の部分。普通弥生土器ですと、口が平らなものが圧倒的多数なんですが、天王山遺跡では口の部分に出っ張り、小さな山形の突起がついている。それから、この頸の下の部分に横線が引いてあって、ところどころ縦に区切ってる。工字文といって、工場の「工」の字の形をした文様がある。この文様図形は、縄文時代の最後の縄文時代晩期の、さらにその一番終わりの段階に、特徴的にみられる文様なんですね。突起がある、工字文がある、まるで縄文土器みたいだというので、初めは、弥生時代でも早い段階だろうと考えられました。ところが、現在では、弥生時代を前期・中期・後期三つに分けますが、そのうちの後期の段階だと考えられています。

弥生時代でも古い方だ、いや新しい方だと、いろいろ議論があったんですが、今日会場に会津若松市から中村五郎先生がおみえですけれども、中村五郎さんはじめ何人かの方々が、弥生時代の中でも新しい段階であることを論証されました。福島県や茨城県あたりの土器群を相互に比較して順番に並べる（これを編年といいます）と、古いところには置きようがない。古そうな突起や工字文はあるんだけれど、実は新しいのだということを解き明かされました。現在ではだれも異論を唱えない定説となっています。私たちは中村さんをはじめとする、先輩の方々のお考えや議論の土台の上にこの土器を見ているわけです。

そうは言いましても、石川県や富山県でも天王山式土器が見つかるんですが、これは弥生時代でも中期とみる意見がずっと根強く残りました。北陸ではむしろ主流をなす意見だったほどです。

この天王山式土器は、非常に有名な土器型式なんですが、その位置付けについてはずいぶん違う意見がありましたので、わたしは「考古学者を惑わす土器型式」と呼んできました。そう呼ぶということは、俺はわかったんだというつもりがあるわけですが、先ほど私を紹介された今回の展示企画者である渡邊朋和さんから最近、「石川さん、あなたが書いた論文は、あなたより若い私たちを惑わしてる」と批判されています（笑）。どこが渡邊さんと考えが違うかは、次回の渡邊さんの講演で紹介があるでしょう。現在彼とは、天王山式土器をめぐってバトル中です。ですから、今回と来月の講演会も、２人のバトルのつもりでお聞きいただくと面白いと思います。

弥生時代後期の新潟県域

さて、新潟の弥生時代後期はどんな様子なのかに進みましょう。現在までわかっている遺跡の位置を、地図に点で落としてみました（スライド６）。左右同じで、左側の図は小さいので、右側にちょっと大きくしました。弥生時代というのは、基本的に水田稲作が生業（なりわい）の基本ですから、平野部にムラを構えるので、山間部には遺跡は少ない傾向がはっきりとわかります。いくつかのマークが落としてあります。本日の主役である天王山式土器が見つかった遺跡は四角で示しています。新潟平野およびその周辺一帯、県北から南は長岡周辺まであります。北陸に由来する土器が見つかった遺跡は白丸で示しました。上越から柏崎、そして新潟市周辺の南部、佐渡。下越の方には少ない。つまり、北陸系の土器型式と東北系の天王山式土器が、新潟平野の中央部で重なっています。縦長の楕円形は長野県北部に由来する箱清水式という土器型式で、信濃川沿いに下流側に分布が延びて、弥彦・角田山塊まで見られます。さらに弥生時代後期後半から終わりごろになると、遠く北海道に由来する続縄文土器も南下してきます。逆三角形の印がそれで、村上界隈から海岸沿いに点々と見つかり、新潟市の六地山遺跡より南になるとまばらになり、柏崎・柿崎・高田の遺跡で土器片が１点ずつ見つかっています。一つの遺跡で多数の土器が出土することはありません。

つまり、新潟県の弥生後期というのは、４つのまったく由来・系統が異なる土器型式が折り重なってい

ます。私が考古学の道に進むきっかけとなり、また大きな影響を受けた関雅之という考古学者がおりましたが、関先生は、昭和46（1971）年の論文で、弥生時代の新潟県域は、文化の吹き溜まりのように、東西南北いろんな地域の土器が折り重なっている。ひとつの弥生文化が順調に展開していく、そんな単純なものではないと指摘しました。とても重要な指摘で、そんな地域は日本列島の中ではなかなかないんですね。この複雑さが新潟の弥生文化の特色だと言っていいわけです。

新潟の弥生文化探求の歩み

では、そうした新潟県域の弥生後期の様子がどのような遺跡の調査によって知られるようになったかを、次に見てみましょう（スライド７）。結論を申し上げますと、昭和62（1987）年から始まる古津八幡山遺跡の調査によって、それまでの理解がかなり大きく変化したのだということを少しだけでも感じていただければと思って、紹介するものです。

現在、弥生時代後期と扱っている遺跡が、新潟県域にもあるということは、戦前はほとんど意識されませんでした。昭和10年代にようやく、弥生時代は前期・中期・後期３つに分けて考えようという意見が出てきたので、それ以前に発見されたものは弥生時代だとはわかっても、その中のいつごろかはわかりませんでした。現在から見て、弥生時代後期の資料と思われる土器が最初に見つかったのは、佐渡でも大佐度の一番北端にせこの浜洞窟という遺跡があります。昭和初年に小規模な発掘が行われまして、右下の写真のような土器が出てきました。その中に縄文が施され、斜め線の文様のある土器があります。今から見れば天王山式土器です。あとで説明しますが交互刺突文という天王山式特有の文様が確認できます。その一方で、文様のない、口の部分が屈曲する、現在の眼で見れば北陸系の土器もあります。ここですでに２系統の土器が一緒に見つかっています。これが新潟に弥生土器ありという考えの本格的なスタートだと思います。しかし、いかんせん、全国的に弥生時代・弥生文化というものの実体がまだよくわかっていませんでした。

弥生時代の遺跡・文化に注目が集まるようになるのは、戦後になってからです。全国的にもそうなんですね。その一番のきっかけは、戦後の昭和22年から25年まで、静岡市の登呂遺跡が発掘調査されたことでした。弥生時代の住居12軒と倉庫２棟からなるムラが発見され、その居住域の南側の低い土地に水田が整然と造成されていました。住居１軒に例えば５人が住んでいるとすれば60人、それぐらいの人たちが、数ヘクタールの水田を造成し経営している様子が鮮やかに確認されたんです。新聞などを通じて全国的に大きな話題になりました。戦後間もない、非常に混乱した社会状況でしたが、土の中を発掘すると、弥生時代、約2,000年前の人々の生活の生の様子が鮮やかにわかることにたいへんな注目が集まりました。

その調査に、全国から見学に行った人たちがたくさんいましたが、その中に佐渡中学校の先生である本間嘉晴さんという方がおりました。その後ずっと新潟県の考古学界の指導的な役割を担われた方ですが、登呂を見て、佐渡にもそんな遺跡があるに違いない、そういう思いを強くされたようです。間もなく、登呂遺跡の調査が終わった２年後、昭和27年に佐渡の国仲平野の西南部で、国府川という河川改修の工事中に、弥生土器と木の板等が大量に見つかりました。これは大変だ、登呂遺跡とそっくりな遺跡が佐渡にもあるということで、発掘調査することになりました。出身校である國學院大學の大場磐雄という考古学の先生に応援を頼みまして、すぐに國學院大學の研究スタッフが来まして、佐渡の方々と一緒にこの遺跡を発掘調査しました。

スライド８の右側にあるように、板材を矢板状に打ち込んでる状況などは登呂とそっくりなんですね。いろんな木材が出るわけですけれども、その中に脱穀用の杵があったり、魚を捕獲したりするのに用いるたも網もありました。それと一緒に文様のない土器がたくさん出てくる。弥生土器でも新しそうだ。弥生時代の木製の遺物が、たくさんの弥生土器と一緒に見つかって、登呂遺跡と同じような状況が佐渡にもあることがわかりました。全国的にも注目された調査でした。これほど内容豊富な遺跡はその後もなかなか見つかっていません。

それから昭和31年に、ここにほど近い曽和インターの付近ですが、六地山遺跡の発掘調査が長岡市立科学博物館主体で行われました（スライド９）。当時の写真をみると、今と違ってけっこう畑の起伏がありますね。後ろに角田山・弥彦山が見えます。この畑の高まりの上に弥生時代の人々が残した土器や石器が大量に見つかりました。これ六地山遺跡です。この土器は、弥生時代でも新しい段階、後期段階だということはわかったんですが、これをどう理解するかずっと議論がありました。私は弥生時代後期で

も後半だと扱ってきたのですが、最近、渡邊朋和さんは「石川さん、そこは大間違い。これ弥生時代後期でも早い段階だから、考え方を改めた方がいい」と、教育的指導をされています。言われてみればそうだなと、今頭を悩ましながら考えを改め中です。負けそうですね。ちょっと癪なんですが、そう考えた方がよさそうです。それはさておき、土器は出てきたんですが、石器も少しばかりありましたが、住居跡だとかは見つからず、ムラや生活の様子とかが、なかなかわかりません。

ちょうど同じころですね。昭和30年から33年までの４カ年、東京大学の考古学研究室が、上越の山寄り、妙高山のふもとの丘陵の上にある斐太遺跡群の発掘調査を行います。丘陵上の地表にたくさんの窪みがあって、発掘してみると竪穴住居でした。発掘調査されて、何軒かの四角い竪穴住居跡が見つかりました（スライド10）。ところが、そこから出てくる土器は、ほとんど文様がないもので、形から言ってもなかなか位置づけようがないものでした。現在から見れば、北陸に由来する土器を主とし、それに長野から東海方面とつながりのある土器群なんですが、当時はなかなかわかりませんでした。

それからまた16年ほどたって、昭和46（1971）年に、私が高校２年生のときですが、村上市の三面川の河口、すぐ北側の高い段丘上にある滝ノ前遺跡が発掘されました（スライド11）。目の前は日本海で、目の前に粟島、遠くに佐渡や、天気がよければ角田・弥彦山塊も見える、非常に眺望の開けた高台にある遺跡です。発掘で、平面形が円形の竪穴住居が３軒見つかりました。そこから鮮やかな文様が描かれた土器が出てきました。今回の展示の主役である天王山式土器です。福島県の天王山遺跡を標準とする土器型式の集落遺跡があることがわかりました。

天王山式土器というのは、先ほど触れましたように戦前、せこの浜洞窟でも見つかっていました。上越を除く県内各地で点々と見つかってはいたんですが、まとまって見つかるのは、このちょっと前に発掘された村上市の砂山遺跡とこの滝ノ前遺跡、二遺跡しかないんです。

ちょっと個人的な話をしますが、今日も展示されているスライド11の右上の土器は、私の人生に大きな影響を与えた土器なんです。私が高校２年だった10月21日。日曜日かと思っていたんですが、調べたら高校の創立記念日で木曜日でした。同級生の、現在帝京大学の考古学の教授をしている阿部朝衛さん（当時は「さん」なんてつけません！）に「関先生が村上で発掘しているから参加させてもらおう。お前も来い！」って誘うんです。私は水原町と安田町の境に住んでいましたから、せっかくの休みの日に、わざわざ汽車に乗って県北の村上まで行って発掘するのは気が進まなかったのを思えています。「気が向いたら行くから」とか言ってたんですが、なぜかその日村上に行っていました。そしたら、目の前に弥生時代の住居跡が出てくる。もうびっくりしました。１日だけの参加でしたが、住居跡は鮮烈でした。何日かしたら、関先生が土器を学校に持ち帰って、僕ら高校地歴部の部員に洗わせたんです。掃除のバケツでお湯をわかして、毎日放課後、土器洗いをしました。させられたのか、したのかはわかりません。でも面白かったですね。この３個の土器、土にまみれたこれらの土器を私がたまたま洗ったんです。馬毛ブラシでこすると、二本線の間を交互に突き刺してつけた文様が現れるんです。関先生に「これは何ですか」って聞いたんですね。そしたら関先生いわく、「高校生にもなったら自分で調べなさい。図書室に行くと、河出書房の『日本考古学講座』というのがあって、その弥生時代の巻の東北地方を見なさい。」と、ただそれだけなんですね。「あれ、教えてくれないんだ」とは思いましたが、私もまじめな高校生でしたので、言われたとおりにその本を見ました。そしたらこの図が載っていたんです。あ、私が洗った土器と同じ文様の土器だ。口の部分が山形になっていて、交互に突き刺した文様がある、そっくりな土器でした。そうか、これは天王山式土器っていうんだ。考古学って面白いなっていうんで・・・それから49年後の今、ここで天王山式の話をしているわけです。

脱線はまだ続きます。考古学者である関先生は、高校生は発掘に連れていかないと宣言していたんです。高校生を発掘に連れていくと、人生を誤るから連れていかない、と言うんです。ところが、あとから調べると、この遺跡は緊急事態でやった発掘で、発掘の人手が足りなかったようなんです。高校生の手も借りたかったらしい。そのいいタイミングで阿部さんが「発掘に参加したい」と申し出たので、OKが出た。この一日の発掘で少なくとも３人がこの道に進んでしまいましたので、関先生の危惧「高校生を発掘に連れていくと人生を誤る」というのは的確な予想ということになります。ま、よかったかなって思いますけど（笑）。本題に戻ります。

古津八幡山遺跡の発掘調査

スライドがようやく古津八幡山遺跡まできました（スライド12）。この遺跡の発掘調査が始まったのは、昭和62年でした。磐越自動車道の建設に必要となる土砂をどう確保するかが検討されて、古津八幡山一帯が土砂採取の対象地になりました。そして今日もおみえですが、坂井秀弥さんをはじめ、新潟県教育委員会のスタッフが現地に入って、地表調査や試掘調査をして、丘陵の上なのに弥生土器の破片がみつかるのはなぜだろうと、不思議に思ったそうです。弥生時代は稲作農耕民ですから、水田経営にふさわしい低地にムラを構えるのが普通なんですが、なぜか山の上から弥生土器が見つかる。これを、ただものではないと判断する嗅覚ってすごいですね。ほんとに小さなかけらなんです。それを見逃していたら、古津八幡山遺跡は、いまは空中になっていたでしょう。そこから何次にもわたって本格的な調査が重ねられ、そして丘陵の上に南北400mぐらい、総面積10数haもの大規模な弥生時代後期のムラが広がっていることがわかりました（スライド13）。丘陵のてっぺんだけでなく、北側や南側に延びる尾根筋にも、最近の調査では、さらに北東に延びる低い尾根にも建物が建てられていたことが分かっています。ムラの中心部分は、途切れとぎれですが、何重かの濠で囲われている。

この遺跡からみつかる土器は、弥生時代後期の初めから後半段階まで連続していますから200数十年も存続したことが分かります。天王山式土器に由来する弥生時代後期の東北系の土器と、それから北陸系の土器とが共存していて、なおかつ両者の要素を合わせ持つ、こういう土器もあるのがこの遺跡の特徴だということもわかりました（スライド14）。

スライド15・16はムラの中心部、居住域の周りをめぐる濠です。断面V字形で、右上は発掘調査している最中ですので、作業員さんたちが濠の中に入って発掘していますので、濠の深さや大きさがわかるかと思いますが、本来の濠の幅や深さはもう少し広く深かったと考えられます。丘陵上の傾斜地ですから、濠を掘った土を盛って外側に築いた土塁も、濠自体の上部も雨水によって浸食されて削られています。本来はもう少し深いものです。この遺跡の中央部の北寄りに、大きな円形の古墳が築かれています。この弥生時代後期のムラが廃絶されてから約100年後に築かれたものです。調査時のこのスライドではうっそうとした杉林になっていますが、今はもう全部伐採されて、ムラの姿や古墳が整備されています。

それから、ムラだけではなくてお墓も一画から見つかっています（スライド17）。溝で四角く囲った真ん中に墓穴を設け、板をそこに持ち込んで、棺を組みます。その棺の中に遺骸を埋葬するんですが、死者に鉄の剣と石の矢じりを副葬しています。墓のことや、副葬品のことは、またのちほど触れます。

こうした長年の発掘調査成果に基づいて、平成17（2005）年に国の史跡に指定されました（スライド18）。指定理由は、要約しますと次の通りです。日本海側では一番北端に位置する、弥生時代後期の大規模な高地性の環濠集落である。そしてこのムラのあとに大規模な円墳が築かれた。さらに古代には製鉄の活動も盛んに行われた。弥生、古墳、古代の複合遺跡であるということがわかった。その中で、国史跡にする一番重要な理由は、弥生時代後期の大規模な高地性集落である。新潟県の当時の社会状況や、周辺地域との交流の様子を知ることができる。特に高地性集落は、北陸一帯に点々と分布するが、現在のところここが最北端に位置する。北陸から新潟までの弥生時代から古墳時代にかけての様子を知る上で、非常に重要だということから、国の史跡に指定し、保護を図ろうとするものであるという指定理由です。ここに北陸の高地性集落の最北端とありますが、その後、村上市で山元遺跡という高地性集落が見つかり、古津八幡山遺跡に比べるとかなり小規模ではありますが、最北端に位置する高地性集落という重要性から国の史跡に指定されています。

弥生時代「越後」の躍動

これから弥生時代後期の越後の躍動の様子を見ていきましょう。「越後・佐渡」としたかったんですが、弥生時代後期の佐渡の様子がまだよくわからない点がありますので「越後」としました。弥生後期の越後、新潟は、先ほど来何回も触れましたように、東西南北の周辺諸地域と、場合によってはかなり遠隔地と密接な交流を重ねた状況がわかっています。スライド19では、右側に矢印で示しましたけども、西からの矢印は北陸からの人々・情報・モノの往来、その下の矢印は長野方面から千曲川、新潟県の中に入ると信濃川ルートで、人々・モノ・情報が入る。右側からの矢印は会津方面から人・モノ・情報が入る。それから、弥生時代後期の後半になりますと、上からの矢印が北海道方面と関わりのある北方の人々の往来がみられる。この４者が折り重なるように、新潟でさまざまな活動を繰り広げたことがわ

かってきています。これは何も弥生時代後期に突如始まったことでなくて、その前段階である弥生時代中期後半、紀元前１世紀代にも非常によく似た状況があります。前段階からその準備状況が始まってることがわかってます。

ちょっと煩雑な図でありますが、スライド20の真ん中に弥生後期と同じように、４つの矢印があります。北陸方面から櫛描文土器といわれる土器を持った人たちの動きが明瞭で、下越まで進出しています。長野方面からは信濃川沿いに十日町界隈に入り、さらに新潟平野へも入りますが、発見される土器は少数になります。さらに一部は佐渡、それから村上界隈にまで長野に由来する土器などがみつかります。それから福島方面からは、会津盆地からかなり濃密に土器がやってきてます。それから北の庄内、秋田方面からもかなり明瞭です。この４つの地域に由来する人・モノ・情報が折り重なっている。これが弥生時代後期にも引き継がれたわけです。この東西南北４つの隣接地域に由来する文化が折り重なっていると言いましたけれども、ばらばらにあるのではなくて、例えば新発田市（旧加治川村）の山草荷遺跡では（スライド21）、北陸、庄内･秋田、会津、長野の４つの地域に由来する土器が共存しています。土器の特徴をそのまま人に置き換えていいかということについてはいろいろ議論があるところですが、４地域の人がこの山草荷という弥生時代のムラで共同生活をし、北陸、長野、会津、庄内･秋田方面の人々と物資のやり取りや情報交換をしていると考えていいと思います。これが弥生時代の後期に引き継がれる（スライド22）。

いろんな周辺地域に由来する人・モノ・情報の動きを、どうやって読み解くかというと、遺跡からもっとも多く出てくるのが土器ですから、その土器を細かく探究するということから、当時の人やモノ、情報の動きを復元していくのが順当で、確実です。

天王山式土器をどう読むか

スライド23は古津八幡山遺跡で発見された天王山式土器です。弥生時代後期前半ですから、古津八幡山の丘陵上に大きなムラができる段階の土器です。これをどう読むか見ていきましょう。

土器は立体物です。ぐるっと360度土器の面が広がっていますから、土器の形も、装飾の加え方も、自由奔放であってもおかしくありません。どんな形でも、そしてどこにでも自由に文様を描いてよさそうなのに、形も装飾も、そこにはちゃんと土器型式としての約束事があるんですね。まず天王山式土器の形をみると、すぼまった頸の部分はおおむね筒形をしています。そして頸の上下で屈曲して口（口縁部という）と胴（胴部という）へとつながります。そうした形の土器に装飾を加えるには、この屈曲部に横線を引くことによって、土器の面をいくつかの横帯に分割します。分割線で文様の帯を設けるわけです。天王山式では分割線の部分に交互刺突文というのを好んで入れます。そして文様の帯に弧線を組み合わせて文様図形を描きます。これが天王山式土器の特徴なんですが、古津八幡山遺跡でもそのことをよく確認できます。このことから、この遺跡が弥生時代後期前半、紀元後１世紀に始まることがわかります。この前段階の中期後半にはまだ人々が住みついていません。天王山式土器ですから、その主役は会津・福島方面との往来が盛んな人々ということになります。

もう少し、土器を読むレベルを上げましょう。私たち考古学者が土器をどんなふうに見てるのか。天王山式土器のどういうところに注目して見ているのかを知っていただきたくて、絵をつくってきました（スライド24）。

まず土器を見るときに、当然のことながら、まず形を見ます。スライド24の写真を見てください。僕らはこれを甕と呼んでいますけれども、頸がちょっとすぼまって口が開く。それから胴が膨らむ。この土器の形には、口と頸と胴がある。ところが、土器の形どおりに文様が描かれてるかというと、微妙に違うんですね。そこで、土器の形の次に、文様の帯がどこにあるかを見ます（スライド25）。その文様の帯の分割線がどこにあるかを見ます。縄文土器以来の伝統で東日本では弥生土器もそうで、横方向の装飾の帯を設けて、その中にいろんな図形を入れます。この天王山式の場合は、口の部分は突起はありますけども一応水平で、口と頸の間に分割線が入ります。それから頸の途中と、胴部の真ん中にも区分の線が入ってます（横三角印）。その帯の中に文様図形を入れます。この土器では、頸の帯には文様を入れません。文様がないので無文といいます。無文の帯を設けます。

次のスライド26で、ほかの土器では文様の帯がどのようになっているかをみると、右側５点のうち、上３点は左の土器と同じように、頸に無文の帯を入れています。ところが、下の２点は、頸の部分に無文の帯がない。こういう土器もある。ですから、土

器を装飾する帯をどう配置するかという約束事には二通りある。文様の帯をこのように見るわけです。

ですから、僕らは土器を見て、口縁部、頸部、胴部なんていいますが、実は形だけを見てるわけではなくて、実は文様の帯も一緒に見ている。場合によると形よりも文様の帯に重点を置いて見ています。文様に引きずられた見方といってもよいかもしれません。

次に、その文様の帯の分割線はどのように描いているかを見ます(スライド27)。このスライドの土器では、分割線部分に竹串の持ち手側ほどの太さの棒で描いた窪み線（沈線という）を横に２本引き、その間を突き刺すと波形の出っ張り線ができます。これを交互刺突文（こうごしとつもん）と音読みします。これが非常に特徴的なんですね。もちろん交互刺突文のない沈線だけの例もあります。どこに文様の帯の分割線があるか、そこにどんな文様を加えて分割線にしているのか。そんなところを見ます。

次に、文様の帯の中にどんな図形を描くかを見ます(スライド28)。このスライドに示した５個体の土器の胴部文様の帯をみると、かなり複雑な文様図形を描いているように見えます。ところがよく見ると、上に開く弧線と、下に開く弧線とを上下に組み合わせる点ではみな共通しています。上下の弧線を、上下対称に置くか、弧線一つを一単位とすると半単位ずらして置くのとでずいぶん違った図形に見えます。しかし、基本形は弧線の組み合わせなのです。このように一見複雑そうに見える文様図形であっても、いくつかの例を比較することで、共通する約束事があることを見出すことができます。

もちろんこうした点だけではなくて、縄文がよく施されていますが、縄文を施す際に用いた縄（縄文原体という）の撚りが右撚りか左撚りか、撚り合せの回数は何回か、土器面に縄を転がして施文しますが、横回転か斜め回転か、ただ転がしているか、それとも斜めに引きずりながら転がしているか。沈線なら、太く深く線を描いているか、それとも浅く引いているか。それから１本で描いているか、２本で描いてるか、とかを確認します。図形もいろいろです。弧線をよく使うと言いましたが、端っこをくるっと巻くか否かとか、線が滑らかか、ふらつくかとか、そうした細かな癖、特徴を詳細に観察して、遺構ごと、遺跡ごとに比較して、共通する／違うを見極めた上で、古いとか新しいとか、これは新潟に多いとか、これは福島に多いとか、これは北方の要素だ、いやこれは……とか、そういう判断を、ねちっこくやっています。そうしないと、こういう土器を残した人たちの姿が見えてこないからです。

天王山式土器を出す新潟と北陸の遺跡

さて、古津八幡山遺跡が営まれ始めたのは弥生時代後期前半の天王山式土器の段階です。同じように天王山式土器を出す遺跡が新潟県内でどのように分布するのかをスライド29に図示しました。角田山と佐渡の間の海中にあるのはミスですし、渡辺さんに教えてもらったら、上越でも子安遺跡で破片が見つかっているそうです。もう少し入念に点を落とす必要がありますので、これは参考程度に見てください。

分布図を見ると、新潟県内では新潟平野に圧倒的に多いですね。南魚沼郡域、六日町盆地と言った方がいいでしょうか、遺跡数は少ないんですが、旧塩沢町の来清東遺跡とか意外にも天王山式土器がまともに出てきています。新潟平野とは別に、只見川ルートで直接会津方面とつながっているのだ思います。新潟平野に多いと言っても、一つの遺跡でまとまって出てくる遺跡は新潟市の古津八幡山遺跡、村上市の滝ノ前遺跡と砂山遺跡、旧豊栄市の松影Ａ遺跡とかで、そんなに多くありません。阿賀北は、新潟砂丘の内側をはじめけっこう遺跡の密度が高いようです。

ところが、天王山式土器を出す遺跡は新潟県内だけでなく、もっと西側の地域でたくさんあることがこの地図でよくわかります。富山県と石川県がものすごく多い。富山平野から口能登（能登南部）に特に多い。もちろん、石川・富山両県の弥生時代の土器は、基本的に縄文を施したり沈線で盛んに文様を描いたりはしませんから、そういう土器が出てくると「おやっ？」と注目した結果、報告される率が高い。一方、新潟では、縄目や沈線文様のある弥生土器は普通ですから、調査して報告する側が注目しない公算が高くなるということも考えなければいけないでしょう。それでも、この富山・石川両県で天王山式土器が発見された遺跡地点数の多さは大いに注目するべきでしょう。

これは正真正銘の天王山式土器だという資料の西端は、石川県最南端の加賀市橋立大野山遺跡です。加賀と越前の境界の、丘陵性の台地が日本海にちょっと突き出たような地形の地点です。小さな破片ですが、土器の色調や文様の特徴から、私は下越の土器ではないかと思っています。福井平野にも１か所点を落としてあります。鯖江市持明寺遺跡です

が、これは新潟から持ち込まれたものではなく、富山・石川両県あたりから持ち込まれた可能性があると思います。

このように東北の土器型式であるはずの天王山式土器が北陸にも発見例があることは、1957年にすでに注目されていました。先ほど触れた橋立大野山の土器片です。石川県内では見たことがない土器なので、東京圏の誰かに問い合わせてわかったんでしょうね。片山津の医師で、考古学をライフワークにもしていた中口裕さんという方が『柴山潟』・『県下の貝塚と古墳』という本の中で、はっきりと東北の天王山式だと書いています。次に注目されたのは私が大学１年の時でした。富山県の考古学会が出している雑誌『大境』第５号に、高岡市の海岸にほど近い場所にある頭川（ずかわ）遺跡で天王山式土器がまとまって採集されたという資料紹介が載りました。これは驚きましたね。正式な発掘調査ではなく採集された資料です。頭川、頭の川と書いて頭川っていいますが、1974年に富山県の考古学会の会誌に報告されたとき、僕大学の１年でしたが、すぐ買いまして、見てひっくり返りましたね。新潟でも天王山式土器は当時、滝ノ前遺跡とか、わずかしか知られていなかったのですが、図面を見るとまるで下越の土器みたいなのがまとまって出てきました。しかも同時代の地元・北陸の土器がほとんどないんです。当時私は弥生よりも縄文や旧石器に関心を持っていましたが、これには驚いた記憶があります。

それから20年余りたってから、現在は同じ高岡市になりますが、少し内陸側に入った地点にある下老子笹川という遺跡です。ここは大規模な発掘調査がされて、弥生時代後期の集落が検出されました。この遺跡の一角でややまとまって天王山式土器が発見されました。スライド30の右上の土器は、頸の部分に菱形を何重にも重ねた文様があるんですね。この土器の拓本を採って、とある著名な某大学のＫ先生にお見せしたら「えっ、これは北海道の恵山式土器じゃないか、石川君！」って叫びました。それほど北海道の続縄文土器にそっくりなんです。この頸の部分だけ見たら、誰もが続縄文土器というでしょう。口縁部の形や文様からみて天王山式土器としてよいのですが、北海道との関係を考えないわけにいかないでしょう。

ではこの下老子笹川遺跡で、天王山式土器がどんな出方をするかというと、報告された土器の出土地点を点検してみますと、２か所だということが分かります（スライド31）。直径200～300mほどの範囲に北陸の地元の土器を伴うムラが広がっていまして、その中と隣接地の２か所から見つかりました。土器は多数が出土するのではなく、ぱらぱらとこの範囲にまとまるのです。これをどのように考えればいいのでしょうか。私はもっとも簡単な考え方をしていまして、下越から舟に乗ってやってきた人びとが、富山の高岡界隈の人々がムラを構えるところに出かけて行って、そこでさまざまなモノや情報の交換をしているのではないか。そしてまた戻ってくると。富山の薬売りの逆を考えたらどうでしょうか。地元のムラが近くにない頭川遺跡（スライド30）のような地点は、下越の人々の上陸地点にほど近いところでキャンプをしたのではないか。下越の人びとが往来していろんな交渉や交易をしているのだろうと推測しています。その足跡、滞在地に天王山式土器が残されたのだと思います。

スライド32は、私が昔、1988年にとった拓本、図面ですが、先ほど紹介した加賀市の橋立大野山遺跡の土器片です。土器自体が下越方面から持ち込まれた最も西の例です。

その下の石鏃は大阪府高槻市にある芝生遺跡の発掘で見つかったアメリカ式石鏃です。「アメリカ式」なんておかしな名前ですが、明治年間の1880年代に石川県の河北潟脇の大根布というところでこれと同じ形の石鏃が見つかった際に、アメリカ原住民が使う矢じりとよく似ていたのでこの名がつけられたのですが、もちろんアメリカとは何の関係もありません。東北から新潟にかけて天王山式土器に伴って発見されます。『新版古代の日本』という角川書店の本の中に鮮明な写真が収録されていますが、お手元のプリントには、私が作成した輪郭だけのスケッチを原寸で載せました。私は1994年に実物を見せてもらったのですが、驚きました。この石鏃をつくるのに用いた石材が下越の石なんです。とても特徴的なので、すぐ下越の珪質頁岩とわかります。しかも、両面の付け根の部分にアスファルトがごくわずかですが付着しています。石材が下越ので、アスファルトが付いてる。もうこれは下越から行ってるとしか考えられません。ですから、下越から直接ここまで行ったか、それともリレー式でだったのかは決めかねますが、天王山式土器に伴うこの矢じりが、下越から大阪までもたらされたのです。ずいぶん遠くまで行ったものです。

では、下越の人びとは何を手に入れるためにこん

な遠方まで出かけたのでしょうか。いくつも可能性があると思いますが、私は１つ有力候補が鉄の道具だと考えています(スライド33)。この天王山式の弥生時代後期前半期というのは、西日本から中部地方、関東一帯で一斉に石の道具が姿を消します。ものを切ったりする利器が、石器から鉄器に劇的に移り変わる時期にあたります。鉄器とその素材は、すべて朝鮮半島の東南部に由来するものなんです。それを入手するために、下越の天王山式土器を使う人々は北陸に行った。北陸まで行けば、山陰、北近畿辺りの人が往来していますので、そこで鉄の道具を手に入れることができたのだと思います。

実際に、東北一円、新潟でもそうですが、この天王山式土器の時期になりますと、アメリカ式石鏃など矢じりは消耗度が非常に高いので、そういうものには鉄は使わないので、石の矢じりは残りますが、木を伐採する石斧は急速に数を減じています。石斧の発見数の減少から東北地方でも鉄斧が普及する様子を知ることができます。それ以外にもいろんなものを入手するために、この下越の人々が躍動しているのだろうと思います。

高地性集落

ちょうどその時期に、丘陵の上にムラを構える古津八幡山遺跡が出現し（スライド34)、弥生時代の終わりまで、200年余りにわたってムラが継続します。丘陵の上に住まいを集め、その周囲に幅や深さが２ｍほどある濠をめぐらします。高地性集落と言います。先ほども触れたように、ここに住まう人々は水田稲作農耕民ですから、こんな丘陵の上に住むのでは水田経営をするにはとても不便なはずです。同様の遺跡は新潟県内の各所にあって、古津八幡山遺跡に限ったことではありません。先ほど、新潟県で早い段階に住居が見つかった例として、斐太遺跡群という遺跡名を挙げました。新井市の高田平野西縁の丘陵上に、古津八幡山遺跡と同じように大規模なムラが築かれ、古津八幡山遺跡と同じように、ムラの周りに濠をめぐらしています。この２遺跡以外でも、上越市の裏山遺跡、三条市の経塚山遺跡など平野部を望む各地の丘陵上に高地性集落がつくられ、その最北端が村上市の山元遺跡です。山元遺跡に立つと阿賀北の新潟平野を一望できます。丘陵上であればどこでもよいわけではなく、とても眺望に優れている点も共通しています。

では、なぜ高地性集落をつくるのか。それにはやはり相応の理由があるはずです。まず考えられるのは社会的緊張です。ムラどうしの争いからムラを守るという理由が考えられます。弥生時代後期でも後半に北陸で高地性集落が目立つので、これは中国の『後漢書』とか『魏志倭人伝』とかという中国の史書に、後漢の終わりごろ、紀元後２世紀後半に「倭国、大いに乱れる」とか「倭国乱れる」という記事が出てきます。それを彷彿とさせる状況と言えるでしょう。低地にムラを構えてしかるべきなのに、丘陵に山の上にムラを構える。それが３世紀後半から４世紀にかけて、古墳時代になると、ふたたび平場に戻ります。古津八幡山遺跡は200年余りの長い期間丘陵上にムラがありますが、他は100年にも満たない期間のようです。私は、こうしたムラどうしの争いが意識された社会的緊張こそが高地性集落が出現する最たる理由だと考えます。でも、それにしては争いに用いる武器類が出てこないではないし、濠の外側に土塁を設けるのではムラの中を守る防御施設たりえないから、防御が最たる理由だとは考えられないという意見もあります。そうした主張には、私は次のように応えます。中世の山城や城館でどれだけ武器が出てくるのか。武器などまず出てこないにもかかわらず、それらを誰もが争いに備えた施設だと考えている。なぜか。それは文字記録にムラどうしの争いや記されているからだと。また、社会的緊張があったからといって、ただちに集団間の組織的争いがあったとは限らない。それに備えることこそが重要と意識されたと考えられないだろうか、と。ここにムラがあるということを周囲に示すための施設だとか、ムラびとが集まって共同で環濠を掘削することによってムラびとの結束を図るのだという意見もあります。でも、それでは弥生時代後期、多くの場合は後期後半という一時期に限って高地性集落が造営されることの説明ができません。

北陸などいろんな地域の人びとと交流しているのだから社会的緊張などなかったのではないかという疑問もあるかもしれません。しかし、各地の情報を知るがゆえにムラの防御を確かなものにすることもあるでしょう。それから北陸では後期後半に高地性集落が増えると言いましたが、この時期は丘陵上の遺跡以上に平野部の遺跡＝ムラが急増し、大規模化したことが分かっています。いわゆる人口圧の高まりが社会的緊張をもたらしたことも考えられます。

後期後半に現れた交流の変化

古津八幡山のムラの後半の時期に話を進めましょう。古津八幡山遺跡でもこの時期の資料が豊富に出

土しています。この遺跡で発見される後期後半の土器を見てみますと、東北的であり在来的でもある天王山式の流れをくむ後継者の縄文を施した土器群と、北陸に由来する無文の土器が明瞭となります。後期前半の天王山式土器の段階では、ほぼそれのみでしたが、北陸系土器が急増しているのです。さらに両者の特徴を兼ね備える土器がつくられるようになります(スライド35)。いわゆる折衷現象が起きています。

この遺跡だけではなくて、新潟県域全体を見ても、弥生時代後期後半になりますと、北陸、加賀・能登、富山県方面に由来する土器だけでなく、住居形態や墓も北陸系となります。こうした北陸系に由来する文化要素が著しく顕著になります(スライド36)。圧倒的多数派になると言っていいでしょう。古津八幡山遺跡が、そうした北陸に由来する文化世界の拠点になったと言っていいでしょう。

北陸に由来する文化要素は、新潟県内にとどまらずさらに東方の地域でも濃厚に見られるようになります。例えば会津盆地のど真ん中に、湯川村桜町遺跡という集落遺跡があります。後期後半に突如出現した集落ですが、天王山式土器の流れをくむものがある（スライド37）一方で、北陸に由来する土器も明瞭になっています。それどころか、それまでは福島方面では、ムラは一時期の住居数軒にとどまるごく小規模なのが基本だったのですが、この時期から住居十数軒の大形のムラを構えるようになります。住居の構造も、それまでの竪穴住居、つまり当時の地表を掘り窪めて住居の床を設営するものから、地表面に床を設ける平地式住居が主流となります。住居の周囲に溝を巡らして、雨水や湿気が住居内に入らない工夫も始まります。それからお墓も、四角く溝を巡らして墓地を区画する方形周溝墓という墓の形式が突如登場します。北陸に由来する土器、住居、墓、それからムラの規模、こういうものが激変するのです。後期後半の北陸に由来する新たな文化の東方波及は、新潟平野にとどまらず、会津盆地にまで波及します。後期前半には、下越から北陸へと人々が往来していたのですが、後期後半になると人と文化の往来の流れは180度逆転したことになります。

北陸からの文化的影響だけではなく、さらに西方の地域との往来や物資の流入がみられます。いくつか拾い上げてみましょう。柏崎市の開運橋という所で、かつて工事中に採集された１個の壺があります（スライド38中央）。これは1987年に刊行された『柏崎市史資料集Ⅰ』に収録されていたのですが、その図面をみて私は本当に驚きましたね。これは北部九州の壺なんですよ。当時、北部九州の弥生後期の土器は、北陸はおろか、山陰でも発見されていませんでした。直線距離にして約800㎞も遠方の九州の土器が新潟で出ていたんです。最近では山陰地方で北部九州の弥生後期の土器や、さらに朝鮮半島からの土器もみつかっていますが、北陸ではいまだに類例がありません。ただ、これは工事中の発見ですので、気を付けなくちゃいけないのは現代の持ち込み品が紛れ込んだ可能性はないかということです。時々こういうことがあるんですね。ところがこの土器は、柏崎で戦前から厳格な先生について考古学を勉強された方が採集されていますので、これは問題ありません。

次に、スライド38の右側は、上越市の裏山遺跡という高地性集落で見つかった、田んぼを耕したり、土を掘削するのに使う鋤（スコップ）に付ける鉄の刃先です。これは、九州に一番例が多い。最近、山陰でもだいぶ出てきましたし、北陸でも何例か出てきましたか。遠く九州方面にまで由来をたどることができる。

スライド39は旧寺泊町の屋鋪塚という遺跡です。小高い丘陵の上に１つだけ方形周溝墓が見つかりました。方形に溝を掘削して囲った墓の中央に非常に深い墓穴を掘り、しかも一番底に棺を置く部分を、さらに深く掘る。そしてこの中に、これ壊れちゃってますけども、壺を置く。これも北近畿に特徴的な深さ１ｍもある墓穴を掘り、その中央に木棺をしつらえています。方形周溝墓の周溝の四隅が途切れるのは北陸の特徴ですが、遺骸を埋葬する中央の墓穴はとても深く、小壺を死者に添えています。これは北近畿の丹後半島あたりに類例のある埋葬法です。しかも周溝から出てきた土器をみると、北陸系のものが主ですが、丹後あたりと思える土器もあります。

さらに、朝鮮半島に由来する鉄斧が県内で確認されています。三条市の険しい丘陵上にある高地性集落の経塚山遺跡では板状鉄斧、旧和島村の姥ケ入南遺跡の方形周溝墓では副葬品として袋状鉄斧が発見されています(スライド40)。この２点とも朝鮮半島から、リレー式にでしょうけれど、もたらされたものです。東アジアと新潟界隈の人が間接的にであれつながりを持っているとわかります。長野県内の千曲川流域のいくつもの遺跡で朝鮮半島系の青銅器や鉄器が発見されていますが、これらも上越から峠を

越えて長野側に運ばれたものです。

南北の交流

古津八幡山遺跡や下越では大陸から持ち込まれたことが明らかな実例はありませんが、一連の習俗や物流ネットワークの中にあることが分かります。スライド41は古津八幡山遺跡と村上市山元遺跡の墓から見つかった副葬品です。古津八幡山遺跡では方形周溝墓が検出されており、木棺内から鉄剣が副葬されてました。姥ケ入南遺跡でも鉄斧とともに鉄剣が副葬されています。墓に鉄製武器、特に鉄剣を副葬する習俗は、朝鮮半島に由来するものです。北部九州、山陰、北陸と、リレー式で伝わって、長岡や新潟・村上まで波及してきたんです。ところが、古津八幡山遺跡では、面白いことに打製石鏃が副葬されていました。同じ武器でもこれは大陸系ではなく、打製石鏃を死者に添える習俗は北海道から東北にかけてみられる習俗です。西方と北方に由来する葬式にまつわる習俗が共存しているのです。とても面白いことだと思います。

村上の山元遺跡では（スライド43～45)、筒形銅製品や、鉄製短剣、ガラス玉が副葬されていました。ガラス玉の原料は大陸です。つくってるのはどこかわかりませんが、おそらく西日本のどこかでしょう。九州でも弥生時代後期になると大量に副葬されるようになるものです。鉄製短剣は、刃がとても薄いつくりでしたが、鉄剣であることに違いはありません。筒形銅製品は近畿周辺か西日本ですね。こうした西日本の弥生後期社会で流通した物品が村上界隈の人びとの手にわたり、死後、墓に副葬されます。ところが、これらの副葬品を納めた墓が東北地方在来の形式なんです。ガラス玉72点を副葬した墓は土坑墓です。土壙墓の底面は丸みをもっていますので、板を棺形に組む形式の木棺ではなく、樹皮で棺形をつくるか、場合によっては遺骸を布などで包んで埋葬する方式でした。鉄剣が見つかったのは土器棺でした。これは乳幼児用の遺骸を壺の中に納めるものです(スライド45)。古津八幡山でみたように打製石鏃を入れるのも東北から北海道に見られる習俗です。ですから、山元遺跡の墓には、東北ないし北方系の要素と西日本の要素が共存しているんです。これが下越の特徴だろうと思います。

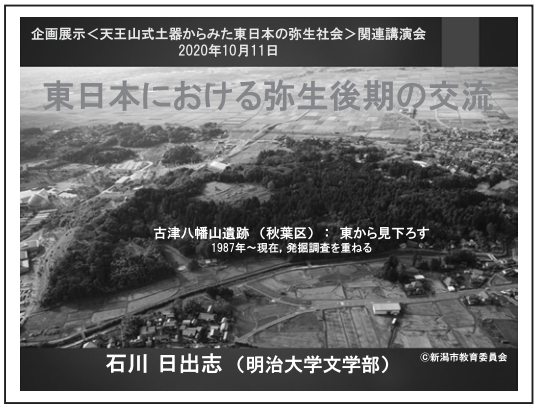
山元遺跡の居住域からは、なんと続縄文土器が出ています（スライド46)。江別（後北Ｃ１）式土器という型式で、現在までのところ最も近い出土地は津軽の海岸部です。きっと男鹿半島あたりでも遺跡を形成しているのではないかと想定できますが、まだ見つかっていません。そうした北方から、続縄文土器と呼ばれる北海道に住まう人々が使う土器が新潟県の沿岸部に点々と出てくるわけです。しかも、旧中条町の兵衛遺跡、それから旧豊栄市の椋遺跡、旧巻町の南赤坂遺跡では、特にまとまって出てきますので、おそらくしばらくここに滞在しているはずです、北方系の人たちが。北海道からかどうかわかりません。少なくとも津軽辺りから舟で海岸沿いを南下して新潟の海岸部でキャンプしているのでしょう。

こういった北あるいは西のものが錯綜して出てくるというのは、当然ながら、新潟県だけのことではありません。南隣の長野県に行きますと、こんなものが出てきます(スライド47)。長さ74ｃｍの鉄剣です。Ｘ線観察しますと、これ、握りのところにこういう渦巻飾りあります。これは朝鮮半島東南部に特徴的なものですので、朝鮮半島製品の可能性が高いとみています。特注品だという意見もあります。特注品だったらすごいですね。朝鮮半島に特注であるならば、長野県北部の弥生人と朝鮮半島の鉄器製作工人とが直接交渉していることになりますからね。スライドの鉄矛は長野県上田市の上田原遺跡で出土したもので、これも朝鮮半島製品です(スライド48)。この鉄斧も、それからこの青銅のバックルも朝鮮半島製品です。私は、これら朝鮮半島製の文物は、長野の人たちが単独で手に入れたわけではないと思っています(スライド49)。長野の人は上越の人々と交流でつながっている。上越の人は富山や能登の人びとと共同する。そういう日本海側各地が連携した物流のルート・ネットワークがあるのだと考えます。日本海というのは、地球規模でみた場合は大きな湖のようなもので、「内海」といっても過言ではありません。対馬海流が朝鮮海峡から津軽海峡方面に流れ、沿岸部にはその反流が流れていますので、舟で往来するにはとても有効な海路と言えます。新潟界隈もそういう物流ネットワークの中に組み込まれていたのです。

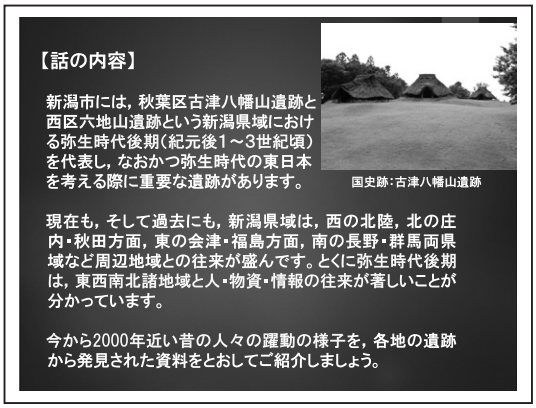
この時期ですと、日本海側を西から東に向かう人々は準構造船を用いたことが分かっています。丸木舟を前後に組み合わせ、その上に板を組み合わせて大形化した構造の舟です（スライド50)。一方、北方から南へ向かう人々は、縄文時代由来の丸木舟による移動だと思います。こういう異なる構造の舟が新潟の、私たちの眼前を行き交っている。そんな情

景を私は脳裏に描いています。

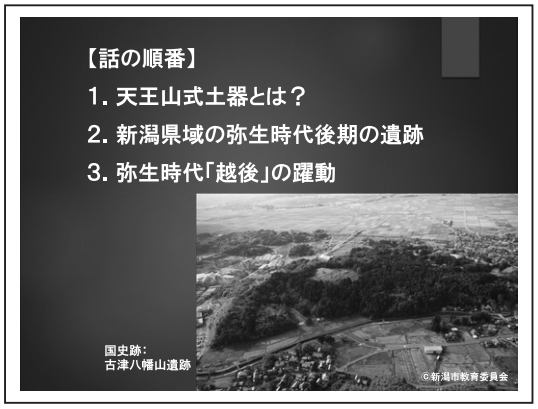
最後に、古津八幡山遺跡の時代は、『後漢書』や『魏志倭人伝』（三国志魏書東夷伝倭人条）に重要な記事が出てくる時期にあたります。北部九州の弥生時代後期の有力者の墓地から後漢王朝の中枢から入手した銅鏡や鉄刀が多数発見されます。それは『後漢書』に建武中元二（西暦57）年に、倭の奴国の最有力者が光武帝に遣使して「漢委奴國王」金印を下賜されています。その50年後にも、安帝永初元（西暦107）年には倭国王師升等が遣使し、景初三（西暦239）年には倭国の女王卑弥呼が魏に使いを出しています。この古津八幡山遺跡の時代が、日本列島で生きた人々が東アジアの強大な政権と本格的な交渉を開始した時代です。古津八幡山遺跡を訪れると、天気が良ければ必ず佐渡島が見えるかを確かめます。それとともに私は心の中で、はるか西方を見やり、800～900㎞程のかなたではすでにそんな動きがあったことも思い浮かべています。



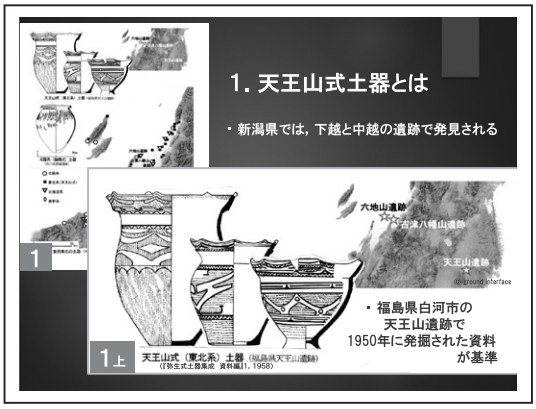
スライド 1



スライド 2

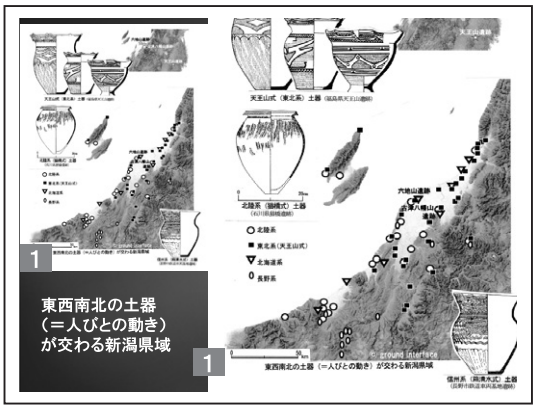


スライド 3



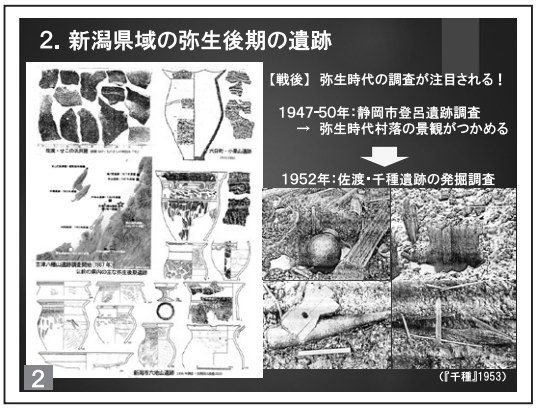
スライド 4

スライド 5

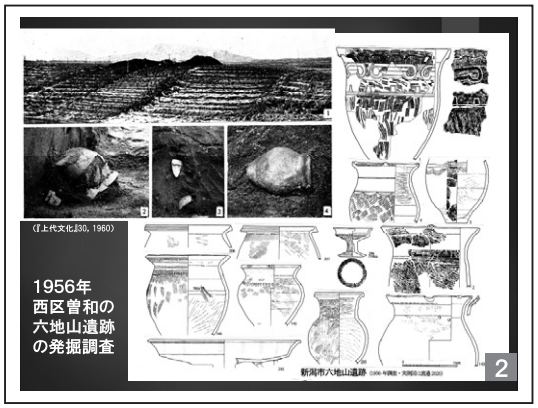


スライド 6

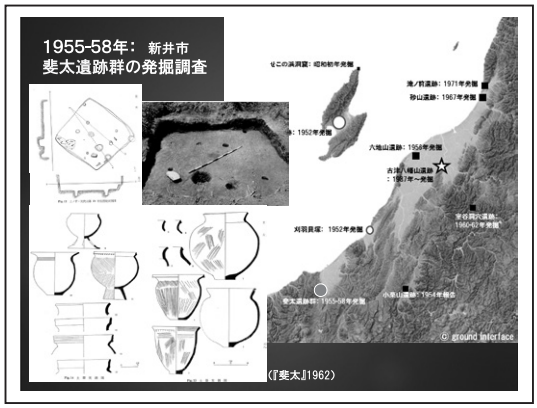
スライド 7



スライド 8



スライド 9

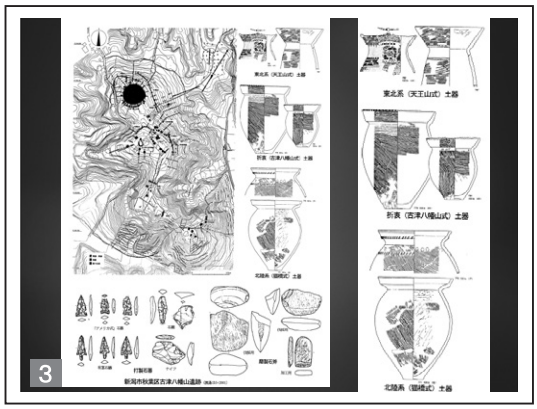


スライド10

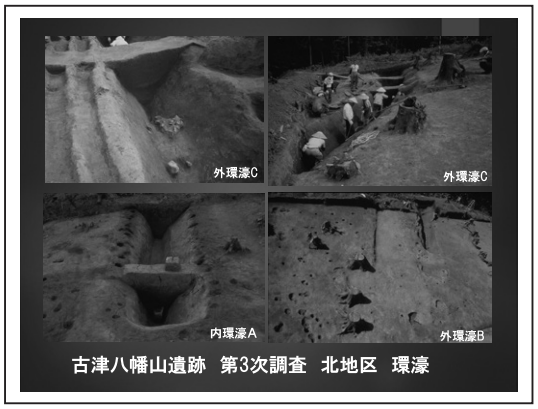
スライド11

スライド12

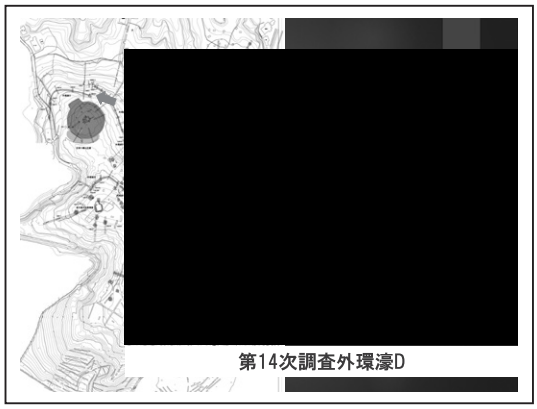
スライド13



スライド14



スライド15



スライド16

スライド17

2005(平成15)年に，国史跡に指定

【指定理由文書】（抜粋）

1987年からの調査によって，日本海沿岸として最北に位置する弥生時代後期の大規模な高地性の環濠集落や，新潟県最大規模の古津八幡山古墳をはじめとして，弥生時代から古代にかけての複合遺跡であることが判明した。

弥生時代後期後半の大規模な高地性環濠集落であり，新潟平野における弥生時代後期の集落の様相や他地域との交流の実態を示す。

また，この時期，高地性集落が日本海沿岸にも点々と認められるようになり，本遺跡は現在のところ最北に位置し，西日本を中心とした社会の変化の影響が，この地域にも及んでいたことを示している。

このことは，集落の廃絶後，同じ場所に前方後方形周溝墓を経て大型古墳が造営されたこと，この地域が日本海沿岸における古墳分布の北限であることと関連して興味深い。

このような本遺跡は，弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての北陸地方の社会情勢やその変遷を考えるうえでも，きわめて重要である。

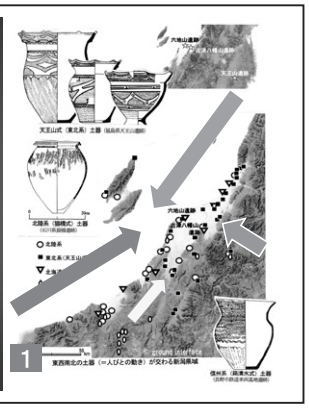
よって史跡に指定し，保護を図ろうとするものである。

スライド18

3. 弥生時代「越後」の躍動

弥生時代後期の越後は，東西南北の諸地域と，密な上流を重ねた。

それは，直接には前段階(中期後半：BC1世紀後半)の動きがもとになっている。

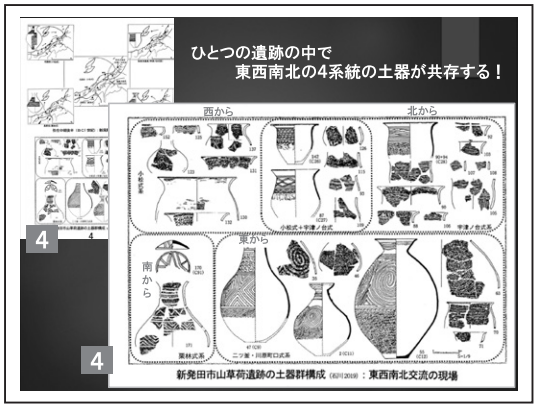


スライド19

新潟県内で東西南北の4系統の土器が行き交う

スライド20

ひとつの遺跡の中で東西南北の4系統の土器が共存する！

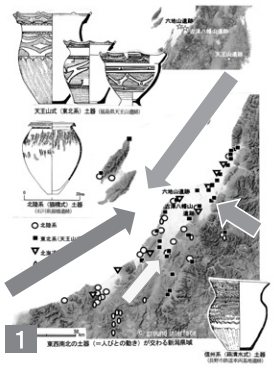


スライド21

3. 弥生時代「越後」の躍動

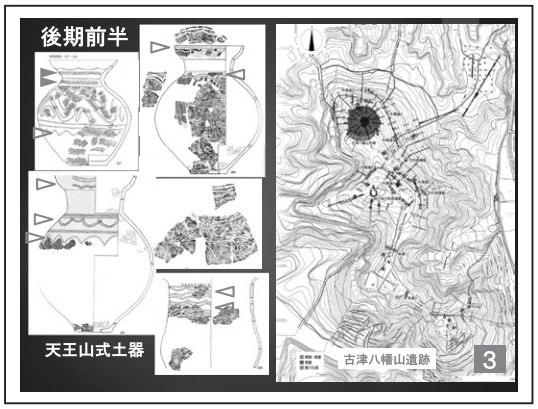
弥生時代後期の越後は，東西南北の諸地域と，密な上流を重ねた。

それは，直接には前段階(中期後半：BC1世紀後半)の動きがもとになっている。



スライド22

後期前半

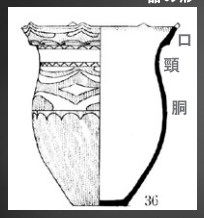


スライド23

天王山式土器

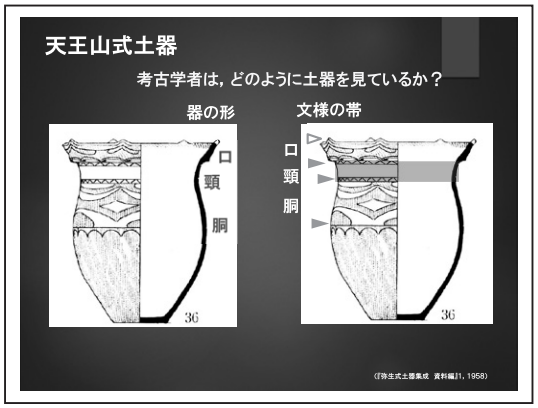
考古学者は，どのように土器を見ているか？

器の形

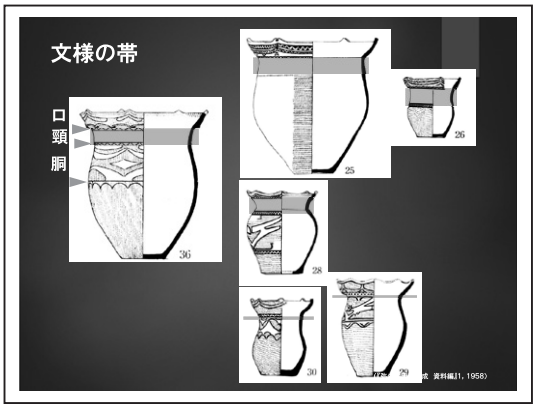


(『弥生式土器集成　資料編1, 1958)

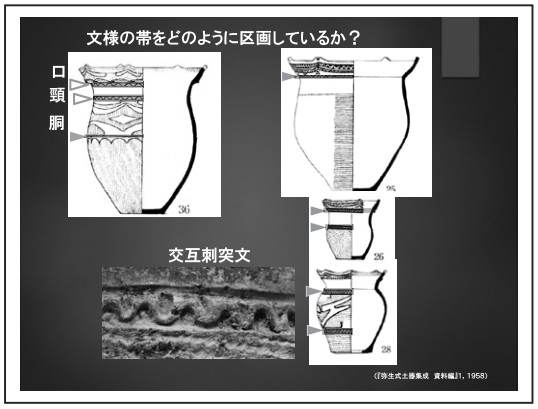
スライド24



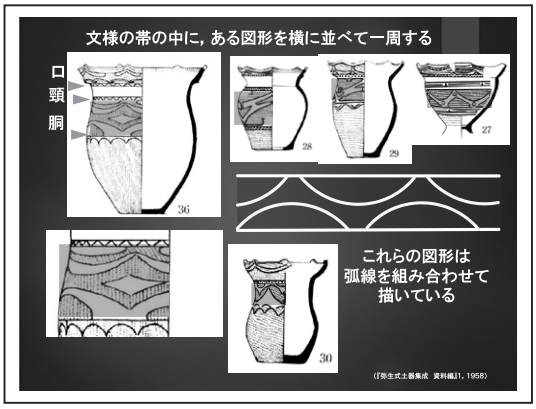
スライド25



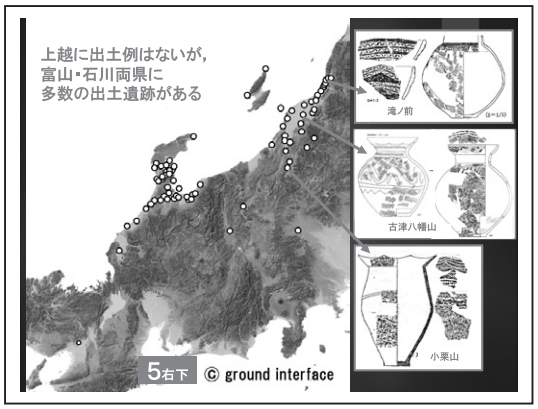
スライド26



スライド27



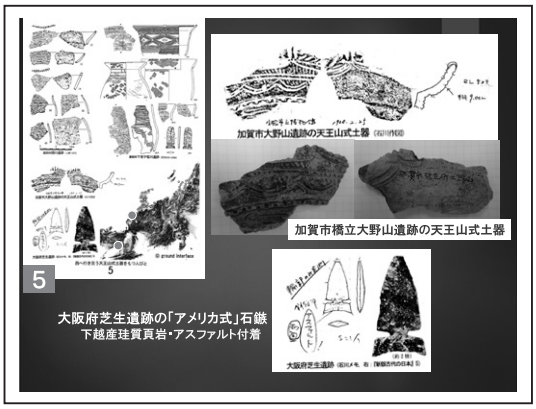
スライド28



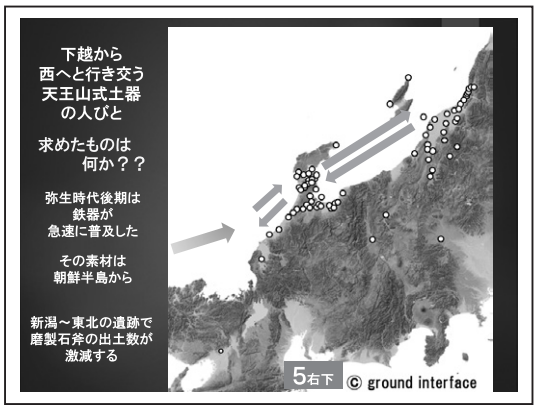
スライド29

スライド30

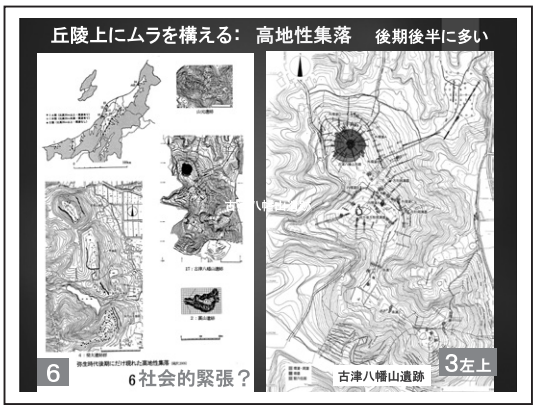
スライド31



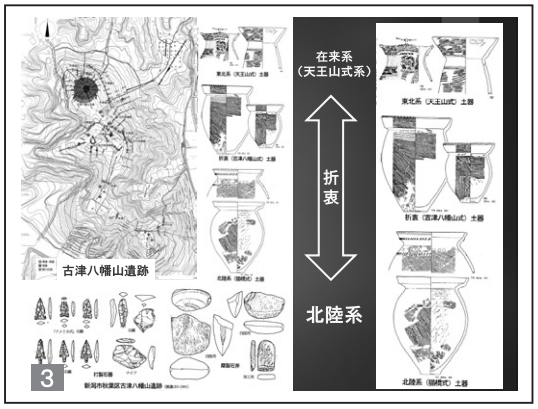
スライド32



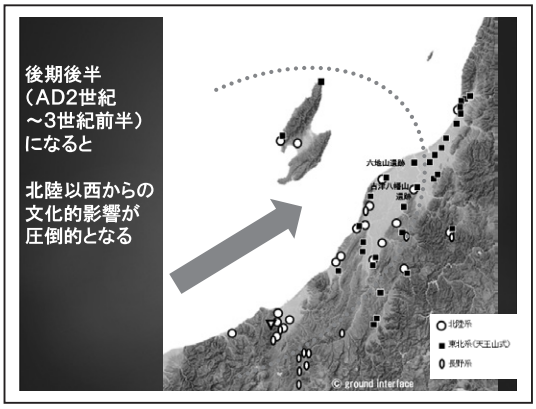
スライド33



スライド34



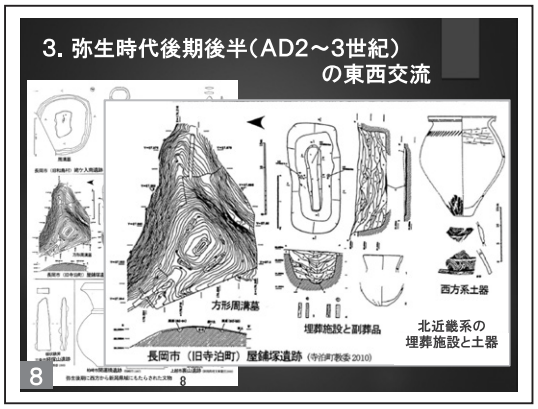
スライド35



スライド36

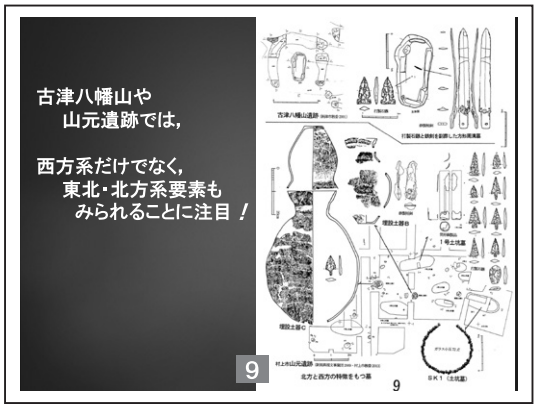
スライド37

スライド38

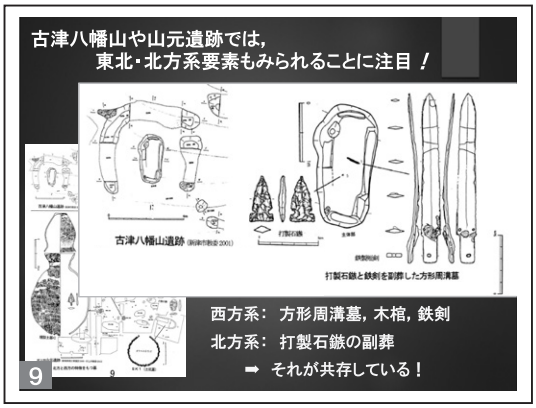


スライド39

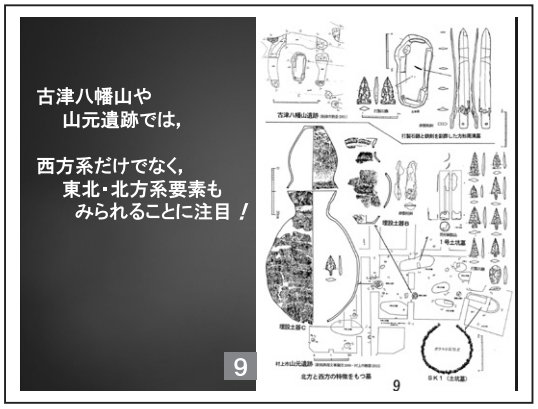
スライド40



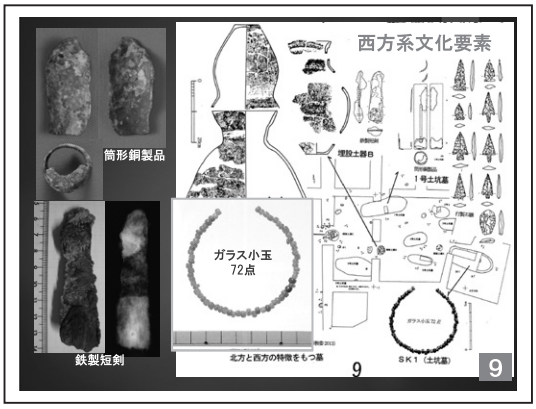
スライド41



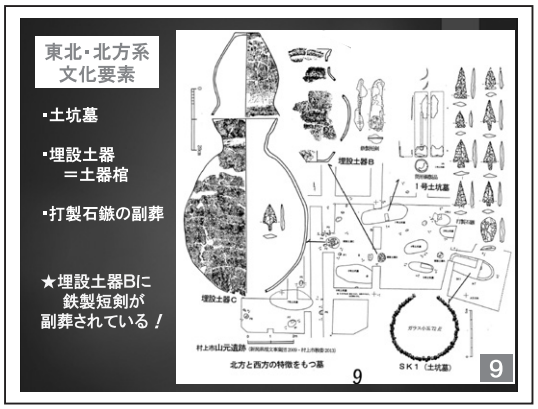
スライド42



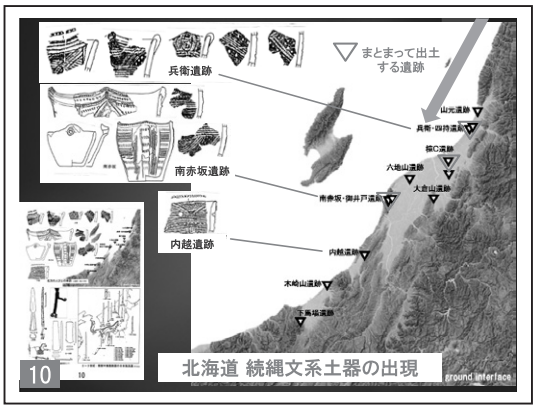
スライド43



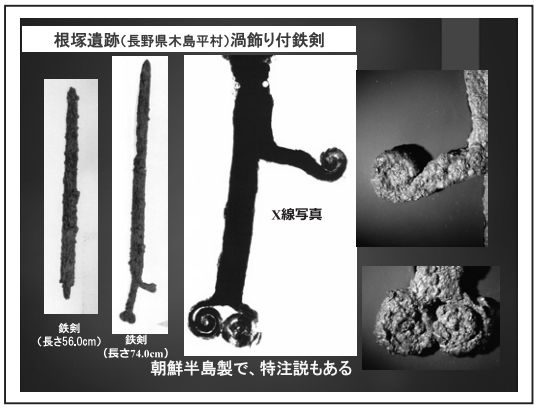
スライド44



スライド45

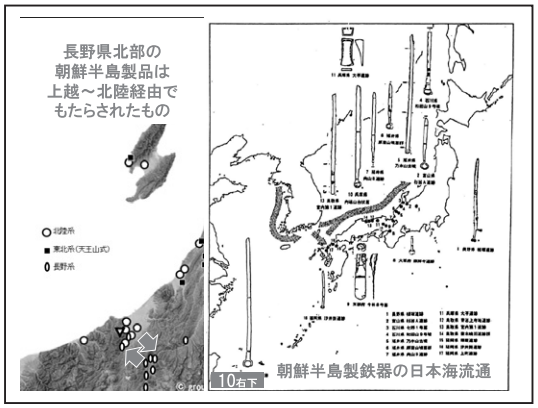


スライド46

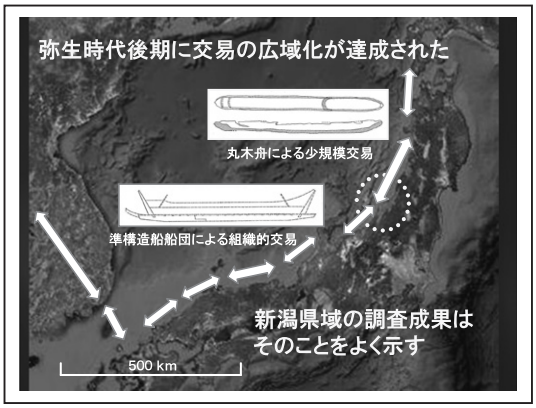


スライド47

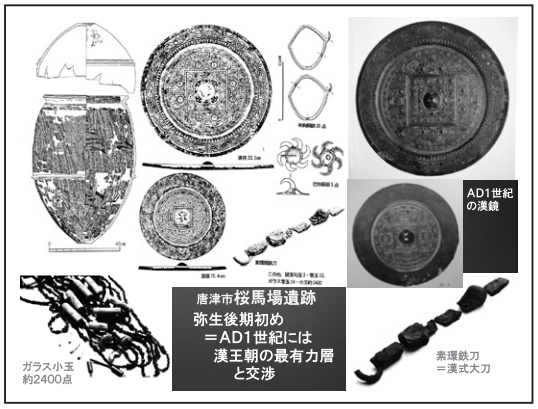
スライド48



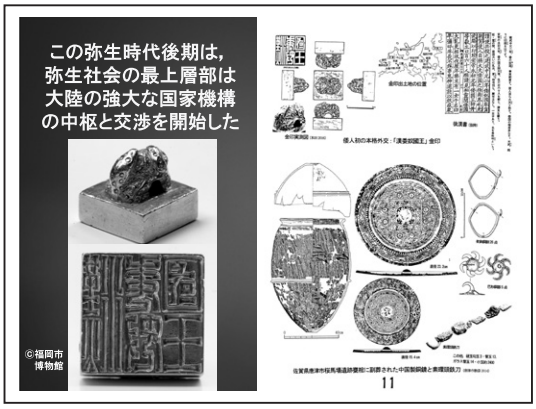
スライド49



スライド50



スライド51



スライド52

スライド53

写真・図出展一覧　　※以下の出典から引用し，加筆・編集を施した。

スライド１・３・12・13：写真・新潟市教育委員会提供
スライド２・27・30・37・44・47・48・53：写真・石川撮影
スライド４・６・７・８・10・19・22・29・35・36・46・49：地図・Ground Interface
スライド４・24～28：図・坪井清足1958「福島県白河市久田野天王山遺跡の土器」『弥生式土器集成１』弥生式土器集成刊行会
スライド５：図・坪井清足1958（前掲）、写真・杉原荘介1964『日本原始美術３ 弥生式土器』講談社
スライド６・19・22：図・坪井1958（前掲）、橋本澄夫1966「北陸」『日本の考古学Ⅲ』河出書房新社、
笹沢浩1976「第一編考古学編 第三章弥生式時代」『上水内郡誌・歴史編』
スライド７：図・渡邊朋和2020「新潟市西区六地山遺跡出土弥生土器の再検討」『新潟市文化財センター年報』第７号、中川成夫1954「南魚沼郡六日町小栗山出土の土器」『越佐研究』第７集、写真・斎藤秀平1937『新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告』第７輯 新潟県
スライド８：図・渡邊2020・中川1954（前掲）、写真・新潟県教育委員会1953『千種』
スライド９：図・渡邊2020（前掲）、写真・寺村光晴「越後六地山遺跡」『上代文化』第30輯
スライド10：図・写真・駒井和愛・吉田章一郎1962『斐太』慶友社
スライド11：図・岩波書店2011『図書』第747号、関雅之1972『滝ノ前遺跡』村上市教育委員会、伊東信雄1955「東北」『日本考古学講座』３、石丸和正ほか2003「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相」『三面川流域の考古学』第２号、写真・杉原1964（前掲）
スライド13～15・17・23・35：図・写真・新津市教育委員会2001『古津八幡山遺跡発掘調査報告書』
スライド16：写真・新津市教育委員会2004『八幡山遺跡群発掘調査報告書―第11・12・13・14次調査―』
スライド20・21：図・新発田市教育委員会2018『山草荷遺跡出土の弥生土器』及び石川作図
スライド29：図・石丸ほか2003、新津市2001、中川1954（いずれも前掲）
スライド30：図・上野章1974「高岡市頭川遺跡」『大境』第５号、富山県文化振興財団2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』、角川書店1992『新版古代の日本５ 近畿Ⅰ』
スライド31：（公財）富山県文化振興財団2006（前掲）
スライド32：図・上野1974、（公財）富山県文化振興財団2006、角川書店1992（前掲）、および石川写真・拓本・メモ
スライド34：図・新潟県教育委員会2009『山元遺跡』
スライド37：図・福島県教育委員会2005・2011『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告』５・10・11
スライド38～40：図・新潟県教育委員会2010『立野大谷製鉄遺跡・姥ケ入製鉄遺跡・姥ケ入南遺跡』、新潟県教育委員会・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団2000『裏山遺跡』、寺泊町教育委員会2010『屋鋪塚遺跡』、三条市教育委員会『内野手遺跡・経塚山遺跡』、柏崎市史編さん室1987『柏崎市史資料集考古篇１』柏崎市
スライド・41～45：新潟県教育委員会2009（前掲）、村上市教育委員会2013『山元遺跡』
スライド46～49：前山精明1999「続縄文」『新潟県の考古学』新潟県考古学会、石川日出志2014「弥生時代後期・佐久市北一本柳遺跡出土鉄斧の歴史的意義」『佐久考古通信』113、林大智2002「石川県における鉄器の流通と社会の変革」『鉄器の導入と社会の変化』（公財）石川県埋蔵文化財センター、木島平村教育委員会2002『根塚遺跡』
スライド50：大阪文化財センター1987『久宝寺南（その２）』、千葉県史編纂委員会 2000『千葉県の歴史資料篇・考古 1（旧石器・縄文時代）』
スライド51・52：唐津市教育委員会2014『末盧国遺跡群総括報告書』、本田浩二郎2016「国宝金印「漢委奴國王」の鈕孔に関する視点」『福岡市博物館研究紀要』第25号、石原道博1985『新訂魏志倭人伝』岩波文庫

■令和２年度 企画展２関連講演会（第２回）

天王山式土器からみた東日本の弥生社会
－ 古津八幡山遺跡成立期の動向 －

渡邊朋和（新潟市文化財センター）

■はじめに

皆さん、こんにちは文化財センターの渡邊です。今回の企画展「天王山式土器から見た東日本の弥生社会―古津八幡山遺跡成立期の動向―」を担当させていただきました。

講演の前に少しだけ話をさせていただきますが、私は30年くらい前に、初めて古津八幡山遺跡の発掘調査を行う機会がありました。そこで、今日の主要なテーマである天王山式土器に初めて触れたのですが、２～３年ほど前から、今までは天王山式土器を真面目に研究していなかったのではないかなということを痛切に感じています。

今年の３月に刊行した『新潟市文化財センター年報』第７号で、文化財センター近くの西区六地山遺跡出土の弥生土器を再整理し、報告をさせていただきました。六地山遺跡は、1956年に長岡市立科学博物館が発掘調査した遺跡で、残念ながら主要な遺物は現在新潟市には所蔵されていません。それを2017年の企画展前に借用し、接合・実測などの再整理をし、資料報告をしたのですが、その際に、いろいろ新たな発見があって、この再整理をきっかけとして、見解を変えたことなどを中心に、話をさせていただきたいと思います。

それと、あらかじめお断りしておきますが、今日の講演会は、当初予定としては13時半から15時になっていました。講演後に展示解説を予定していたのですが、今日お集まりの皆さんが大勢展示解説に参加されると、非常に密になってしまいますので、できればその内容も含めて、講演会の中で話をさせていただきたいと思います。ですので、講演は展示解説の時間も含めて、約２時間ぐらいになるかと思いますので、ご了承下さい。

実は、今日は非常に話しにくい状況にあります。今日のテーマである天王山式土器を何十年も前から研究されている、福島県の中村五郎先生と、先回ご講演をいただいた明治大学の石川日出志先生がいらっしゃっています。天王山式土器の研究をする上で、必ずお名前の出てくるお２人です。下手なことを言うと批判を受けるというのがもう目に見えているので、非常に話がしにくいのです。自分自身も話をするのがあまり得意ではないので、途中でしどろもどろになるかもしれません。その辺ご容赦いただきたいと思います。

もう一度、文化財センター年報の話に戻ります。実はこの年報の中で最初は、石川日出志さんの天王山式土器研究批判のようなことをかなりストレートにいろいろ書きましたが、編集担当から、「そんなことを書くと失礼だから削除するように。」という検閲が入りまして、だいぶ柔らかく書かざるを得なかったので、そういう話もちょっと出てくるかもしれませんので楽しみにしていて下さい。では、座ってやらせていただきます。

主題として「天王山式土器から見た東日本の弥生社会」、副題として、「古津八幡山遺跡成立期の動向」としてあります。先ほど話をしましたように、新潟市にある国指定史跡古津八幡山遺跡を考える上で、天王山式土器を理解しないと遺跡の全容を正確に語ることができないというのが、今回の企画展を開催したきっかけです。

この画面は、私が今まで行った古津八幡山弥生の丘展示館の弥生時代に関係する企画展のチラシです。合わせて８つの企画展を行ったことになります（スライド２）。副題で邪馬台国の時代と書いてあります。邪馬台国というのは２世紀末から３世紀中頃の話ですが、今回話をするのは１世紀頃の話ですので、厳密にいうと年代が合いませんが、ご容赦いただきたいと思います。弥生時代後期は「奴国」というよりも、「邪馬台国」の方が親しみがあると思い、そのようにしてきた経緯があります。これまで、新潟県を取り巻く地域の弥生時代・弥生文化、それから鉄器などについて企画展を行ってきたのですが、今回は総括ということで、天王山式土器をもうちょっと広い視点で見てみようというのが企画展の主題になっています。

■講演のあらすじ

事前に、今日どのような話をするのかということを述べさせていただきます（スライド３・４）。

（スライド３:①）古津八幡山遺跡では、天王山式系列土器（広義の天王山式土器）はありますが、弥生時代の中期の土器は１点も出土していないということです（注１）。古津八幡山遺跡では、北陸で中期（畿内第Ⅱ様式・第Ⅲ様式・第Ⅳ様式）に編年される土器が１点も出土していない事実は重要です。

天王山式土器の研究史の話をすると長くなりますが、天王山式土器がどの時期かということだけ少し話をさせていただきますと、今日、来られている中村五郎さんは中期後半と編年的に位置付けていらっしゃいます。一方､石川日出志さんは20年ほど前に、主に北陸の資料を集成されて、弥生時代中期の土器と出土しているというのは、実は一緒に出ているものじゃなくて混在しているものだから、中期ではなくて後期にこそ伴うという論文を書かれました。現在は、多くの研究者の方々は、石川説に拠って、天王山式土器後期説ではないかと思います。それを補強するのが、私は古津八幡山遺跡の発掘調査成果ではないかと思っています。

（スライド３:②）再び古津八幡山遺跡のことになりますけれども、古津八幡山遺跡では、様々な遺構が見つかっています。竪穴住居とか環濠の中から、天王山式土器と地元の土器と共に、北陸系、石川県とか富山県とかで作られたものと類似する土器が一緒に出土していますが、これらは、北陸の編年で言うと後期に属するものです。古津八幡山遺跡の調査成果から言うと、天王山式土器が後期に併行するということは間違いないと私は思っています。

（スライド３:③）後で詳しく説明しますが、標式遺跡である白河市天王山遺跡の天王山式土器は後期前半の新しい段階に併行すると考えています｡決して、後期の初め頃ではないと思います。

（スライド３:④）この時代を研究する上で重要なのは、弥生時代の中期後半や終末、その後の後期初頭や前半頃の遺跡が少なく、出土している土器も非常に少ないということです。このことが、この時代を研究する上で大きな支障になっています。

（スライド３:⑤）遺跡が少ないという特徴がある一方で、弥生時代の中期の遺跡と後期の遺跡は、継続しない場合が多いように思います。遺跡が断絶している。これは新潟県に限ったことではなくて、東日本全域がそうだと思います。

（スライド３:⑥）今回の企画展は、天王山遺跡で出土している天王山式土器の前段階を主とした展示になっています。後期前半、初め頃ですが、この頃の天王山式系列土器は、弥生時代中期後半の様相、後で詳しく説明しますが平行沈線文系土器の要素が色濃く認められます。

（スライド３:⑦）ある研究者の方は、弥生時代の中期後半までは、各地域で、様々な地域差が認められるけれど、それが後期になると地域差がなくなり、東北一円が天王山式土器という土器分布圏で統一されると言われています。しかし、決してそのようなことはなくて、後期になっても地域によって明確な地域差があると考えています。

（スライド４:⑧）今回の話の中心になりますが、天王山遺跡の天王山式土器の成立以前に、各地域の土器を見ていきますと、非常に似通った文様が地域を越えて出土していることがわかります。このことから、後期初め頃に、極めて広域に人の往来があったのではないかと考えています。

（スライド４:⑨）⑧と同じことなのですが、天王山遺跡天王山式土器が成立する以前の後期前半にはある特定のいくつかの文様が、あえて入れなくていい部分に入れられます。出自・系統の異なる文様が一個体・一文様帯内に描かれる土器があります。元々の土器にある文様に付加的に入れられる文様で、それを私は「キメラ」と言っているのですが、このような現象が見られるのも後期前半の特徴の一つと考えられます。

（スライド４：⑩）例として北陸を上げていますが、北陸の周辺だけでは出自を辿ることができない文様があって、東北北部や北海道南部から、直接・間接的にもたらされたと考えられるような土器も出土しています。それは当然日本海を介してということになると思います。

（スライド４:⑪）最後に、今回はほとんど触れませんけれども、土器だけが流通していたのではなく、背景にある重要なものの一つが鉄器ではないかと考えています。弥生時代後期の遺跡から石器はほとんど出土しません。石器は石鏃やごく少数の磨製石斧ぐらいです。代わりに何を使ったのかが重要です。

古津八幡山遺跡では、50棟以上竪穴住居が見つかっていますけれども、磨製石斧は４・５点しかありません。木を切るのに使用したのは、鉄製の斧でしょう。古津八幡山遺跡では出土していませんが、新潟県内でも何例か鉄製の斧が出土しています。こ

の右側にあるのが三条市経塚山遺跡の板状鉄斧と長岡市姥ヶ入南遺跡の袋状鉄斧です。最近の研究で、朝鮮半島の慶尚南道付近に非常に似かよったものが出土しているということがわかってきました。それから、新潟県ではないのですが長野県北東部の下高井郡木島平村根塚遺跡から出土した柄に渦巻がある剣も、よく似たものが朝鮮半島で見つかっています。釜山市の西側にある金海市良洞里遺跡などです。その頃、国内では鉄の生産はしていませんから、朝鮮半島からもたらされたことは間違いありません。

日本海沿岸では、土器だけではなくて、こういった鉄器なども、日本海沿岸に入ってきているということを念頭において、今日の話を聞いていただければと思います。

ちょっと専門的な話です(スライド５)。一般的向けの講演会で土器型式の話を本当はしては駄目だと思うのですが、少しだけ話をさせてください。今日話をする主体となる内容は、この表の後期前半という時期が中心になります。西暦の紀元前後から１世紀ぐらいの間だとお考えください。

■０_１　プロローグ１

最近、日本海の物流を考える上で興味深い資料が、新潟市江南区道正遺跡の発掘調査で見つかったので、ちょっとだけ紹介させていただきます（スライド６）。古墳時代前期の壺形土器の口縁部にヘラ状の施文具で船を描いたものです。石川日出志さんの講演会で、新潟から北は丸木船、南は準構造船が往来していたという話をされたかと思います。準構造船というのは、丸木船では波を受けたりすると、中に水が入ってしまうので、船体の脇とか前後に板を立てて、水が入りにくくするような構造の船を言います。まさにこの土器は、この準構造船を描いた絵ではないかと思います。ここに一艘、それから左側に簪みたいなのが２つありますけれども、少なくとも３艘の船が描かれているように思います。この棒状のものはオールですが、８本が片側に描かれていますので、左右合わせると16本（16人）になると思います。右側に描かれているのが竪板型準構造船で、左側に２艘描かれているのが貫型準構造船という船です(スライド７)。参考写真とよく似ているのがおわかりになるのではないかと思います。この土器には３艘しか描かれていませんが、こういった船団が日本海、新潟近辺の海を往来していたということを想像することができるとても重要な資料です。古墳時代前期ですから、今日話をする時代よりも200年ぐらい新しい資料ですが、似かよった船が弥生時代後期にもあった可能性も高いのではないかと思っています。

■０_２　プロローグ２　天王山式土器を研究する目的

私は最近、この天王山式土器を少しまじめに研究しているのですが、何でこの研究をしようと思ったのかという話をさせていただきます（スライド８）。

（スライド８：１）先程、話をしましたように、国指定史跡の古津八幡山遺跡の消長を明らかにするというのが、一番の目的です。土器がどの時代・時期のものなのか、古いのか、新しいのかということがわからないと、例えば遺跡の消長の話を考えたとしても、まったく話が逆転をしてしまうことになりかねないので、そうならないために、まず土器の編年、前後関係を明らかにする必要があるということです。

（スライド８：２）それから、ほかの時代でも同様なのですが、日本海に面している新潟県は南北に長いので、各地域のものが入ってきて、それが一緒に使われるというのが特徴です。古津八幡山遺跡もそうですし、海岸沿いの遺跡では特にこの特徴が顕著です。このようなことから、土器の研究をすると、土器そのものだけではなくて、他系統の土器はどの地域から来ているのかというような人の動きまでもが垣間見ることができるということです。

（スライド８：３）あとそれからもう１つ、まじめに研究をするようになったきっかけです。2019年に企画展の準備のために、北陸-富山県・石川県-に一週間ほど資料調査に行きました。その際に見た石川県の能登半島にある鹿島郡中能登町大槻３号墳の土器が妙に気にかかりました。特に気になったのは口縁部の下に入れられた小さな連弧文です。天王山遺跡の天王山式土器は、決してこのような部分に文様は入れないんですね。最初にこれを見た時には、天王山式土器が分布する外殻圏の土器だから、こんな変なところに文様を入れるのかなと思ったら、実はそうじゃなくて、よくよく調べてみると、同じような土器が、青森県とか北海道とかにある。それから各地域の資料の見直しをしたら、似たようなものが点々と日本海沿いにあるということがわかってきました。北方系の要素がダイレクトに北陸まで行っている可能性が見えてきました。

（スライド８：４）それから、先程紹介した六地山遺跡の再整理による新発見です。

（スライド８：５）最後、恩師である磯崎正彦先生の業績です。私が大学１年の時に、この文化財センターに程近い西区（旧黒埼町）緒立遺跡の発掘調査に最初に参加をしたのですが、この調査担当者が磯崎先生でした。磯崎先生は1956年に『上代文化』という雑誌で「天王山式土器の編年的位置に就いて」という論文を書かれています。実は、この論文が出る前には、天王山式土器は弥生時代のどの時期かということが皆目見当が付かなかった。すごく古く言う人もいれば、新しく言う人もいたような状況でしたが、磯崎先生はこの論文の中で、二本描施文具で描いた平行沈線文系土器と天王山式土器が一緒に出土していることが多いから、平行沈線文系土器に近い時期に天王山式土器は編年されるという結論を書かれています。この論文が、私が天王山式土器を研究する１つの大きなきっかけになっていることは間違いありません。最近ちょっと見落とされがちな研究成果ですので、あえて強調しておきたいと思います。

１．研究方法

（スライド９･10）研究方法として、このようなことを皆さんに話をしても面白くないかもしれないのですが、このような研究方法をしていますという話をさせていただきます。考古学の研究者はこんなばかげたことをしていると思っていただければ良いかなあと思います。

（スライド９：１）まず、研究対象とする時期は、天王山式土器の前後ということで、弥生時代中期から古墳時代前期です。

（スライド９：２）研究対象の特徴と制約と書いてありますけど、先ほど話をしたように、この時期の遺跡は少ないと思います。完形土器はなおのこと少ないので、本当に破片資料まで集めないと研究できないような状況です。今回の企画展も一般の展示ではとても不釣り合いな破片資料をたくさん展示しているのは、そういう理由です。それを補う形で、今回イラストをたくさん描きましたので、イラストで何となくイメージできるかなと思います（注２）。

（スライド９：３）あとそれから、研究対象としている地域ですが、北海道から関東までです。現在は約1,000遺跡ぐらいの集成をしています。この集成作業をすることによって、地域性の違いや類似する資料を抽出することが可能になると考えています。今回の展示もそういう中で、私が特に気になった特徴的な資料をいくつか取り上げさせていただきました。

（スライド10：４）発掘調査報告書を調べて、その後に実際に資料調査に行くのですが、現在、富山県・石川県・新潟県は９割以上、実際見に行って調査をしていますし、岩手県も８割ぐらい資料調査を行っています。資料調査はこれからも継続していきたいと考えています。

（スライド10：５）それから研究の方法として、型式学的研究、分布論的研究という話をさせていただきます。型式学的な研究は、考古学に関心のある方は何回も聞かれている話だと思います。一番わかりやすい事例は自家用車です。自分たちにとっては当たり前のようですが、私が子供の頃の車、それから例えば30代の頃の車っていうのは、メーカーが違っていても、何となく年代毎に形が似ていますよね。それは突然そういう車ができるわけではなくて、年代毎に移り変わりがあります。それと同じように、例えば銅鐸を見本としてあげていますが、これはどっちが古いのか新しいのか、ひと目見ただけではわかりませんけれども、最初はこういう単純な形だったのが、新しくなるとこうなる。一般的には、前の時期の特徴が次の時期に引き継がれていくということがわかるわけです。この型式学的研究は、モンテリウスの『考古学研究法』が一番の教科書です。私が大学１年生の時に、先程の磯崎先生から「『考古学研究法』をまず熟読するように」と勧められました。私にとっては考古学研究のバイブルだと思っている一冊です。土器の変化する特徴を、このような研究方法で追っていくということを心がけています。

遺跡位置は全てGoogle　Earth　Proに入れています。この画面では、地図上で河川を表示していませんが、河川なども表示ができます。これに遺跡位置を入れると、実際には自分の知らない土地でも正確に遺跡位置を落とせますし、位置情報をKmz形式で取り出して、ほかのGISソフトでも使えるので非常に便利です。今回企画展で作った遺跡分布図もこのデータで作成したものです。参考までに、これは福島県の会津若松市周辺ですけれども、右側に猪苗代湖があって、左側に会津盆地があります。弥生時代中期・後期を色分けして表示したもので、緑が後期、黄色が中期ですが、時期が変わると遺跡の分布する範囲が大きく変わることがわかると思います。

２．天王山遺跡・天王山式土器

これから土器型式の話になって行きます。段々と専門的な話になって大変恐縮なのですが、まず天王山遺跡・天王山式土器というのはどういうものなのかということを先にご説明しないと、天王山式土器・

天王山式土器と言ってもご理解いただけないのかなと思いますので、まず最初にその話をさせていただきます。

２_１　遺跡の概要

天王山遺跡は阿武隈川の北側にある独立丘陵上、豆柄山、通称天王山に所在しています（スライド16）。平野部からの比高が80mぐらいの山の上にある遺跡です。あとで地図をご覧頂きますが、古代の官道が近くを通っていて、白河関と白河郡衙である関和久遺跡の中間ぐらいに位置するということで、交通の要衝だろうと思われます。

２_２　天王山遺跡天王山式土器

（スライド16：２_２）次に天王山式土器についてです。天王山式土器の概念を広く考えている人もいますが、私は天王山遺跡で見つかった土器と同型式・同時期の土器を天王山式土器とする立場です。天王山式土器については何人かの研究者の方が特徴について指摘されています。山内清男先生や、今日来られている中村五郎さん、馬目順一さん、佐藤信行さん、あと石川日出志さんなどです。この特徴は、これ以外にもいろいろあるんですけど、代表的な８つだけ話をさせていただくと、まず、①この例示した実測図は厳密には交互刺突文ではないですが、特徴の一つとして挙げられるのはまず「交互刺突文」です。文様帯を分ける部分に沈線を引いて、それに上下から交互に刺突を加える。②口縁部の突起が発達していること。これ以前の地元の土器にはない特徴です。③受口状の口縁、口の部分が内湾状になるという特徴です。④頸部の一部の横帯状の素文化。頸部の一部に文様が入らない無文帯がある。これが天王山遺跡の天王山式土器の大きな特徴の１つだと考えています。それから、⑤磨消縄文の発達。この実測図の斜線を引いたような部分が縄文なのですが、沈線で区画した文様の中に部分的に縄文を施文するということです。それから、⑥上胴部の下向きの弧線文。頸部の文様帯の下に弧線状のものを連ねている。弧線を連ねた連弧文が入っている。⑦それから、条の縦走する縄文。この図がまさにそうなのですが、縄文原体を斜めに回転させて、縄の条が縦に走る。⑧縄文の条が横に走るものも特徴です。

これは、今年の２月に白河市の鈴木功さんに案内していただいた際に撮った写真ですが、ここが天王山遺跡です。丘陵の上がそれほど広くはないのですけれども、平地が広がっている場所から、1950年・1951年に大量の天王山式土器が出土しました。

これは『地図で見る東日本の古代』という本から引用した地図なのですが、この赤いのが古代の官道で、この部分が天王山遺跡です。この南側に阿武隈川が流れています。丘陵上にある遺跡に登って周囲を見ると、木が生い茂っていて見通しは決して良くはないのですが、四方を見ることができる場所で、交通の要衝にあたることがよくわかります。後ほど話をします古津八幡山遺跡も交通の要衝にありますので、すごくよく似たような立地だなと思いました。

・天王山遺跡の石器

それでは、天王山遺跡出土の天王山式土器をもう少し詳しく見てみたいと思います（スライド20）。

天王山式土器の話をする前に、少しだけ石器の話をします。これは30年程前に見せていただいた時に、木箱に入った状態で撮った石器ですが、石鏃と環状石器、こん棒の先端に付けるドーナツ状の石器です。石器はこれぐらいしかなかったように思います。石器が少ない、ほとんど使ってないことがわかります。

・縄文原体

少しだけ縄文原体のことについて触れさせていただきます。1979年に刊行された山内清男先生の『日本先史土器の縄紋』から引用した図です。簡単に説明しますと、縄の撚りには、右撚りと左撚りがあって、右撚りの次には左撚りにします。そうしないと撚りが戻ってしまいます。それからこのＲとかＬというのは、Ｒが右撚り、Ｌが左撚りという記号です。これは、先回の講演会で石川さんが撚った縄ですが、これが最も上に書いてあるＬとかＲとかという１段の撚りで、これをもう一回撚ると、ＬＲとかＲＬという単節の撚りになります。天王山遺跡の天王山式土器の特徴は、ＲＬ縄文を斜めに回転させて、条が縦に走るもの。それから、この左下になるのですがＬＲ縄文を斜めに回転させて、条が横に走るもの、その両方があるというのが特徴です。また、このＲＬ縦走縄文というのは、以前から中村五郎さんが北方系の要素であると言われていますが、そのとおりだと思います。

・天王山式土器の文様

天王山式土器を写真で紹介するとこのようなものになります（スライド22）。交互刺突文というのはこういう部分ですね。沈線を引いて、その上と下に交互に刺突を入れていく。あとそれと、今日、後半に話をする予定ですが、実は天王山遺跡の中には、古い要素を持った土器がいくつかあります。この上の写真です（スライド23）。厳密に言うと、２本同時に

施文しているかはっきりしないのですが、このような２本の沈線で弧線状、連弧状の沈線を入れるものがいくつか認められます（スライド23）。

それから下の土器は、東関東系、主に茨城県北部のひたちなか市周辺に系譜を求められる外来系土器です。これらは、東関東の土器編年で言うと、後期初めではなくて、後期前半の新しい段階に位置付けられるものです。東関東では最初は２本描の施文具で文様が描かれるのですが、新しくなると３本・４本描きと多条になってきます。これらの新しい段階の東関東系土器が天王山遺跡で一緒に出土しているので、天王山遺跡の天王山式土器というのは後期初頭ではなく、後期前半の新しい段階に併行するだろうというのが、東関東系土器の編年から言えると考えています。東関東系土器に着目している多くの人はそのように考えているのではないかと思います。

天王山遺跡出土の土器を、1958年に刊行された『弥生式土器集成』に掲載された番号順に並べた図です（スライド20・24・25）。おおむね壺形土器が最初に来て、その後に甕形土器が並んでいるのですが、それを先程の８つの特徴の番号を付けて色分けをした図になります。これを見ると、④と⑤と⑧というのがどうも組になる場合が多いようです。④頸部無文帯、⑤磨消縄文、⑧横走するＬＲ縄文です。この組み合わせが天王山遺跡の天王山式土器の特徴の一つと言えると思います。天王山遺跡出土の土器がすべて該当するという意味ではなく、特徴の一つとしてこういう組み合わせが認められるということです。壺も甕もそうです。

あとそれからすこしだけ補足をします。（スライド25）28・29の甕形土器を見て下さい。この実測図は半分しか文様が書かれていないので複雑な文様と思われるかもしれませんが、下のスケッチを見ていただくと、連弧文を基本にして、この中に補助的な文様をいろいろ付け足していることがわかると思います。一見複雑に見えますが、天王山遺跡の天王山式土器は、この連弧文が文様を施文する際の基本になっています。

天王山遺跡の天王山式土器の特徴を要約すると、まず、明確に文様帯が区分されていること。この前の講演会で石川さんが、文様帯毎に色分けをした図を示されましたね。頸部が２段に分かれていることもありますが、口縁部、頸部、それから胴部ですね。それから今話をしましたように、連弧文に由来する文様が多いということ。

あと、もう１つ重要な点は、後に詳しく説明をしますが、天王山遺跡天王山式土器の成立する以前に見られるような、１つの土器に、１つの文様帯に出自の異なる文様を入れることは決して有りません。天王山遺跡天王山式土器は文様を施文する際の規範・ルールが厳しく、そういう厳格な範型のもとでつくられていると考えています。

３．古津八幡山遺跡

３_１　遺跡の概要

東の天王山遺跡に対して、西の古津八幡山遺跡という話をちょっとさせてください。今回、資料を作っていると２つの遺跡がすごくよく似ているなということを改めて感じました（スライド26）。古津八幡山遺跡の成立する時期は、弥生時代中期の資料は１点もないので、後期になってからであることは明らかです。天王山遺跡も一緒です。後期から後期の終末、それから古墳時代です。遺跡のある場所は、信濃川と阿賀野川が最も近接する場所で、信濃川沿いに南西に行くと信濃（長野県）、阿賀野川沿いに東に行くと会津（福島県）、そして日本海を南西に行くと北陸、北東に行くと山形県・秋田県に行けるという交通の要衝に立地しています。

遺跡は丘陵上にあって平野部からの比高差は50ｍぐらいあります。いわゆる高地性集落で、集落の周りを環濠が巡っている環濠集落でもあります。一般的には防禦を目的とした集落と考えられています。これまでに50棟以上、最近の調査で数が増えているので、60棟近い数と思いますが、それぐらいの竪穴住居、竪穴建物が検出されています。

１つの遺構の中で系統の違う土器、縄文のついた東北系土器、縄文のつかない北陸系、それから両方の要素を合わせ持った折衷土器が一緒に出土しています。系統の異なる土器が遺構内から一緒に出ていることによって、それぞれの系統の違う土器が同時期に作られ、廃棄されたことがわかります。考古学者は遺跡・遺物の年代の尺度を主に土器編年で見るのですが、古津八幡山遺跡の調査成果は系統の異なる土器編年の併行関係を考える際の基準資料になっていると思います。

古津八幡山遺跡では、弥生時代が終わった後に150年ぐらいしてから、新潟県内最大規模の直径60ｍの円墳が造られています。弥生時代から古墳時代への移り変わりがわかる重要な遺跡として2005年に約12haが国の史跡になって、現在は復元整備がされて史跡公園として一般公開されています。

古津八幡山遺跡はここです(スライド27)。土器には東北系と北陸系、それから長野系がありますが、ちょうど東北系土器（天王山式土器）の分布圏のはずれに近い位置にあります。天王山遺跡も、あれだけまとまって天王山式土器が出ていますが、白河市の南からはほとんど出土していません。天王山式土器が主体的に分布する地図を作ると、太平洋側の分布圏の南のはずれに近い位置にあります。なぜ、分布圏の外殻圏に標識遺跡があって、あれだけ多くの土器が出土しているのか不思議なのですが、そのような場所に２つの遺跡はあります。両遺跡は東北系土器の分布域のはずれに近い位置にある西と東の遺跡で、同じく丘陵の上にあるという共通点が見られます。天王山遺跡には環濠はないのでしょうか。半分冗談ですけれども、可能性もあるのかなというふうに思っています。

現在、古津八幡山遺跡は史跡整備が進んで、毎年大勢の方々が来て下さっていますが、西方の日本海側には弥彦山とか角田山が見える眺望が利く丘陵上にあります。この写真も真上から見たものですが、古津八幡山古墳が一番北側に造られています。

３_２　遺構の重複関係と遺物の型式学的研究

次に、古津八幡山遺跡の土器編年が、今回話をする編年の基準になっていますので、その話をさせていただきます（スライド31)。

先ほどご説明したように、古津八幡山遺跡では、北陸系土器といわゆる天王山式という東北系土器が遺構内で一緒に出ています。一緒に出土していない場合でも、遺構の重複関係から出土遺物の新旧関係を判断する事ができます。

代表的な例を３つ紹介させていただきます。北東斜面にある外環濠が造られた後にその外側に、方形周溝墓という墓が２基造られています。環濠は、古津八幡山遺跡では土塁が外側に造られていますが、この土塁が崩れたと思われる土が、その外側の方形周溝墓の周溝に堆積しています。このようなことからも、環濠と方形周溝墓の前後（新旧）関係が確認できると考えています。

古津八幡山遺跡の全体図です（スライド32)、水色が環濠、ここが古津八幡山古墳で、緑色が竪穴住居です。今回紹介するのはこの場所です。右側の図が拡大したものです。

・環濠

水色が環濠で、環濠の外側に墓がつくられています。この環濠の大きさは、幅約２ｍ、深さも深いところでは２ｍぐらいです。外環濠Ｃの底面から約１ｍの場所から、上段の写真のような甕形土器が出土しています（スライド33)。この甕は、口縁部の伸びが短くて、断面形が三角形になっているのが特徴です。これは北陸編年の「猫橋式」土器で、後期前半に位置付けられる土器です(スライド５)。この土器の編年的な位置づけから、少なくとも後期前半、猫橋式の段階に、古津八幡山遺跡では環濠が掘られていると考えています。北陸では後期後半の環濠が多いので、北陸の中でも比較的古い環濠ということになるかと思います。

イメージ図ではこの様になります。これは環濠とその後に造られたお墓を一緒に示したものですが、上が環濠の土塁で、環濠の外側、斜面の下側に２基の方形周溝墓が造られています。墓の周りに溝があって、その周溝を掘った土を中央に盛りあげてマウンドにしています。２基あって、方形周溝墓１・方形周溝墓２としていますが、方形周溝墓１が先につくられて、方形周溝墓２が後に造られます。中間にある溝を共有する形で、１と２が順々に造られています。

・方形周溝墓１

方形周溝墓１は、中央に棺を納める埋葬施設があり、その中から鉄剣と石鏃が見つかっています（スライド38)。鉄剣は鹿角の柄がついた鹿角装鉄剣、石鏃はえぐりがあり、ネイティブアメリカンが作ったものとよく似ていることからアメリカ式石鏃と言われているものです。

ここから出た土器がこれになりますが、すべていわゆる東北系、天王山式土器で、１点だけ八幡山式と言っていますけれども、縄文の付かない折衷土器が出土しています（スライド40)。これらは、天王山遺跡出土の天王山式土器とほぼ同じ頃のものだろうと考えている一群です。これが鉄剣と石鏃です（スライド41)。少し蛇足になりますが、古津八幡山遺跡から出土した石器はこれぐらいしかありません。定型的な石器は石鏃・石斧と砥石だけです。古津八幡山遺跡でもほとんど石器を使っていないということが、これでお解りいただけるのではないかと思います。

・方形周溝墓２

もう１基、方形周溝墓２としたお墓について説明します。周溝の中に流れ込んで堆積した環濠の土塁の土が、断面写真の黄色い土です（スライド42)。これは環濠を掘削した際に、底面から中程に見られた

土です。それが周溝に堆積しているということは、環濠が掘られて、ある程度時間が経過してから盛られた土塁が崩れて、周溝の中に堆積したということを示していると考えています。周溝からは、下の写真のように良好な状態で弥生土器が出土しました。完形に復元できるものが多かったのですが（スライド43)、先ほどの外環濠Ｃ出土の土器に比べると、口縁部の伸びが長くなっている新しい様相で、後期前半ではなく、それよりも新しい後期後半に相当するものと考えられます。北陸編年の「法仏式」の古い段階に位置付けられるものです。外環濠Ｃと方形周溝墓の新旧関係と土器編年が合致しています。外環濠Ｃと方形周溝墓２の重複関係、方形周溝墓１と２の新旧関係をまとめると、外環濠Ｃ→方形周溝墓１→方形周溝墓２という序列になると考えられます（スライド５）。

古津八幡山遺跡では、ほかにも北陸系土器と東北系土器が一緒に出ている遺構がたくさんありますが１つだけご紹介いたします。竪穴住居で共伴した事例です。右側の土器がヘラ状工具で文様を描いた東北系土器で、左側が北陸系土器です。このように竪穴住居内から一緒に出てくるということで、天王山式土器と北陸系土器が共伴関係にあるということが間違いないと、古津八幡山遺跡の調査成果では言えると思います。

これまでご紹介した資料は、後期前半でも新しい段階ですが、それより古い段階の資料がどのくらいあるか集めたものです(スライド45)。この辺が今日の話の主題になります。

４．弥生時代中期後半から後期初頭の土器について

（スライド47）今まで主に話をしてきたのは､後期前半の後半段階ですが、これから話をするのは、中期後半終末のことになります。そして最後に今回の本題である後期前半の初め頃の話をします。こだわらなきゃみんな一緒だって言われそうですが、ちょっとこだわりがあるのです。話をする順番がわかりにくくて申し訳ありません。

・山草荷遺跡

まず、中期後半にどのような土器が作られているのか見たいと思います。類似するものが後期前半の土器と一緒に出ることが多いので簡単に説明をします。

新発田市山草荷遺跡、阿賀野川以北にある中期後半の標式遺跡です(スライド47)。新潟県内の弥生時代の遺跡では地域によって多少はありますが、どこでも多地域の土器が一緒に出土する傾向にあります。北陸系・長野系、それから東北の会津系・秋田系土器が一緒に出土しているのがこの遺跡の特徴です。今日の主題はこの赤字で書いた東北系土器です。会津系の川原町口式土器、それから秋田系の宇津ノ台式土器です。写真はこちらになります（スライド48)。下段が会津で出土しているものと似ている土器ですが、１本の沈線もしくは、２本沈線（平行沈線）で渦巻文・同心円文・山形文・菱形の文様などを描いているものです。それから上の秋田系と書いたものは厳密に言うと秋田の土器ではなくて、新潟県の主として阿賀野川以北で変容した土器です。左側の甕形土器のように、３本描の施文具で直線文・波状文や鋸歯状の文様を描いています。このように２本描とか３本描施文具を使っているのが中期後半の土器の特徴になります（スライド49)。

図が小さくて見にくいと思うのですが（スライド50)、同じような施文具で文様を描く土器というのは、決して新潟県だけではなくて、宮城県･福島県･山形県、それから岩手県の南部、今の奥州市付近ですが、この地域でも見られます。右側の奥州市常盤広町遺跡の事例は、２本描沈線で文様を描いた２点とそのほかの天王山式系土器の古い段階の資料です。奥州市付近では２本描沈線で文様を入れたものと天王山式系列土器の古い段階の土器が一緒に出土しています。

私共のように考古学者は地域毎に細かく分けるのですが、中期後半に岩手県の南部から宮城県・福島県・山形県・新潟県・東関東にかけて広域に、この平行沈線文系土器が分布しているというのが、巨視的な目で見た特徴と言えると思います。これから話をする内容につながりますが、平行沈線文系土器の要素を残す天王山式系列土器は古い、後期初頭の土器であると考えています。

・平行沈線文系土器

実は約30年前に宮城県で天王山式土器の研究会がありました。私もちょうどその頃に天王山式土器の勉強を始めていたので参加しましたし、会場には中村五郎さん、石川日出志さんも発表者として参加されていたと記憶しています。平行沈線文系土器と天王山式系土器の関係性については、この研究会で宮城県の研究者（佐藤信行さんや相澤清利さん）が注目していたのを印象深く記憶しています。その後、宮城県内ではこのような視点で研究が継続されてきたのですが、新潟県や福島県会津地域ではなぜかこ

ういった視点による研究がなかったように感じています。それで今回、あらためてこの点に着目して資料を見直してみようというのが、企画展のきっかけの一つです。

これにはある理由があって、石川日出志さんが、岩手県の別の平行沈線文系土器（２本描沈線文）に着目をし、２本描沈線文は古くない（新しい）ということを論文で書かれて（湯舟沢式）、皆がそれに引きずられたのではないかと思っています。誤解・誤読だったのかもしれませんが、宮城県では古い様相の天王山式系列土器であると言っているのに、石川さんが２本描沈線文を新しいと書いていることが理解できなくて30年近く経ってしまったと反省しています。私の不勉強が原因だったのかもしれませんが、このことにこだわっていて、長い間論文を書けなかったのかなと思っています。今では石川日出志編年の軛が外れたという感じです。

■後期初頭から前半の弥生土器

それでは、これから平行沈線文系土器に伴う天王山式系列土器群、平行沈線文系土器の要素を持った天王山式系列土器は古いという視点で見ていきたいと思います。時期的には後期初頭から前半と考えています。

まず、交互刺突文について見てみたいと思います（スライド51）。この中で、まっとうな交互刺突文は右側の天王山遺跡の交互刺突文だけです。口縁部の下の部分にありますが、沈線を２条引いて上下交互に刺突を入れています。ほかは、厳密に言うと交互にはなっていない擬似交互刺突文です。口縁部の肥厚した部分に横位沈線を１条ないし２条引いて、縦に刻みを入れたり、下から押し上げたりすることによって、この部分が交互刺突状になっているものです。これらがこの段階-後期初頭-の特徴的な擬似交互刺突文です。

最下段は、村上市砂山遺跡の資料ですが、文様帯の境界の部分に三角形や台形状の刻みを入れています。右側の一例だけ上下から入っていますが、これらも後期前半の天王山遺跡以前の天王山式系列土器の特徴の１つです。

交互刺突文で古いもの、新しいものを分けることはできないという研究者もいますが、これらは明らかに古い要素です。中段中央の例は口縁部に２本描沈線で連弧文を入れていますが、この施文具は中期後半の伝統を引くものです。

■岩手県南部における中期末・後期初頭の様相

類似するものを遺跡単位で見ていきたいと思います。これは岩手県南部の奥州市兎Ⅱ遺跡という著名な遺跡の土器です（スライド52）。交互刺突文の特徴は、口縁の肥厚部分に横位沈線を引いた後に、下から押し上げて擬似交互刺突文を作っています。更に横位沈線の上に、縦位の刻み･沈線を入れています。研究者の間で「兎Ⅱタイプの交互刺突文」と言われているもので、この遺跡では２本描施文具による平行沈線文系土器が伴っていて、平行沈線文と交互刺突文が１つの土器に一緒に入れられている土器もあります。

次に、紹介するのは同じく奥州市石田Ⅰ・Ⅱ遺跡と北田Ⅱ遺跡の土器です（スライド53･54）。ここでも兎Ⅱ遺跡と同じような交互刺突文があります。口縁部や頸部に２本描施文具で連弧文を入れるものなど、２本描施文具で文様を入れた土器が多く見られます。この時期の特徴はもう１つあって、縄文を施文するときに、一回縛ったもの、結節縄文と言いますけれども、そういうものが多く見られるということです。これも弥生時代中期後半によく見られる手法ですが、それを引き継いでいると考えられます。北田Ⅱ遺跡の中段の土器は、この結節縄文が波状沈線に代わったものです（スライド54）。同じように結節縄文を沈線に置き換える手法は弥生時代前期にもありますが、時期を超えて同じようなことをしていることがわかります。よって、これらによく似た押し引き状やジグザク状の沈線も後期前半の文様要素のひとつと考えています。

■会津地域における中期末・後期初頭の様相

企画展で展示している福島県会津美里町の油田遺跡の土器です（スライド55）。これらは中村五郎さんが注目されて資料報告をされていますが、主に２本描施文具で上向き連弧文を入れているのが特徴です。会津では今までに類例が少なく、ほとんど注目されていなかった一群です。右下の２点の擬似交互刺突文も一見複雑そうに見えますが、この前に説明をしたものと同じ様に横位沈線を引いて、縦に刻みを入れるだけのもので、後期の古い施文手法と考えられるものです。福島県の中期後半の土器の文様には、基本的にこのような単純な連弧文は少なくて、渦文・同心円文や四角形・山形の文様が一般的なので、そこには直接系譜が追えない一群であると考えています。施文は２本描で中期後半の伝統を引いてはいるけども、文様そのものは在地の中期後半から追うことはできないので、今の時点では系統が不明

と言わざるをえません。これから勉強していきたいと考えています。比較的単純な文様で見過ごされやすいのですが、似たような文様は新潟県内でもパラパラあるように思われます。

今まで会津地域で天王山式土器と言われているものを見直していくと、２本描沈線で連弧文を描いたり、鋸歯文を描いたりするものがあります。この土器群だけで一時期の組成をなしていたということでは決してないと思いますが、このような古い要素を持つ一群があるということに注視する必要があると考えています（スライド56）。それと、天王山遺跡と同じように口縁部が肥厚して、内湾する器形の土器もありますが、単純に口縁部がくの字状にくびれて肥厚しない甕もあり、入れられる文様は連弧文が一般的です。この写真右下の土器は、先ほど説明した結節縄文が沈線に転化したと考えられるものなので、ここに示したような一群が、天王山式系列土器でも古い段階の資料と言えるのではないかと考えています。

５．弥生土器からみた北陸と北海道南部・東北北部との交流

５_１　北陸-富山県・石川県-における天王山式系列土器群

次に、今ほど説明をしたこれらの後期初頭から前半に位置づけられる土器と一緒に出土している変な？土器について紹介させていただきます。これから話をする天王山遺跡の天王山式土器よりも古い段階に位置付けられる土器が今日の本題になります。

北陸の話を最初に致します（スライド57）。在地の北陸系土器には沈線文様や縄文は入れないので、北陸では極めて特異な外来系の土器になります。このような天王山式系列土器が北陸の富山県・石川県で出土しています（スライド58）。多くは天王山遺跡の天王山式土器よりも古い段階のもので、破片ばかりで大変にわかりにくいと思いますが、菱形の文様-重菱形文-が多く用いられています。天王山式系列土器が見つかっている遺跡は、富山県で36遺跡、石川県で40遺跡あって、この中で重菱形文系土器は富山県15遺跡、石川県13遺跡で、重菱形文を入れる土器の比率が高いと言えます。

５_２　北陸における天王山式系列土器群の特徴と系譜

（スライド57）あとそれから、重菱形文のほかに気になっているのは、冒頭で話をした小さな連弧文を頸部に入れるもの、それからもう１つは、縦位鋸歯文です。これは富山県高岡市下老子笹川遺跡の土器ですが、ジグザグの鋸歯文が胴部に縦に入っています。右の青森県上北郡六ヶ所村大石平遺跡の土器と同じような文様です。新潟でも事例が多くない、無いわけではないのですが、そういう文様が、東北北部から遠く離れた富山県で出土している。石川でもありますが、資料調査に行って驚いたことの１つです。

あとそれと、頸部に重菱形文入れた土器の下にＳ字状の文様とか、大きな山形文を入れるもの、それから、言葉が適切かわかりませんが、円形と台形を結びつけたような文様を入れた土器があります。これから詳しく話をしますけれども、こういう土器が富山県や石川県で多く見つかっているということです。

今、このような文様を入れた土器が、遠く青森県にもあるという話をしましたが、富山県下老子笹川遺跡の土器は（スライド57）、北海道の恵山式土器と非常によく似ており、それらを模倣してつくられたと考えられています。東北北部・北海道南部との交流は、このような遺物が出土しているということからも裏付けられると思います。これらは、天王山遺跡の天王山式土器には見られない特徴であるという点が重要なことだと考えています。

富山県･石川県の天王山式系列土器の分布図です。石川県で特に多いのは能登半島の邑知潟地溝帯一帯。七尾湾から羽咋市にかけて断層があるのですが、この地域の分布が濃密です。国指定史跡の七尾市万行遺跡からも出土しています。ずっと北から船に乗ってやって来た北方系の人たちが七尾湾に入って、内水面を利用して邑知潟地溝帯に沿って南下していったのではないかと想像したくなります。

５_３　口頸部間（口縁部頸部間）小連弧文の系譜

これは北陸で出土した天王山式系列土器の中で特徴的なものを抽出した図です（スライド60）。図の◀印の部分が、頸部の一部に入れられた連弧文で、「口頸部間小連弧文」と仮称しているものです。最初は何でこんな変な場所に連弧文を入れるのだろうと思いました。冒頭にも話しましたが、天王山遺跡では決して見られない文様です。新潟県内でも類例がないわけではないのですが、今まで新潟県内では気にも留めていませんでした。

北陸に資料調査に行った後、気になって調べ直してみたら、むしろ青森県とか秋田県などにあることがわかりました（スライド61）。天王山遺跡の天王山

式土器よりも古い特徴を持っている傾向があるように思いました。この青森市蛍沢遺跡の例は小連弧文をたくさん入れています。実測図だけを見るとちょっと見落としそうですが、右側の拓本を見ると下半に渦巻文が入っています。これは中期後半によく用いられる文様です。青森県六ケ所村家ノ前遺跡の壺は頸部に連弧文ではなく鋸歯文を入れています。秋田県山本郡三種町館の上遺跡も頸部を無文にせず、連弧文を入れています。長岡市松ノ脇遺跡の甕は、頸部下半に重菱形文由来の文様を入れ、口頸部間に小連弧文を２条入れています。天王山遺跡では口頸部間を無文にするのが基本ルールだったと、先ほど説明しましたが、これらは天王山式土器のルールに則らない一群ということです。時間がありませんので、詳細は省略しますが、これらには古い特徴を持っているものが多いように思います。編年的に言うと天王山遺跡の天王山式土器よりも古く位置づけられそうな一群が、北陸から日本海側一円に見られるということです。

５_４　上胴部山形文の系譜

あともう１つ、上胴部山形文とした文様です。初めに気になったのは、新潟市東区の新潟北高校近くにある石動遺跡の土器を見た時のことです（スライド62）。左側が土器破片の実測図で、右下にイラストと写真を載せています。口縁部が内湾状になり比較的長く、口縁部下端には小連弧文を入れ、その下の頸部に重菱形文を入れています。注目してもらいたいのはその下の文様です。２本の沈線で書かれた山形の沈線文様が特徴ですが、その沈線に沿ってクネクネクネという変な波形の沈線を入れています。そして、山形沈線文の中にもう１つ山形を入れていますが、山形文の左右の角を丸く処理をしています。これは天王山遺跡でもよく見られる特徴です。これを見た時に「ああ、面白い土器だな」と思って、この系統の文様はどういう所に分布しているのかなということを調べたわけです。

これがそれですが（スライド63）、小さいので、お手元にお配りしてあるＡ４資料を御覧ください（追加資料５）。よく似たものを探すと、北海道久遠郡せたな町瀬棚南川遺跡、これは日本海に面した遺跡ですし、あと函館市恵山貝塚、これは恵山式の標式遺跡です。それから、石川日出志さん資料報告された亀田郡七飯高校遺跡、細かく言うと文様は少し違いますが、同じように口頸部間に連弧文を入れて、頸部の下に山形文とか連弧文を入れています。類似した文様が、青森県とか福島県河沼郡会津坂下町舘ノ内遺跡でも出ています。小破片ですが比較的日本海に近い場所にある胎内市兵衛遺跡、新発田市王子山遺跡のものもそうです。舘ノ内遺跡では重菱形文の下の文様は異なりますが、連弧文に沿って鋸歯状の沈線を入れています。口縁部の形状が石動遺跡とよく似ており、同じ系統の土器であるということがよくわかるのではないかと思います。この様に、類似した文様を入れた土器が遠方にもあるので、人の往来があったことが推察されます。

これは、実測図をイラストにしたものです（スライド64）。石動遺跡を中央に配置すると３例の関係がよくわかります。石動遺跡は石川県中能登町大槻３号墳に近いし、舘ノ内遺跡ともよく似ています。石動遺跡と大槻３号墳の山形文は内部に入れられた山形の端部を丸く処理する手法も含めてそっくりですし、石動遺跡と舘ノ内遺跡は口縁部の形そっくりですよね。口縁端部に縦の刻みを入れる手法は北方系の様相なのですが、このような北方系要素を持った土器が広範囲で分布していることになります。

大槻３号墳は最初に見たときに、古いのか新しいのかわからなかった。最初に申しましたように口頸部間の小連弧文も含めて、変な土器だなと思ったのですがこのように比較資料と対峙して見ると、同じ時期で良いと思うようになりました。（厳密な共伴関係は不明だが）一緒に出土している後期前半の北陸系高杯に伴って良いものかなと思っています。

・桜町遺跡

本来的には日本海側特有の後期前半の土器に入れられた文様と考えていますが、会津にある福島県湯川村桜町遺跡の天王山遺跡の天王山式段階よりも新しい後期後半と言われている資料にも類似した文様があり注目されます。胴部上半に斜線を引き、それに沿って鋸歯状の沈線が入っています。

蛇足ですが、少しだけ後期後半の話をします（スライド65）。胴部上半の山形文に沿って鋸歯状文を入れるという点でこの一群に似ていると考える土器です。実は、鋸歯状文に着目すると、同じ会津の会津坂下町舘ノ内遺跡とか柏崎市西谷遺跡で区画文の中に鋸歯文・波状文を入れた土器が出土しています。桜町遺跡の鋸歯文もこれらの系統を引く可能性があるのですが、気になっているのは、これらが頸部を無文にしていないという点です。天王山遺跡の天王山式土器は頸部を無文にするルールがあったはずなのに、舘ノ内遺跡・西谷遺跡、そしてその系譜を引

くと考えられる桜町遺跡も頸部を無文にしていなかったり、本来は上胴部に入れられるべき連弧文が、その上の文様帯に入れられていたりしている現象です。現段階ではあくまでも想像なのですが、天王山遺跡の天王山式土器とは別の系列があって、場合によっては北陸などのキメラ土器の影響があって、頸部文様帯を無文にせず、文様を施文するようになったのではないかと考えています。今日話す内容と時期が違いますが、少しだけ話をさせていただきました。

桜町遺跡は、弥生時代の後期後半が主体の遺跡で、そのころになると北陸系の土器、それから北陸系の住居形態とか、方形周溝墓とか前方後方形周溝墓という墓制が入ってきます。北陸系の集団がおそらく古津八幡山遺跡などを経由して、どっと会津に流入していく時期です。その時に本来の北陸系の集団だけではなくて、北陸系の集団の中にいた天王山式系列土器を作っていた人たちの末裔も会津に行ったのかなあ？などということを、ちょっと想像をたくましくして考えたりしました。あくまで土器文様からの空想です。これからもっと勉強していかなきゃ駄目なのですが、そのような見方もあるということで、ちょっと紹介をさせてもらいました。

６．東日本に広域に分布する文様

６_１　Ｓ字状連繋文の系譜

これから話をするのは、もう少し広域に見られる文様についてです（スライド66）。まず、私が「Ｓ字状連繋文」と仮称している文様について説明します。追加資料６_１と書いてあるものです。白黒の集成図もあわせてご覧ください。スライド右側の図です（スライド67）。概ね北から南に、北海道・青森県・岩手県・秋田県・福島県・富山県・新潟県・長野県・群馬県の順番に並べてあります。Ｓ字状の文様が左右に連結して、その連結部分の右上・左下に三角形の文様（補助文）が向かいあわせに描かれています。補助文は▷印をつけた部分です。同じ系譜を引くと考えられる様々な文様がありますが、祖形は青森県南東部の八戸周辺から岩手県北東部から宮古市・陸前高田市付近の遺跡から出土している文様ではないかと考えています。なかでも、岩手県の九戸郡野田村上代川遺跡や宮古市田鎖車堂遺跡では、この文様が様々な器種に入れられています。石川日出志さんの説では、弥生時代中期の波状工字文に錨形文の要素が加わって、Ｓ字状連繋文が成立したのではないかと考えられます。

この文様の特徴は、左右にＳ字が連繋していくのに沿って、斜に向かいあわせの三角形の補助文が付けられていることです。元来、波状工字文の段階にはなかったのですが、文様として確立した際に付けられ、その後に省略されていったと考えています。２本線で描いていたＳ字が、３本線になっているものがありますが、これは三角形の補助文の名残だろうと思います。この系譜の文様は広域で出土していて、特に福島県会津坂下町能登遺跡や会津若松市和泉遺跡で多く見つかっています。福島県では壺形土器に限られることが特徴です。

繰り返しになりますが、分布図で遺跡を示しているように、この一群は青森県南東部、八戸周辺、それから岩手県三陸沿岸、宮古付近に古いものがあって、日本海側に行くと、新潟県、それから富山県・長野県それから群馬県と非常に広域に分布しているということです。

次に集成図に付加的な文様と書いた●印がついた文様について説明します。福島県能登遺跡の壺形土器の連弧文、群馬県高崎市長根安坪遺跡の連弧文、福島県会津坂下町開津台畑遺跡の波状文などです。実測図よりもわかりやすいので、イラストを見てください（スライド68）。イラストの◀印を付けている部分です。能登遺跡の壺の下向連弧文、長根安坪遺跡の広口壺の下向連弧文は共に無文の頸部の下に入れられています。天王山遺跡の天王山式土器の特徴として上胴部の連弧文が特徴であると説明しましたが、これらが同じ文様帯になります。本来であればこれで完結する文様なのに（頸部無文＋上胴部下向連弧文）、敢えてその下にＳ字状連繋文を入れています。これを「＋αの文様」としていますが、余分な文様なのではないかと考えます。両者のＳ字状連繋文は三角形の補助文が欠落しており、新しい様相の文様と考えられます。

左下は長野市吉田高校グランド遺跡の土器です。これは頸部に重菱形文を入れ、その下にＳ字状連繋文を入れているのですが、よく似た文様の組み合わせが富山県氷見市加納谷内遺跡でも出土しています（資料６_１）。吉田高校グランド遺跡土器は、長野県内で唯一の重菱形文系土器ですが、重菱形文＋Ｓ字状連繋文を考えると北陸ルートの可能性が高いのではないかと考えています。長根安坪遺跡へ繋がるルートでしょう。このような「＋αの文様」原理が、先に説明した「キメラ」です。富山県下老子笹川遺跡・新潟市石動遺跡など甕や広口壺の上胴部にＳ字

状連繋文が入れられる場合にはキメラ化している場合が多いようです。東北北部に多い鉢形土器の場合は違いますが、東北南部や北陸で壺や甕にＳ字状連繋文が入れられる場合は、上記のような付加的に入れられた文様になっている例が一般的です。もともとの土器に、北方系？由来の文様が付加的に入れられたと考えています。

Ｓ字状連繋文の集成図に▶印を入れた部分が交互刺突文・擬似交互刺突文ですが、これらと補助文は伴わない傾向にあるようです。言い方を変えれば、交互刺突文を入れる段階には既に補助文が変容し、省略されている傾向にあるということです。編年的には天王山遺跡の天王山式土器の前、後期前半以前に主体を持つ文様と言えるのではないでしょうか。岩手県宮古市和井内東遺跡の壺形土器頸部下端の台形状刻み（擬似交互刺突文）は、砂山遺跡のものに類似しており、後期前半の典型事例と考えられます。

Ｓ字状連繋文の伝播ルートは明確ではありませんが、岩手県宮古市田鎖車堂遺跡では各地域の土器が出土しており、大変に興味深く思います。

右側の写真は田鎖車堂前遺跡の土器です（スライド67）。上段は集成図にも載せているＳ字状連繋文の仲間です。これらは中期後半と考えられる例ですが、この遺跡からは中期後半の各地域に由来する平行沈線文系土器や、波状工字文、重菱形文、重菱形文の下に砂山遺跡のような三角形の刺突を入れている土器が出土しています。在地ではない他地域（多地域）に由来する土器が数多く出土しており、中期後半段階に広域に人の移動があったことを示す貴重な資料です。このような社会背景のもとで、 Ｓ字状連繋文も拡散していったのではないかと考えています。

６_２ 「円台形連結文」の系譜　六地山遺跡の円台形連結文の系譜と分布

（スライド67）最後に、最初に話をした六地山遺跡の土器について話をさせてもらいます。六地山遺跡はこの近く、新潟市西区にある海岸沿いの遺跡です。天王山式土器の編年的位置を考える上で、極めて重要な鍵を握っている遺跡です。この遺跡で、北陸系土器と東北系土器が、伴うのか伴わないのか、伴うにしても、伴わないにしても、時期はいつなのかということです。北陸系の土器については、今日来られているお二方で考えが異なり、中村さんは伴う、石川さんは伴わないとお考えのようです。新潟県内の遺跡では別系統の土器が一緒に出土することが多いですが、特に六地山遺跡は広域編年を確定する上で重要な遺跡であると考えています。

私は今回、再報告で「伴う」と考察を書きました。お二方とも、北陸系の土器について後期前半（畿内第Ⅴ様式）の資料であるという点は、私と概ね同じ見解なのですが、私とは東北系の土器の扱い方が異なり、お二人とも天王山遺跡の天王山式土器よりも新しいと考えられています。

中村さんは、六地山遺跡の畿内第Ⅴ様式に併行する北陸系土器を根拠に、それよりも古いと考えている天王山式土器を畿内第Ⅳ様式併行とする根拠の１つにしています。また、会津坂下町開津台畑遺跡でも（中村さんが畿内第Ⅳ様式併行と考える）北陸系の櫛描文土器が伴ったと主張されています。一方、石川日出志さんは東北系土器と北陸系土器は伴わないと考え、本来、六地山遺跡の東北系土器に伴う北陸系土器は後期後半であるとしています。

年報の中では色々考察を書きましたが、今日は詳細な説明をする時間がないので簡単に話をさせていただきます。まず、六地山遺跡の編年的位置を確定する上で鍵を握る資料はこの甕形土器ではないかと思います（スライド69・71・追加資料６_３）。

特徴を少しかいつまんで話をさせていただきますと、形は甕形土器です。少し内湾した口縁部が肥厚して、その肥厚した口縁部の下端部分が下向きの連弧状になり、交点に刺突を入れています。そして、その部分に縄文の側面を連弧状に押しつけています。その縄文はＲＬという北方系の原体が使われています。縄文の施文方法は、肥厚した口縁部が横走、その下が縦走、胴部の上方から下半にかけては、縄を斜めに転がして条が縦走する。天王山遺跡にもあった特徴だと思います。そして、胴部の最上段だけ縄文を斜めに置いて、条を横走させているというのが大雑把な特徴になります。

まず口縁部です。口縁部下端に下向連弧文を入れ、頂部に刺突を入れる技法は基本的には天王山遺跡天王山式土器よりも新しい段階には見られない技法です。これは砂山遺跡ですけれども、似たやり方をしている。これは滝ノ前遺跡です。天王山遺跡の36（スライド16）もこれも近い手法だと思います（スライド71）。

問題はこの真ん中の文様帯です。私は仮称「円台形連結文」の変容形と考えていますが、このような文様が入って、中に縄文を施文している。一般的には磨消縄文といいますが、この土器は後から縄文を充填しています。

解釈がとても難しいのですが、これは能登遺跡にある２点の土器の文様が合体してつくられた文様と理解をしています。これも天王山遺跡天王山式土器には一般的にはない構図です。いずれも連弧文に由来しない文様です。先に説明したように天王山遺跡天王山式よりも古い一群であると考えています。

それからこの下の部分に、つながった上向連弧文（連結上向連弧文）を入れている、という特徴があります。先ほど説明をしましたように、天王山遺跡の天王山式土器は、基本的には一つの文様帯の中に由来の異なる文様は入れません。だからこれは、イレギュラーなやり方です。本来であればこの文様（連結上向連弧文）は、ここではなくて胴部上半に入るべきものです。なぜここに入れなかったのかというのが重要だと思います。これは私の解釈ですけれども、最上段だけ斜めに施文し条を横走させ、その下は条を縦走させるというのは、東北北部では一般的な流儀です。これをあえて表現をしたかったから、そこを塞ぎたくなかったから、本来ならばここに入れるべきこの文様（連結上向連弧文）をその上の文様帯に入れたのではないかと理解をしています。

前のスライドに戻りますが、六地山遺跡の右から２番目の土器も、２本描施文具で、上向きの連弧文を入れています(スライド70)。２本描施文具は先ほど説明したように、中期後半に多く用いられる施文具で、能登遺跡など後期の古い段階に用いられる施文具なので、ほかの資料を見ても、けっして天王山遺跡よりも新しい段階に位置づけられるものではないということです。

７．まとめ

それでは、これまで話をさせていただいた内容を要約してまとめにしたいと思います。

（スライド72：１）後期前半の後半段階、新しい段階に白河市天王山遺跡が出現して、そこである厳しい規範のもとで天王山式土器が作られるようになります。

（スライド72：２）天王山遺跡天王山式土器の編年的な位置付けは、天王山遺跡における東関東系の土器の共伴事例、それから古津八幡山遺跡における北陸系土器との共伴事例から後期前半の新しい段階で間違いないと思います。

（スライド72：３）天王山遺跡天王山式土器は、頸部の一部を無文にして、連弧文に由来する文様を入れて、磨消縄文が多く用いられます。そして一定の規範、ルールに基づいて作られているもので、一見すると複雑そうに見えますが、補助的な文様を取ってしまえば、連弧文に由来した比較的単純な文様であると思います。

（スライド72：４）天王山遺跡天王山式土器が成立する以前には、中期末の平行沈線文系土器の要素を持った土器が作られるとともに、大槻３号墳のような山形文、それからＳ字状文連繋文など、似かよった文様を持った土器が広域に作られています。

（スライド72：５）北陸では東北北部に由来する、口縁部と頸部間の小連弧文、それから上胴部の山形文、頸部の重菱形文などがあります。

（スライド72：６）青森県三八上北地域とか三陸に由来するＳ字状連繋文はさらに広域に分布していて、福島県以南には頸部に別系統の文様を持つ土器の上胴部に入れられます。先ほど話をした加納谷内遺跡ですとか、吉田高校グランド遺跡のようなものです。

（スライド72：７）最後ですが、六地山遺跡の仮称「円台形連結文」を入れた甕形土器も、今説明しましたように、天王山遺跡天王山式土器以前になると考えられます。北陸系土器も東北系土器も共に後期前半に位置づけられると考えます。古津八幡山遺跡が出現し、外環濠Ｃが掘削され初めた頃です。白河市天王山遺跡が出現するのは、六地山遺跡の主要な時期の後半段階と考えられます。

新潟市内には、海岸沿いにある六地山遺跡、それから内陸の丘陵上にある古津八幡山遺跡という２つの弥生時代後期の遺跡がありますが、それぞれの遺跡がどのような時間的関係を持っていたのか、時期的に前後関係があるのかということが、お互いの遺跡を理解する上で、非常に重要だと思います。古津八幡山遺跡が成立する段階に、日本海を介して様々な影響があったと推察されますが、そのころに海岸沿いに立地している六地山遺跡が関わりを持った可能性が高かったのではないかと考えています。このことを推察する上でも、六地山遺跡の編年的位置・年代を明らかにする必要があるということです。

■エピローグ

今回の企画展で、弥生土器のスケッチをたくさん描いたので、ご覧いただきます。これがＳ字状連繋文と私が言っている仲間です(スライド73)。様々なものがありますけれども、能登遺跡・吉田高校グランド遺跡は先ほど話をしたように、補助文が省略されている文様だと思います。もともとは和井内東遺跡のように三角形の補助文が入るものが、省略・変容して３本沈線になる。

これも仮称「円台形連結文」というふうに私が言っている円形と台形が組み合わさったような文様です（スライド74）。これは砂山遺跡のような壺形土器の肩の部分によく入れられる文様です。円形と台形が組み合わさって連続していく文様ですが、様々な文様があるので、今後資料を集成し分析することによって、別の系統となるものを含んでいるのかもしれません。

これは先ほどから説明している山形文の仲間です（スライド75）。左側の青森県上北郡東北町楯遺跡は縄文が入っているので、ほかよりも時期的に古いと思いますけど、山形文に沿って入れられた鋸歯文が類似します。ほかは既にご紹介した３遺跡です。石川県大槻３号墳では、地元でつくられた在地の高杯と、東北系の要素が入った甕形土器が一緒に出ている重要な資料です。古津八幡山遺跡の方形周溝墓でも、多系統のものが一緒出土していますが、様々な地域の人がここに来て、一緒にお祭りをして、共立しているというイメージを彷彿とさせるような資料です。地元の人だけじゃなくて東北系の人も来て、亡くなった人、死者に対して一緒にお祭りをしているような、そのようなイメージを、この土器がお墓から出ているということから想像することができます。

これは頸部に重菱形文が入れられた土器です（スライド76）。

展示解説の内容まで入れたくどい説明になってしまいました。何かまとまりのない話で申し訳ありませんでした。以上で終わりにいたします。ご静聴ありがとうございました。

注１：講演会では、一般の方々に分かりやすいようにと配慮し、中期・後期という言い方をしたが、中村五郎氏から曖昧であるとご指摘を受けた。演者は、畿内第Ⅴ様式以後を後期、それ以前を中期とする立場をとっている。

講演会の途中に中村五郎氏の発言があったが、本人からの申し入れにより全て削除させていただいた。

注２：企画展で用いたイラストは全て、高橋美沙子さん（新潟市文化財センター）によるものである。

追加資料５・６_１・６_３：各報告書・論文より引用。秋田県狐崎遺跡の拓本は児玉準氏より提供を受けた。渡邊による実測図・拓本も使用している。

謝辞

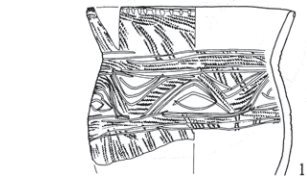
企画展の開催に際しては下記の機関にお世話になりました。

会津美里町教育委員会・会津坂下町埋蔵文化財センター・群馬県埋蔵文化財センター・新発田市教育委員会・胎内市教育委員会・燕市教育委員会・富山県埋蔵文化財センター・長岡市教育委員会・長野市埋蔵文化財センター・南魚沼市教育委員会・福島県文化財センター白河館・福島県立博物館・村上市教育委員会

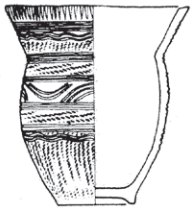
また、資料調査に際しては下記の機関にお世話になりました。

石川県埋蔵文化財センター・一戸町教育委員会・岩手県埋蔵文化財センター・えさし郷土文化館・奥州市埋蔵文化財センター・釜石市教育委員会・小坂町教育委員会・仙台市教育委員会・高岡市教育委員会・滝沢市埋蔵文化財センター・富山市埋蔵文化財センター・中能登町教育委員会・七尾市教育委員会・宮古市埋蔵文化財センター・湯川村教育委員会・六ケ所村郷土館

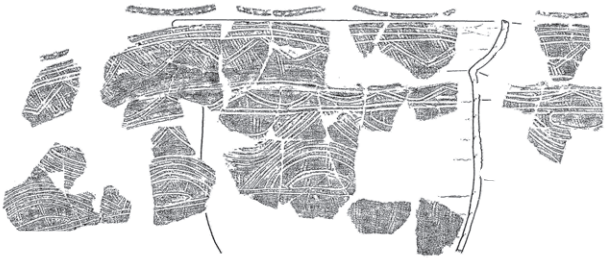
石動遺跡の口頸部間小連弧文と上胴部山形文の系譜と分布



瀬棚南川遺跡



恵山貝塚



七飯高校

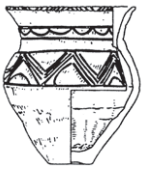
安田（2）遺跡

舘ノ内遺跡

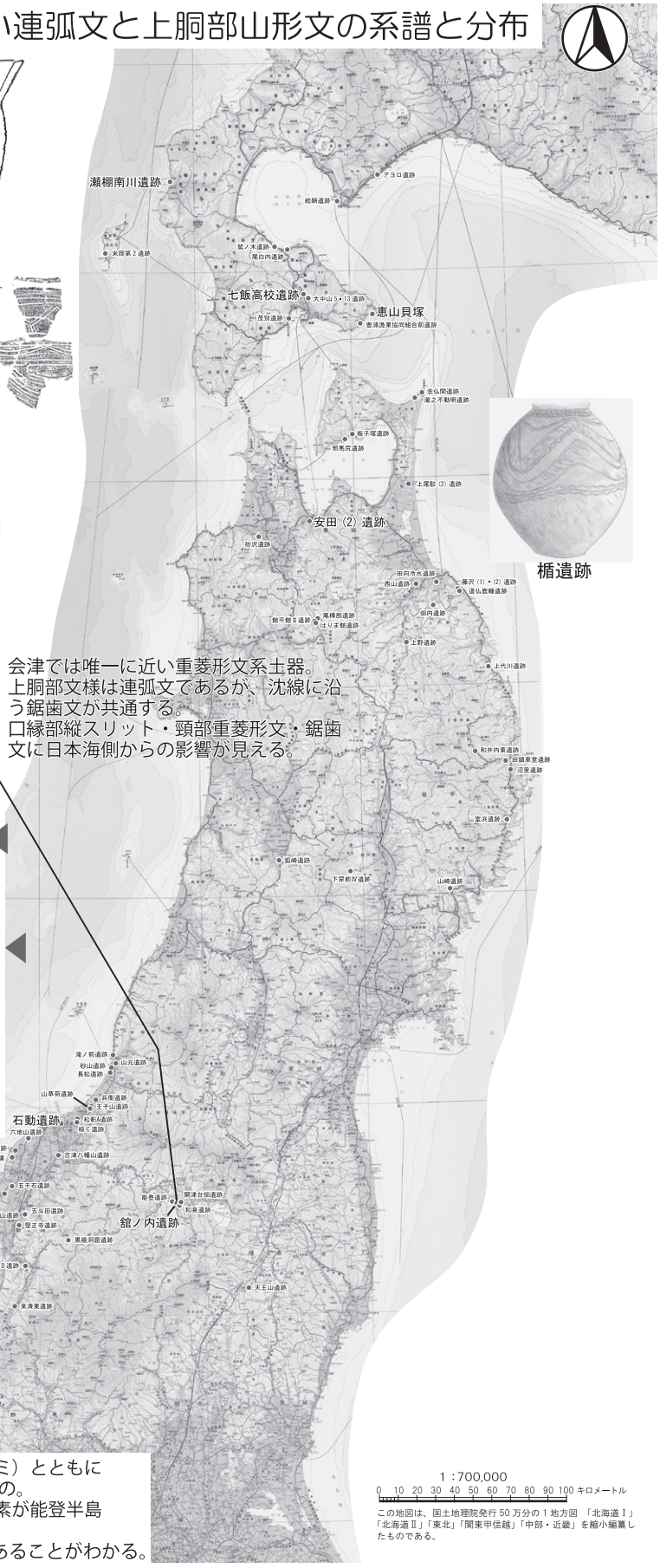
会津では唯一に近い重菱形文系土器。
上胴部文様は連弧文であるが、沈線に沿う鋸歯文が共通する。
口縁部縦スリット・頸部重菱形文・鋸歯文に日本海側からの影響が見える。

石動遺跡

・上胴部の山形文に沿って、弧状や鋸歯状の文様を入れる。
・兵衛遺跡・王子山遺跡にも類例がある。
・内側の三角形の角がクルッと丸くなるクセが特徴で大槻３号墳でも同様。



大槻３号墳

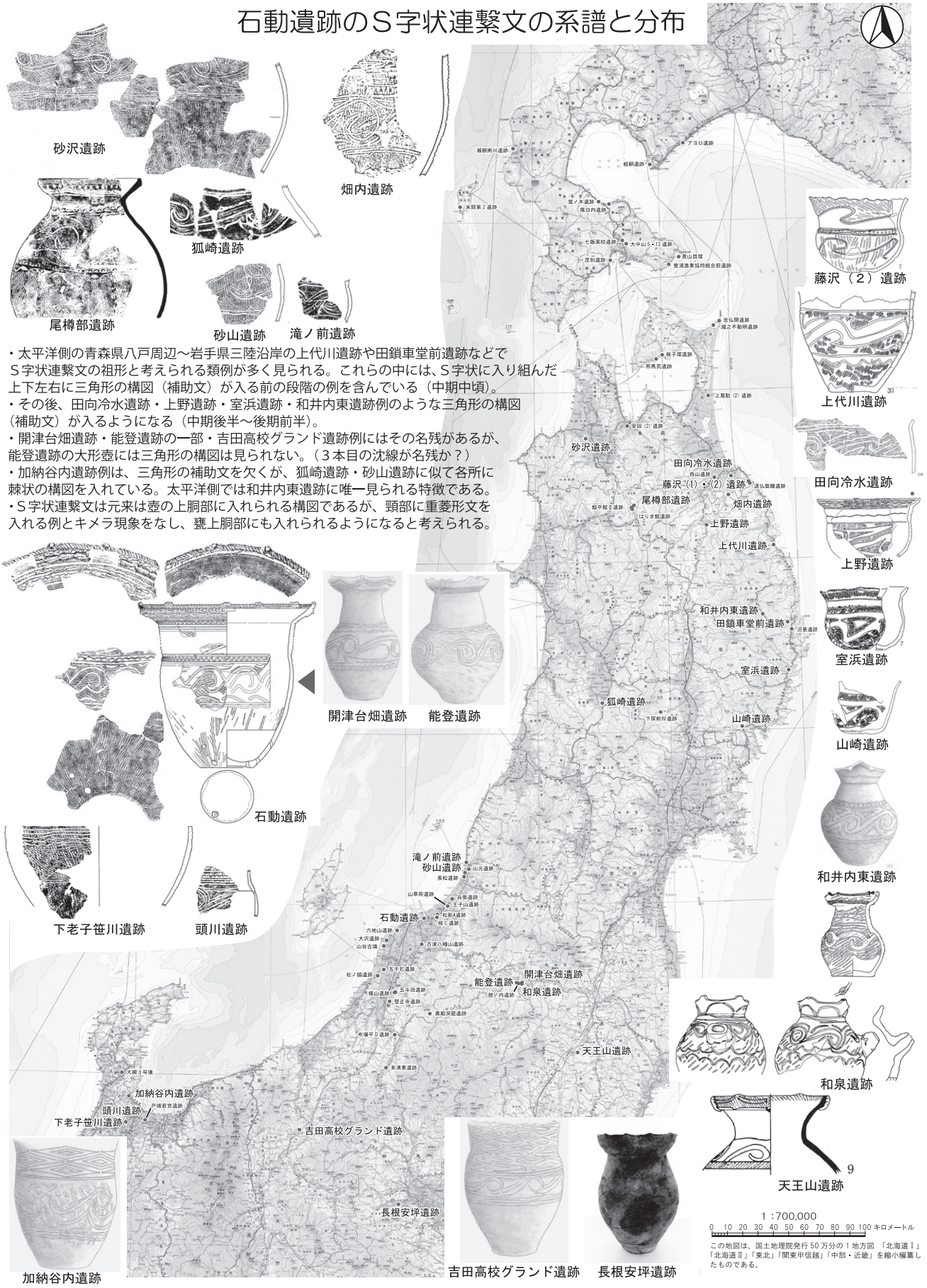


この地図は、国土地理院発行 50 万分の１地方図 「北海道Ⅰ」「北海道Ⅱ」「東北」「関東甲信越」「中部・近畿」を縮小編纂したものである。

・小連弧文や波状文は、口縁部の縦スリット（キザミ）とともに北方系　続縄文式土器（恵山式）の影響を受けたもの。
・日本海を介して、弥生時代後期前半に北方系の要素が能登半島にまで伝わっていることがわかる。
※太平洋側には見られないので、日本海ルートであることがわかる。

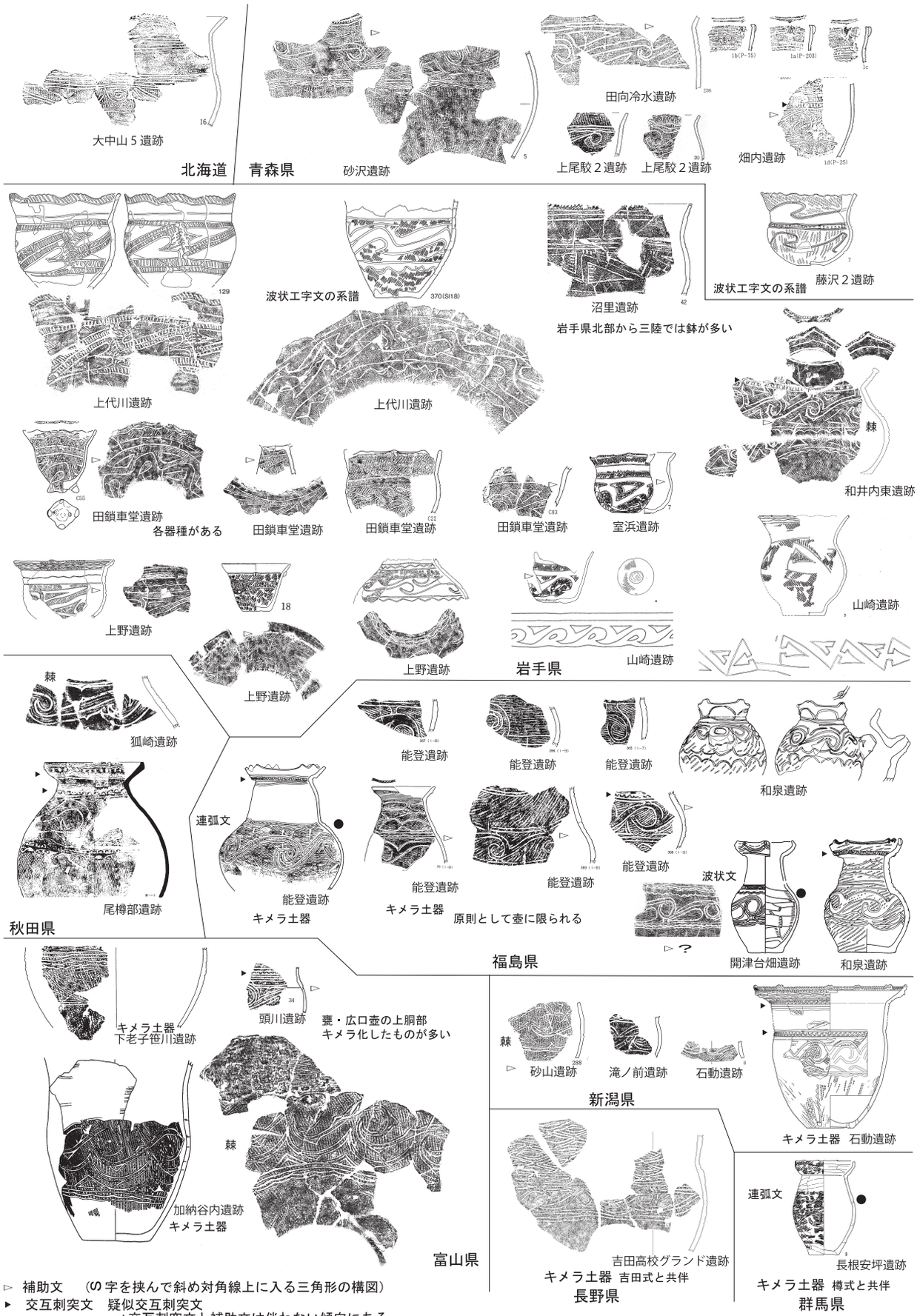
『天王山式土器からみた東日本の弥生社会ー古津八幡山遺跡成立期の動向ー』追加資料５

石動遺跡のＳ字状連繋文の系譜と分布



・太平洋側の青森県八戸周辺～岩手県三陸沿岸の上代川遺跡や田鎖車堂前遺跡などでＳ字状連繋文の祖形と考えられる類例が多く見られる。これらの中には、Ｓ字状に入り組んだ上下左右に三角形の構図（補助文）が入る前の段階の例を含んでいる（中期中頃）。
・その後、田向冷水遺跡・上野遺跡・室浜遺跡・和井内東遺跡例のような三角形の構図（補助文）が入るようになる（中期後半～後期前半）。
・開津台畑遺跡・能登遺跡の一部・吉田高校グランド遺跡例にはその名残があるが、能登遺跡の大形壺には三角形の構図は見られない。（３本目の沈線が名残か？）
・加納谷内遺跡例は、三角形の補助文を欠くが、狐崎遺跡・砂山遺跡に似て各所に棘状の構図を入れている。太平洋側では和井内東遺跡に唯一見られる特徴である。
・Ｓ字状連繋文は元来は壺の上胴部に入れられる構図であるが、頸部に重菱形文を入れる例とキメラ現象をなし、甕上胴部にも入れられるようになると考えられる。

『天王山式土器からみた東日本の弥生社会ー古津八幡山遺跡成立期の動向ー』追加資料６_１

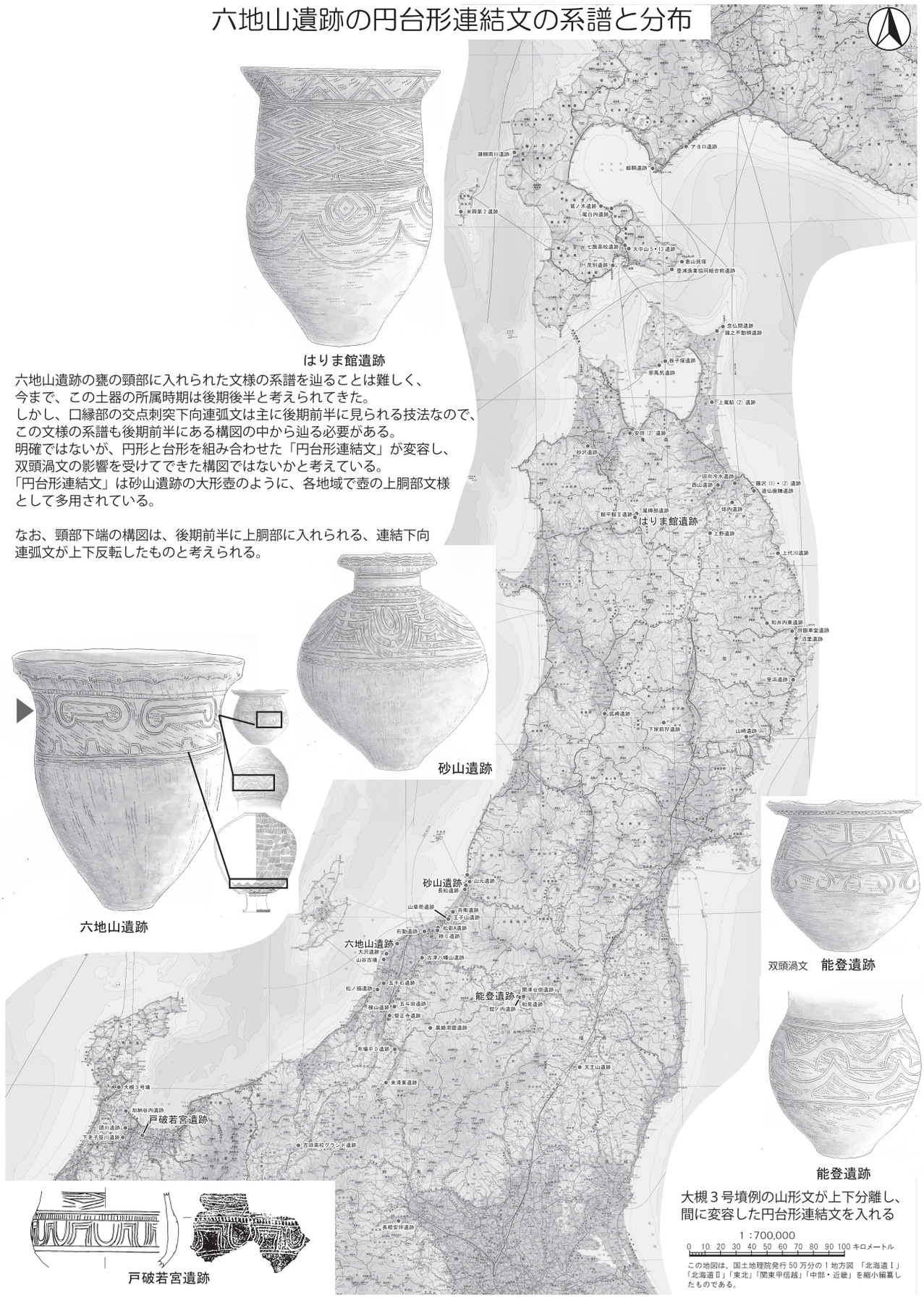


▷ 補助文　（の字を挟んで斜め対角線上に入る三角形の構図）
▸ 交互刺突文　疑似交互刺突文
⇒交互刺突文と補助文は伴わない傾向にある
● 付加的な文様

S字状連繋文の仲間　S=1/8

『天王山式土器からみた東日本の弥生社会ー古津八幡山遺跡成立期の動向ー』追加資料６_１

六地山遺跡の円台形連結文の系譜と分布



六地山遺跡の甕の頸部に入れられた文様の系譜を辿ることは難しく、
今まで、この土器の所属時期は後期後半と考えられてきた。
しかし、口縁部の交点刺突下向連弧文は主に後期前半に見られる技法なので、
この文様の系譜も後期前半にある構図の中から辿る必要がある。
明確ではないが、円形と台形を組み合わせた「円台形連結文」が変容し、
双頭渦文の影響を受けてできた構図ではないかと考えている。
「円台形連結文」は砂山遺跡の大形壺のように、各地域で壺の上胴部文様
として多用されている。

なお、頸部下端の構図は、後期前半に上胴部に入れられる、連結下向
連弧文が上下反転したものと考えられる。

『天王山式土器からみた東日本の弥生社会ー古津八幡山遺跡成立期の動向ー』追加資料６_３

史跡古津八幡山　弥生の丘展示館　新潟市文化財センター　企画展２

天王山式土器からみた東日本の弥生社会

古津八幡山遺跡成立期の動向

- 201115　新潟市文化財センター
- 渡邊朋和

1

スライド１

スライド２

◎今日の講演のあらすじ　1

① 古津八幡山遺跡では天王山式系列土器はあるが、中期後半の土器（会津系～川原町口式・北陸系～小松式・秋田系～宇津ノ台式など）は1点も出土していない！！

② 古津八幡山遺跡では竪穴住居や環濠などの遺構内で後期の北陸系土器と東北系土器（天王山式系列）が共伴している
⇒古津八幡山遺跡の調査成果から、天王山式系列土器の主体は後期に属すると考えられる

③ 白河市天王山遺跡の出現は、後期前半の後半段階（※後期初頭ではない）

④ 東日本では広範囲で中期後半（終末）～後期前半（初頭）の遺跡が少ない
⇒実態がよくわからない　研究をする際の最も大きな問題点

⑤ 中期終末の遺跡と後期初頭の遺跡は継続しない場合が多い⇒集落・遺跡の断絶がある

⑥ 後期前半（初頭）の天王山式系列土器には、中期後半（終末）の平行沈線文系土器の要素が認められる

⑦ 中期後半（終末）にあった地域差は、後期になると解消され、東北一円で「天王山式土器分布圏」に統一されたとする見解もあるが、後期にも明瞭な地域差がある
⇒「天王山式土器」として一括にすることは適当ではない

3

スライド３

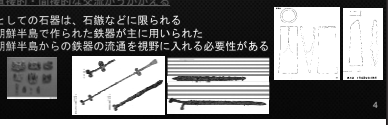
◎今日の講演のあらすじ　2

⑧ 「天王山遺跡天王山式土器」成立以前の後期前半（初頭）に、それぞれの地域で前時期（中期後半）に系譜を辿れない似かよった文様が広域に認められる　（S字状連鎖文）
⇒広域に人の往来があったことを裏付ける

⑨ 「天王山遺跡天王山式土器」で文様帯が確立する以前には系統・出自の異なる文様が一個体内（一文様帯内）に描かれる
⇒キメラ現象が顕著にみられる

⑩ 北陸では東北北部・北海道南部から直接間接にもたらされたと考えられる土器がみられる
⇒日本海を介した直接的・間接的な交流がうかがえる

⑪ 後期になると利器としての石器は、石鏃などに限られる
⇒石器の代わりに朝鮮半島で作られた鉄器が主に用いられた
⇒日本海の物流は朝鮮半島からの鉄器の流通を視野に入れる必要性がある



4

スライド４

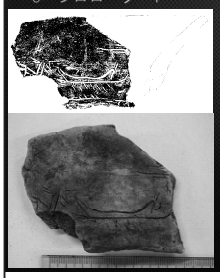
紀元前後

時期	北陸	長野	古津八幡山遺跡	六地山遺跡	砂山遺跡	金津	中通り	東関東
中期後半	戸水B式	栗林式	―		●	川原町口式 鳴山下式		
			―	△	●	油田Y		
後期前半1	猫橋式	吉田式		六地山	●	和泉遺跡		東中根
後期前半2	猫橋式	吉田式	外環濠C	六地山	●	能登遺跡		東中根
後期前半3	猫橋式	吉田式	方形周溝墓１	○	●		天王山式 古 天王山式 新	東中根
後期後半1	法仏式	箱清水式	方形周溝墓２				明戸遺跡	十王台
後期後半2	法仏式	箱清水式	●					
後期終末1			●					
後期終末2			●					

5

スライド５

0　プロローグ　1



『弥生人の船』大阪府立弥生文化博物館2013

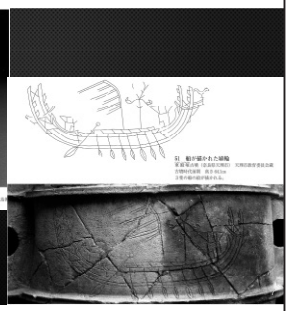
竪板型準構造船

準構造船が描かれた壺－日本海を船団が行き交っていた
竪板型1艘_櫂8～16人乗り？
貫型2艘？新潟市江南区道正遺跡（古墳時代前期）

6

スライド６

貫型準構造船



『弥生人の船』大阪府立弥生文化博物館2013

スライド７

0　プロローグ　2　天王山式土器を研究する目的 きっかけ

0_1_国指定史跡 古津八幡山遺跡の消長を明らかにする
時期・年代設定の基準になる土器編年が流動的（前後の時期が逆転する場合もありうる！！）
⇒時間軸が変わってしまうと、ストーリーが根本から崩れてしまう

0_2_越後平野の弥生時代のおける多（他）系統の土器群の共伴状況
・古津八幡山遺跡　３系統以上の土器群が共存　北陸系・東北系・折衷系
・六地山遺跡　多系統の土器群が共存　（新潟市石動遺跡・松影A遺跡なども）
・弥生土器の研究目的が、土器編年（地域ごとの変遷の尺度）の確立のためだけではなく、
時期ごとの土器の系統・系譜なども明らかにできる　⇒人の動きを明らかにする

0_3_北陸　富山県・石川県への資料調査
弥生の丘展示館の企画展の事前調査のために、2019年5月に富山県・石川県の資料調査に行った際に、
「えっ！！新潟ではあまり見たことない変な土器だな？天王山式土器分布の外殻圏だから文様帯が
変容しているのかｗ」と最初は思ったのだが、実は、そうではないことが後にわかった

0_4_六地山遺跡の再整理

0_5_恩師である磯崎正彦先生の業績
「天王山式土器の編年的位置に就いて」『上代文化』第26輯（國學院大學考古学会）1956.4

スライド８

1　研究方法　1

1_1_研究対象時期

- 弥生時代中期中頃～後期終末、古墳時代初頭
  天王山式土器前後の時期が研究対象

1_2_研究対象の特徴と制約

- 研究対象とする時期は、遺跡そのものが少なく、完形土器も少ない
- 破片資料までを研究対象としている（形になる土器だけを見ていてもわからない）
- 前の時期（中期後半）との継続性が少ない？？　看過されて来た
- 中期後半の地域性が解消され、所謂天王山式土器に画一化されたと考える研究者もいる

1_3_研究対象とする地域と、現在把握している遺跡数

北海道62、青森88、岩手147、宮城65、秋田38、山形52、福島213、茨城90、栃木、千葉
群馬、新潟213、富山36、石川40、福井　約1000遺跡を集成し、現在進行中・・・

スライド 9

1　研究方法　2

1_4_遺跡・遺物の集成作業

・報告書・論文など文献を見て、対象遺物が掲載されているかを調べる
- 都道府県単位に遺跡管理番号を付けて、遺跡位置をグーグルアースプロに入れる（KMZ）
  ー地理感のない他県では極めて有効　県単位・県内のエリア単位で把握する
- 土器図版をコピー・スキャンして、集成図を作成

⇒集成作業を行うことによって、地域を越えて類似する属性の把握が可能

・土器の時期・特徴・系統を入れた集成表を作成　縄文原体（R・L）の記録は必要不可欠
- 資料調査に行き、写真撮影を行い、可能な限り実測図を作成する　・・・単なる収集癖？
  富山県・石川県・新潟県は9割以上調査済み、岩手県は8割程度、福島県・・・

1_5_型式学的研究、分布論的研究

・型式学　器形や文様の変化・変遷を追う　型式・系統毎の集成・・
・分布論

スライド10

2　天王山遺跡　天王山式土器

2_1_天王山遺跡（福島県白河市）
阿武隈川の北側にある独立丘陵上（豆柄山）、比高80㍍
古代の官道に近接し、白河関と白河郡衙（関和久遺跡）の中間に位置する

2_2_天王山式土器の８つの特徴（山内清男・中村五郎・馬目順一・佐藤信行・石川日出志等）
①交互の刺突（文）ー交互刺突文
②口縁の突起の発達：北方系
③受口状口縁の多用：東北南部系
④頸部の一部の横帯状の素文化：東北南部系？
⑤磨消縄文の発達：東北南部系？
⑥上胴部の下向き弧線文（しばしば連弧文となる）：北方系
⑦条の縦走する縄文：RL　北方系
⑧条の横走する縄文：LR

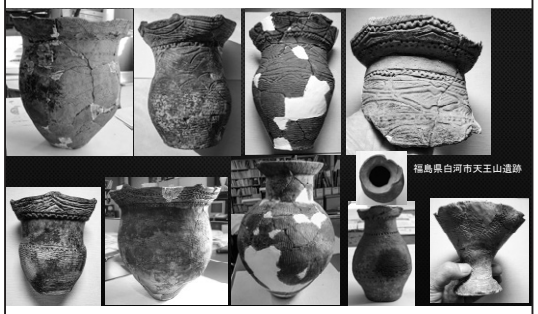
スライド16

①交互の刺突（文）ー交互刺突文
②口縁の突起の発達
③受口状口縁の多用
④頸部の一部の横帯状の素文化
⑤磨消縄文の発達
⑥上胴部の下向き弧線文（しばしば連弧文となる）
⑦条の縦走する縄文　RL
⑧条の横走する縄文　LR

環状石器

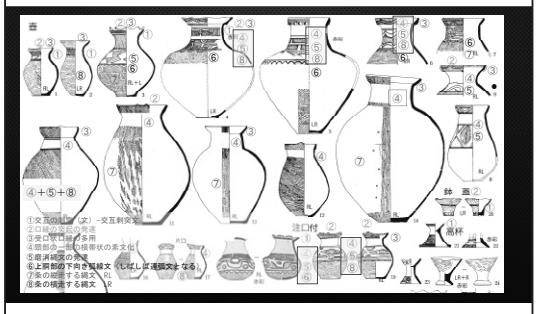
アメリカ式石鏃

スライド20

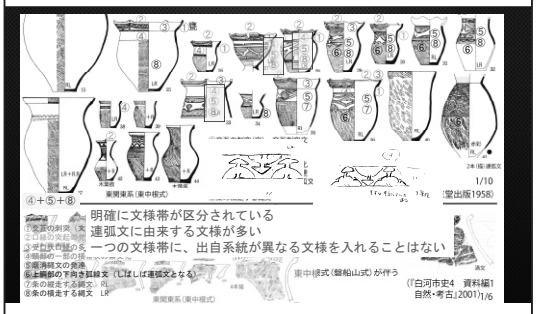


スライド22

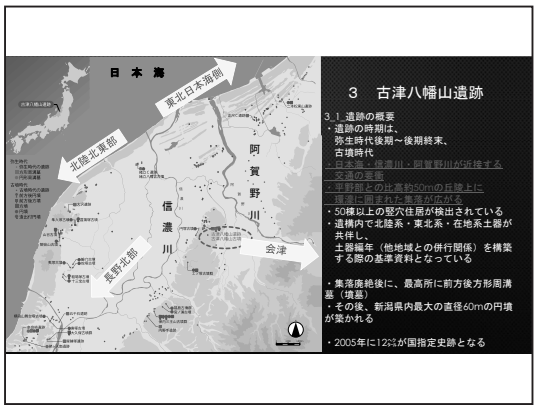
スライド23



スライド24

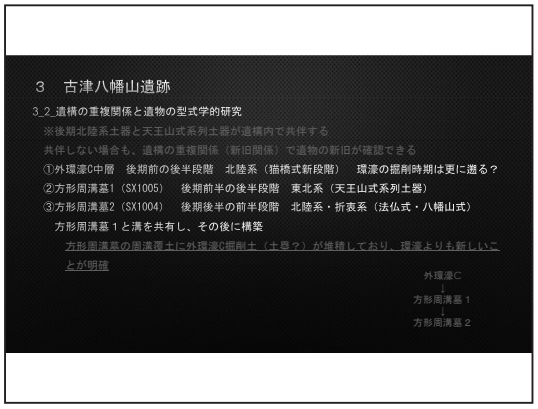


スライド25

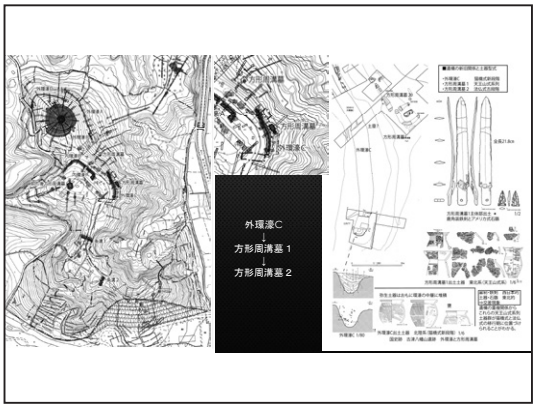


スライド26

スライド27

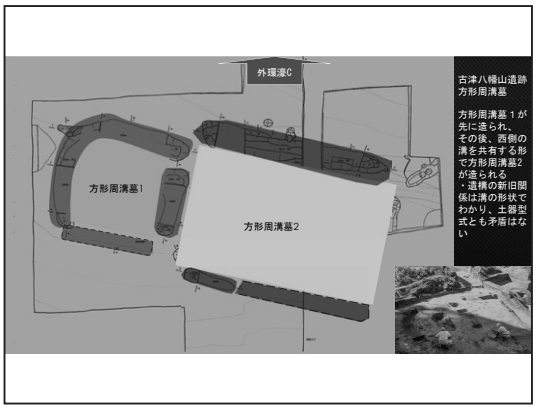


スライド31

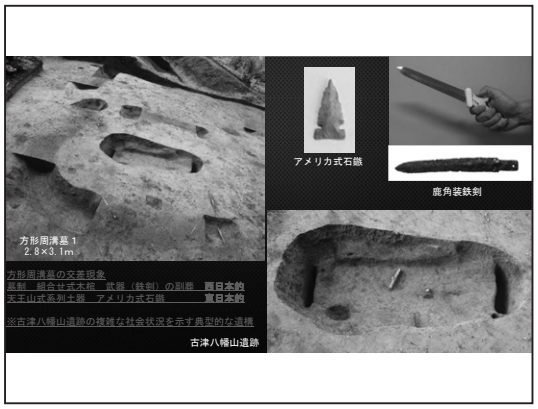


スライド32

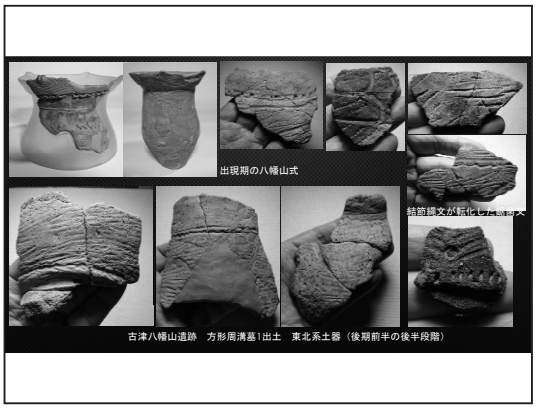
スライド33



スライド36

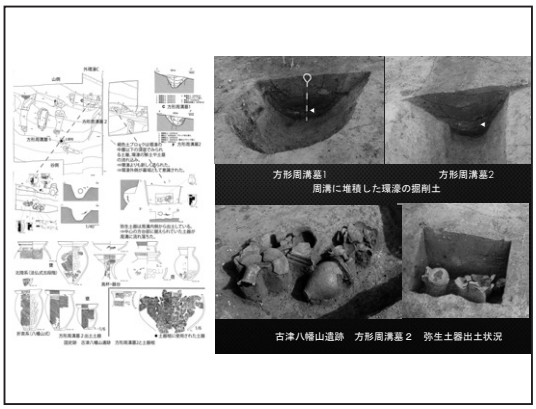


スライド38

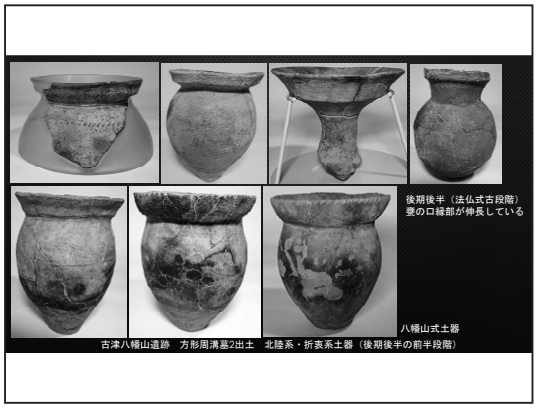


スライド40

スライド41

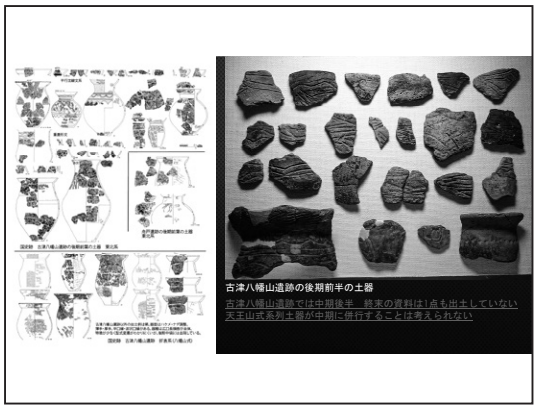


スライド42



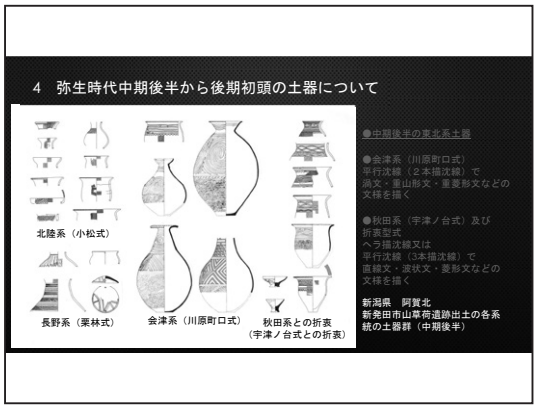
スライド43

スライド44

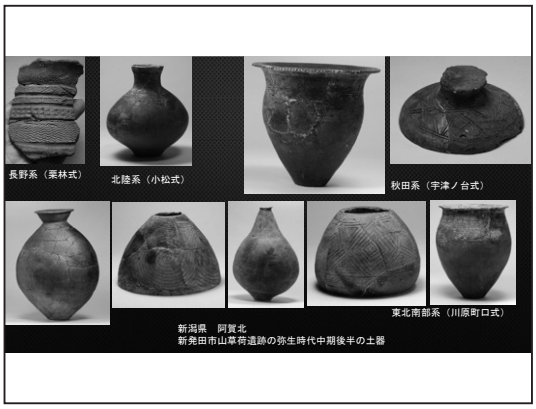


スライド45

スライド46

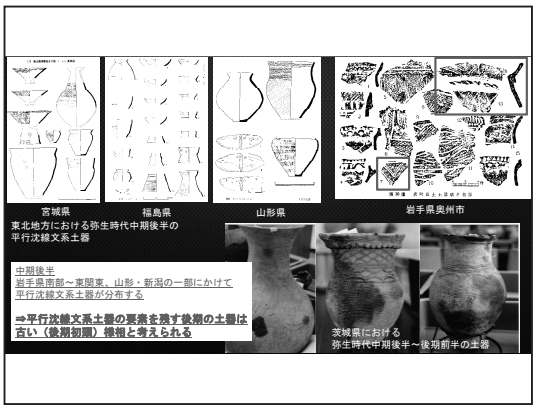


スライド47



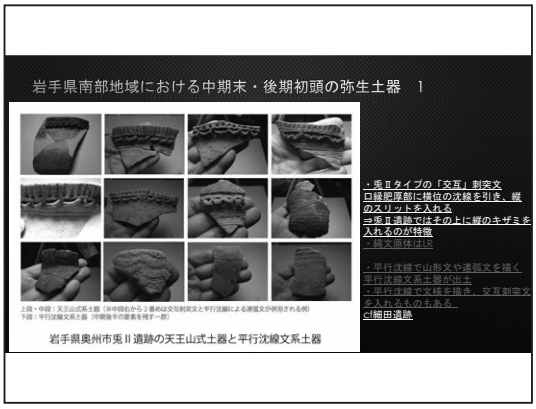
スライド48

スライド49



スライド50

スライド51

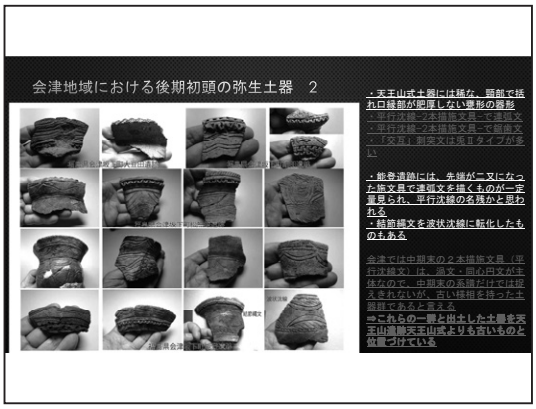


スライド52

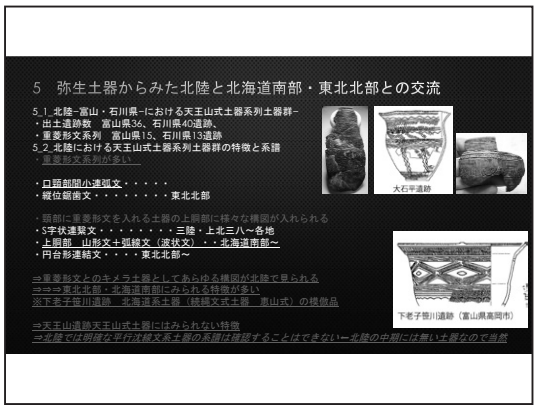
スライド53

スライド54

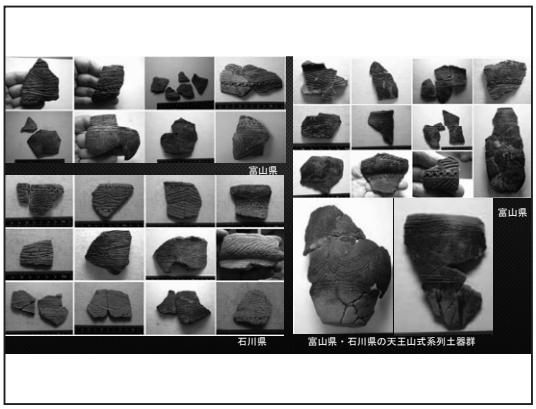
スライド55



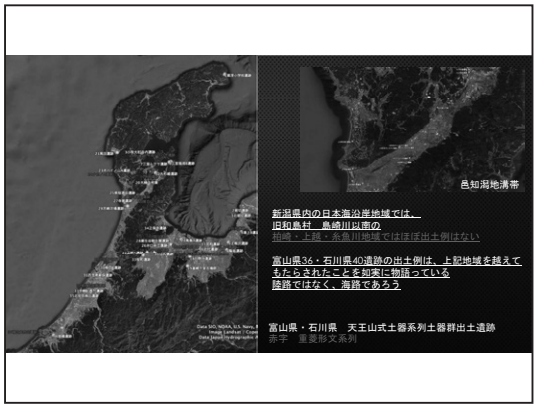
スライド56



スライド57

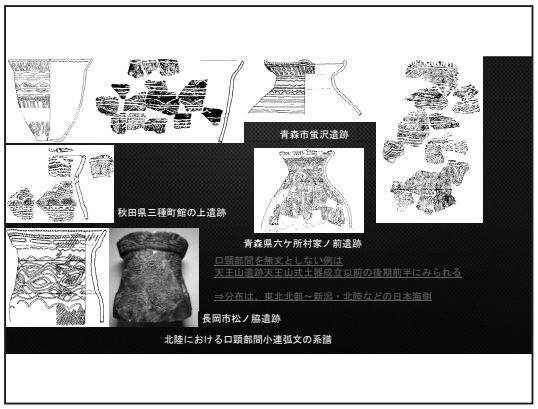


スライド58

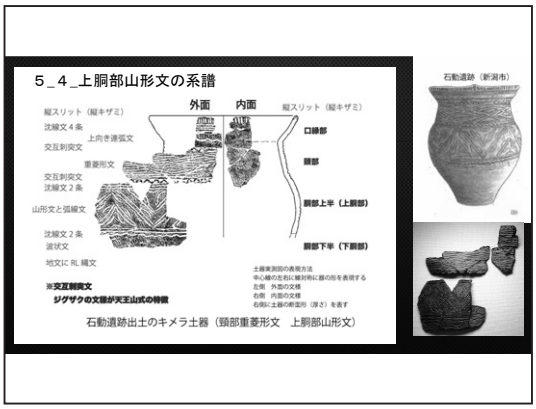


スライド59

スライド60

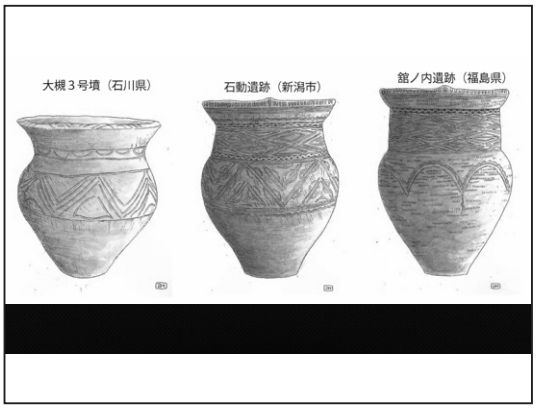


スライド61

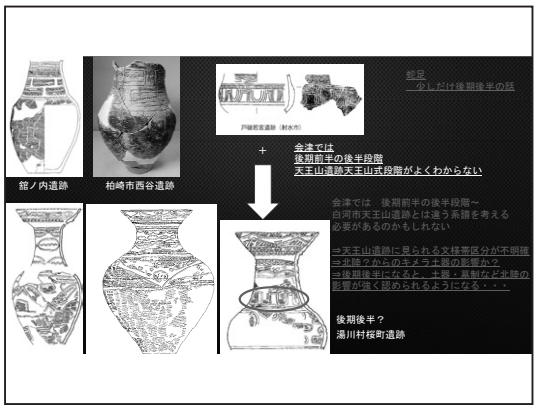


スライド62

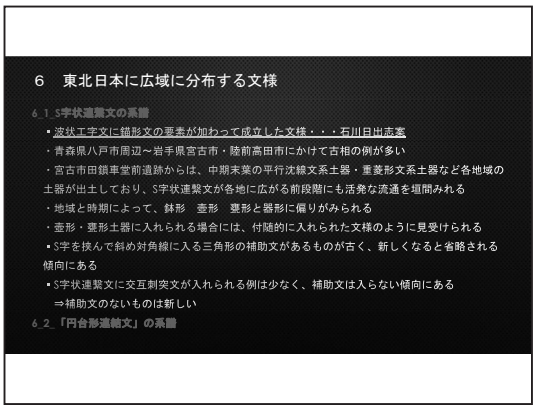
スライド63



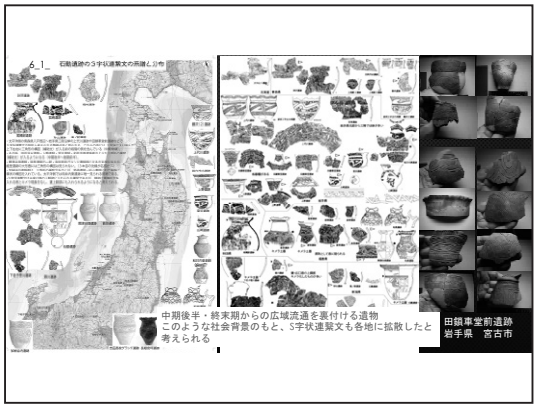
スライド64



スライド65

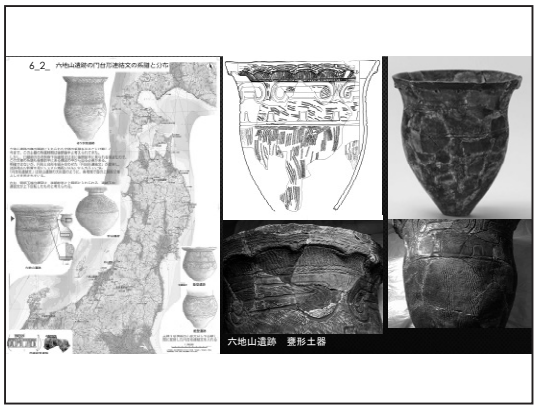


スライド66



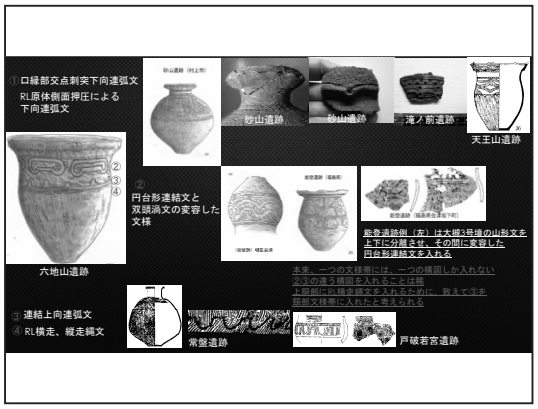
スライド67

スライド68

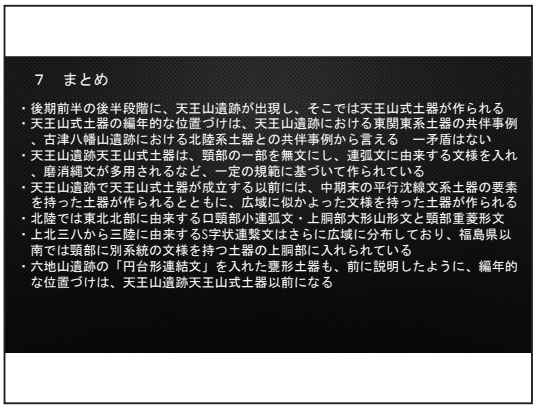


スライド69

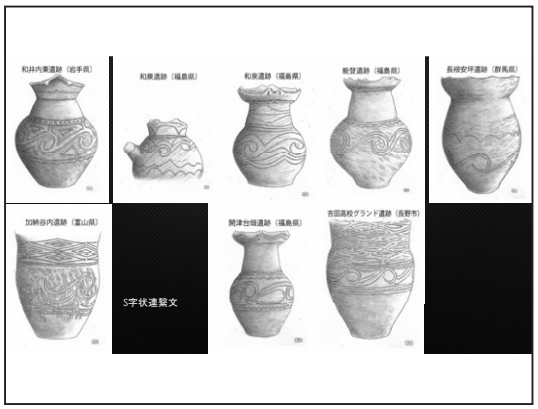
スライド70



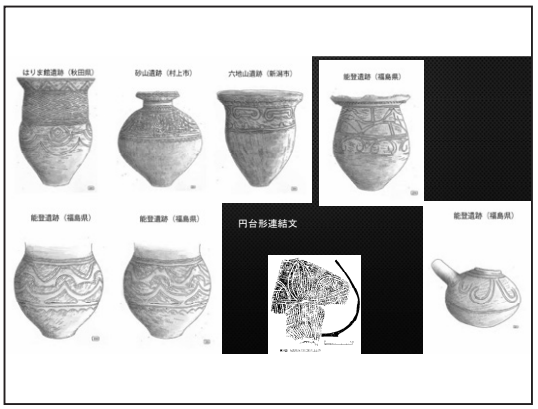
スライド71



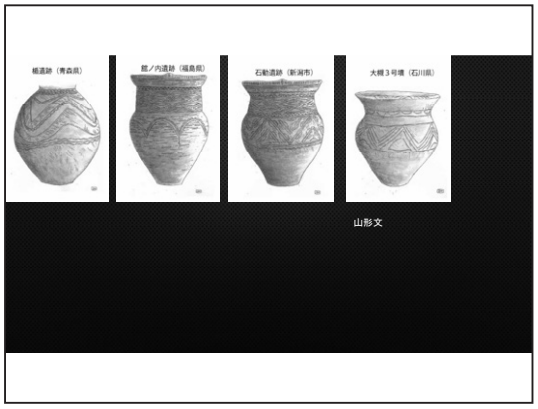
スライド72



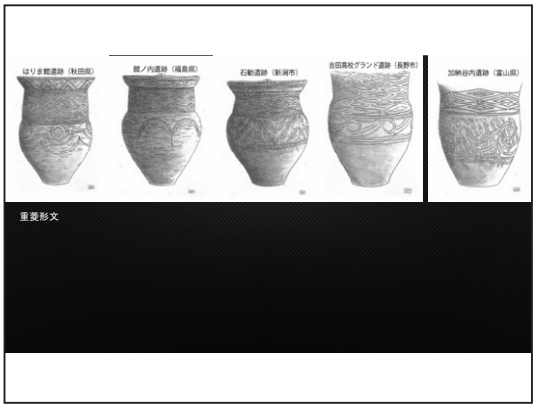
スライド73



スライド74



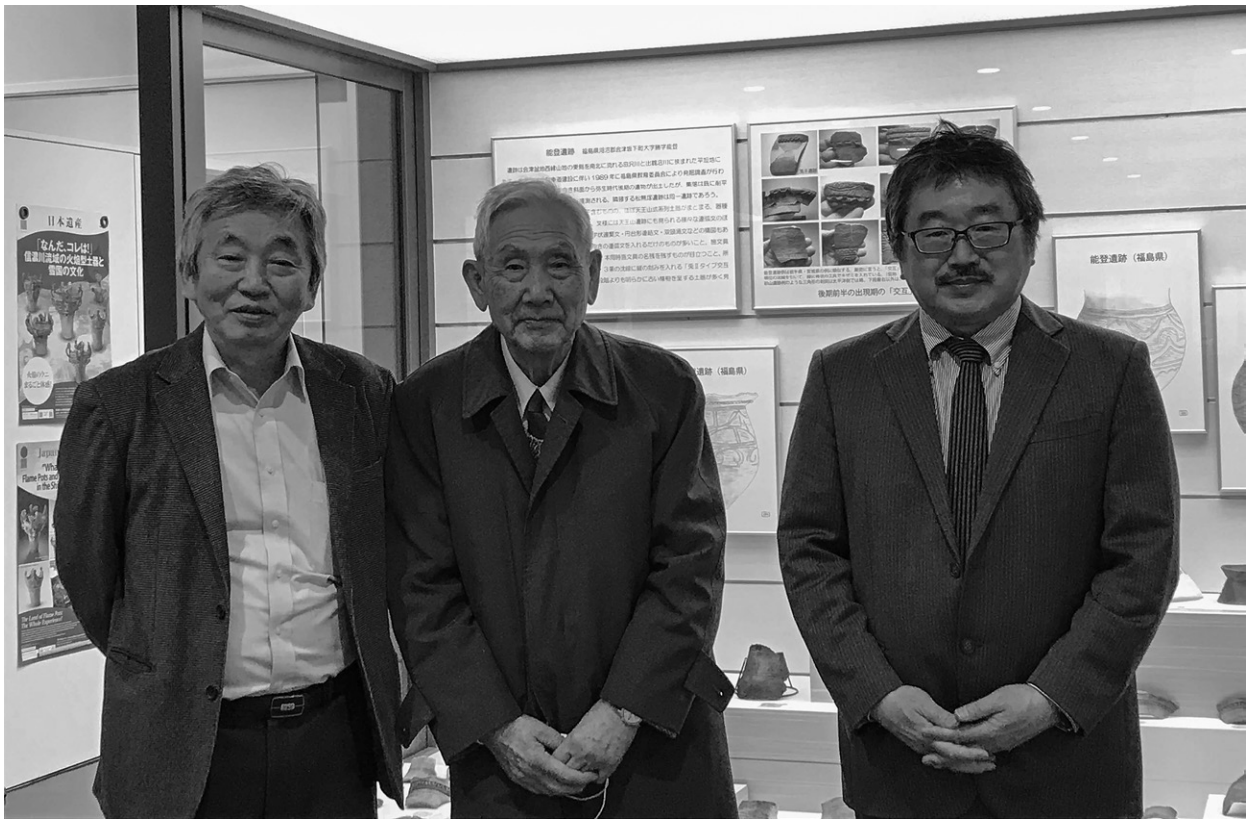
スライド75



スライド76

写真・図出展一覧

スライド４：新潟県教育委員会・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団2000『裏山遺跡』、新潟県教育委員会2010『立野大谷製鉄遺跡 姥ヶ入製鉄遺跡 姥ヶ入南遺跡』、三条市教育委員会1999『内野手遺跡・経塚山遺跡』、木島平村教育委員会2002『根塚遺跡』、東義大学校博物館2000『金海良洞里古墳文化』
スライド６・スライド７：大阪府弥生文化博物館2013『弥生人の船 －モンゴロイドの海洋世界－』
スライド16：坪井清足1958「福島県白河市久田野天王山遺跡の土器」『弥生式土器集成１』弥生式土器集成刊行会
スライド20：坪井清足1958「福島県白河市久田野天王山遺跡の土器」『弥生式土器集成１』弥生式土器集成刊行会、（公財）福島県文化振興財団福島県文化財センター白河館2018『白河市天王山遺跡の時代』
スライド24：坪井清足1958「福島県白河市久田野天王山遺跡の土器」『弥生式土器集成１』弥生式土器集成刊行会
スライド25：坪井清足1958「福島県白河市久田野天王山遺跡の土器」『弥生式土器集成１』弥生式土器集成刊行会 、福島県白河市2001『白河市史第４巻（資料編１）』
スライド26・27：新潟市文化財センター2013『国指定史跡古津八幡山遺跡歴史の広場 弥生の丘展示館ガイドブック№２（弥生時代編）』、新潟市文化財センター2013『国指定史跡古津八幡山遺跡歴史の広場 弥生の丘展示館ガイドブック№３（古墳・奈良・平安時代編）』
スライド32・36・42・44・45：新津市教育委員会2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』、新津市教育委員会2004『八幡山遺跡発掘調査報告書－第11・12・13・第14次調査－』
スライド47：坪井清足1958「福島県白河市久田野天王山遺跡の土器」『弥生式土器集成１』弥生式土器集成刊行会
スライド50：宮城県1981『宮城県史34資料篇11考古資料』宮城県史刊行会、福島県1964『福島県史第６巻資料編１考古資料』、山形県1969『山形県史資料篇11考古資料』、伊東信雄1954「岩手県佐倉河村発見の弥生式遺跡」『古代学』第３巻２号古代学協会
スライド57：青森県埋蔵文化財調査センター1985『大石平遺跡発掘調査報告書』、（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告書』
スライド59：地図・Google Earth
スライド62・67：集成図の出典は省略
※スライドに使用した土器の写真は全て渡邊が撮影した。



当日会場にて撮影
（石川日出志・中村五郎・渡邊朋和）

■令和２年度 企画展３関連講演会（第３回）

縄文時代から中世の大沢谷内遺跡

相田泰臣（新潟市文化財センター）

はじめに

最初に「大沢谷内遺跡展」を企画した経緯についてお話をします。大沢谷内遺跡ではこれまで25回の発掘調査を行っており、2013年に私も１年間だけ調査を担当しました。2013年に調査を行った場所についてはその後、2015年に報告書を出しました。さらにその後、2020年の３月に、大沢谷内遺跡で未報告だった場所について、それまでの調査成果も含めて報告書をまとめたという経緯もあり、今回企画をしたという流れがあります。

また、大沢谷内遺跡では、新潟市から田上町、加茂市を抜けて三条市へとのびる国道403号線の建設が発掘調査の原因の大部分を占めているわけですが、それが去年の３月に新潟市と田上町との間で開通したということもありまして企画をしたわけです。

大沢谷内遺跡ですが、縄文時代から室町時代までの遺跡です。一番古いのは縄文時代晩期で、紀元前2,500年くらいからでしょうか、一応その時期が、大沢谷内遺跡で一番古い遺物が出ているということになります。もう少し細かく言うと、縄文時代晩期の中ごろの土器が出てきます。

その後ですが、弥生時代や古墳時代の遺物も少ないながら出土しています。また、そのあとは飛鳥時代、おおむね７世紀になりますが、さらに奈良時代、平安時代、鎌倉・室町時代と、長期にわたって集落が営まれた遺跡と言えます。

これは私が調査をした場所の、調査終了後に撮影した写真になります（スライド１）。私が調査をしたのはこの部分ですが、この工事をしている場所が403号線になります。右側が新潟市の方角ですね。左側が田上町のほうに抜けて行く道路で、今は全面供用開始しており、非常にいい道路ができております。私はその乗り入れ部分の調査を担当いたしました。信濃川からちょうど１㎞丘陵側に入った場所に大沢谷内遺跡は位置しております。今は秋葉区になりますが、旧小須戸町の遺跡です。

大沢谷内遺跡は秋葉区の新津丘陵と信濃川に挟まれた、標高約４ｍの沖積地に位置する遺跡です（スライド３）。大沢谷内遺跡の範囲は東西800ｍくらい、南北で1,300ｍくらいの広い遺跡です（スライド４）。また、大沢谷内遺跡の北100ｍのところには大沢谷内北遺跡という遺跡もありまして、大沢谷内遺跡とつながりをもった遺跡であるというふうに考えられます。

これは信濃川のほうから撮影した写真で、菩提寺山だとか護摩堂山などの丘陵が、遺跡から１㎞東側にあるというような位置関係になります（スライド５）。これが403号線です。この403号線の調査が大沢谷内遺跡の主要な調査原因になっています。

この図のスクリーントーンのちょっと濃くなっている部分が、大沢谷内遺跡の周知範囲ということになります（スライド６）。さらに、その中でまた濃くなっている所が、発掘調査をした地点です。大沢谷内遺跡ですが、調査地点によって、北から大沢谷内北遺跡があって、さらに大沢谷内遺跡の１区、２区、３区、４区、少し離れて５区、６区、７区、８区、９区、10区、11区というふうに、調査場所によってそれぞれ調査区の名称を付けています。今日の話の中で何区などという話が出てきますが、調査場所によって１から11までの数字が付けられているということで聞いていただければと思います。

また、これは大沢谷内遺跡から出土した土器を時代順に並べた図になります（スライド７）。右側には大沢谷内遺跡の５・６・７区から出てきた遺物を、左側には大沢谷内遺跡のそれ以外の地点や、あと大沢谷内北遺跡から出てきた遺物を示しているという図になります。調査区によって中心となる時期が違ったりしているので、その辺もまた見ていきたいと思います。

それでは、縄文時代から中世までの大沢谷内遺跡ということで、時代順に縄文時代、弥生時代・古墳時代、飛鳥時代･奈良時代の前半、奈良時代の後半･平安時代、最後に鎌倉時代・室町時代という順番でお話したいと思います。ちなみに、飛鳥時代・奈良時代・平安時代を古代、鎌倉時代と室町時代を中世と呼ぶということで、今回お話をさせていただきます。

縄文時代

スライドに映っているのが縄文時代の大沢谷内遺

跡および大沢谷内北遺跡の遺構の平面図になります（スライド９左）。右側には同じ図を一部拡大しています（スライド９右）。緑色に塗ってある部分が竪穴住居で、赤く塗ってある所が掘立柱建物、溝や谷などは青色で示しています。大沢谷内遺跡と大沢谷内北遺跡をあわせますと、まず竪穴住居が17棟見つかっています。大沢谷内遺跡の３区ですとか４区で15棟見つかっています。この４区の南側に谷と示してありますが、幅が100ｍくらいの谷が存在していたということがわかっていて、その谷の北側と南側とでちょっと時代が異なりますが、北側では竪穴住居が15棟で、谷を挟んだ南側の６区という所で、竪穴住居が２棟見つかっています。掘立柱建物は15棟見つかっていて、この３区、４区で７棟、南側の６区で８棟見つかっています。

建物以外では、焼土遺構という土が焼けた遺構が非常に多く見つかっておりまして、大沢谷内北遺跡で３基、大沢谷内遺跡の３・４区で37基、６区で60基の土が焼けた地点が確認されています。

出土する土器を見ると時代や時期が分かるのですが、３区や４区といった谷の北側の大沢谷内遺跡の調査区から出てきている土器というのが、縄文時代の晩期の中葉という時期で、大沢谷内遺跡で一番古い土器となります。一番古い資料が、この３区、４区周辺で見つかっています。そのあとですが、この谷を挟んで南側の５区や６区では、もう少し新しい時期の資料が見つかっていて、スライド７の右上の図になりますが、縄文時代晩期の後葉の時期の資料がこの５区と６区で見つかっています。

また、大沢谷内遺跡から北へ100ｍに位置する大沢谷内北遺跡ですと、そこでも縄文時代の晩期の中葉の時期の遺物が見つかっているのですが、大沢谷内遺跡の１～４区の資料よりも新しい時期の遺物となります。ただし、５区と６区、７区の資料よりは古い時期の資料が、この大沢谷内北遺跡では見つかっています。

これは大沢谷内北遺跡の平面図です（スライド10右）。左下のほうから右上、北東方向に向かって地形が下がっていて、その傾斜に合わせて杭の列が見つかっています。写真のような櫂、舟をこぐ時の木製具が出土しています。この先端部分も非常に精巧に加工してあります。それと櫛ですね。赤い漆を塗った櫛なども見つかったりしています。近くに船着き場があったのではないかと考えられています。

縄文時代の流れをまとめますと、最初に１区から４区という所で、大沢谷内遺跡の中で一番古い時期に活動が見られ、そのあと大沢谷内北遺跡というさらに北側のほうに移動をしています（スライド11）。その要因ですが、この時期に谷が崩れていることが発掘調査で分かっており、そのような自然環境の変化によって移動したのではないかと考えられております。さらに縄文時代の晩期後葉の時期になると、今度は谷を挟んで南側の５区、６区という所に、また移動をしているというような動きになります。

これは大沢谷内遺跡の竪穴住居です（スライド12）。いずれも丸い形の竪穴住居が見つかっています。これが近景の写真です（スライド13）。周りに壁溝を伴う竪穴住居です。それと掘立柱建物です（スライド14･15）。地面に直接柱を立てた建物で、このような掘立柱建物も確認されています。

これは縄文時代晩期中葉の土器です。浅い鉢ですとか煮炊きに使用する深い鉢、それと壺も出ています（スライド16）。

大沢谷内遺跡や大沢谷内北遺跡の土器を見ると、精製土器、磨いたり赤く塗ったりしてきれいにつくられた土器というのが２割前後です（スライド17）。粗製土器、特にきれいに調整をしないような土器というのが７割から８割ということで、粗い土器が非常に多いという傾向があります。

また、出土している石器を見てみると、特に大沢谷内北遺跡や大沢谷内遺跡の６区で点数自体が少ないと言えます（スライド18）。その石器について、食べ物の調達や加工に用いた石器である石鏃や磨石、石皿、それと工具的な性格の強い石器、斧ですとか石匙など、あと非実用的な石器で、石棒や石剣など祭祀などに使った石器ということで、３つに一応区分をしてみると、大沢谷内北遺跡や大沢谷内遺跡の６区では、ほぼ100％、調理加工に用いた石器しか見つかっていないというような状況です。大沢谷内遺跡の１区から４区もおおむね同じような傾向ですが、こちらのほうでは工具的な性格の強い石器も少し見つかっているという違いがあります。ただし、非実用的な石器はほとんど見つかっていないというような状況です。この時期のほかの遺跡と比べると、こういう石器組成のあり方に大きな違いが見られるという指摘がなされています。

また、大沢谷内遺跡ではアスファルトの塊が縄文時代から中世まで見つかっています。これは縄文時代のアスファルトの塊が出土した時の写真です（スライド19）。これは大沢谷内遺跡の縄文時代の石鏃で

すが、この鏃の根元部分に接着に使ったアスファルトの付着が認められます（スライド20）。他にも、アスファルトが付着した土器や磨石、敲石などが出土しています（スライド21）。少し拡大した写真を見てみます（スライド22）。アスファルトの塊が、このような状態で遺跡から出土しています。これは敲石に付着したアスファルトで、アスファルトの加工などに伴って付着したと考えられています。アスファルトが付着した土器もたくさん出ていますが、スライド22右下の写真は土器の破片どうしをアスファルトによって接着している資料となります。

これも土器の内側ですが、この茶色い部分がアスファルトで、上部が水平に付着しているので、これは液体の状態で土器の中に入っていて付着したと考えられている資料になります（スライド23）。

これもアスファルトが付着した土器の外側と内側です（スライド24）。内側にもびっしりアスファルトが付着していますが、外側にも流れたようなアスファルトの痕跡が見られます。下の写真は、新潟市文化財センターでアスファルトの塊を土器の中に入れて、火を掛けて液体状にした実験の時の写真です。煮こぼれたりして、上の写真の土器と同じような痕跡が付いたということで、この土器はアスファルトの溶解に使った可能性が考えられている資料になります。

アスファルトの塊ですが、これまでの調査で縄文時代のものが89点見つかっています（スライド25）。古代・中世、飛鳥時代から室町時代全体になりますが、全部で853点のアスファルトの塊がこれまでの調査で見つかっています。全体の重量を見てみると、縄文時代が5,200ｇくらい、古代・中世になると出土点数と同様にぐんとのびまして、およそ22,000ｇのアスファルト塊が出土しているといった状況です。

このアスファルトの塊ですが、大きく分けて２種類に大別できます（スライド26）。１つは上の写真のようにつるつると言いますか、均質・緻密で、不純物を含まない、非常にきれいなアスファルトの塊と、もう１つは、木の未分解有機物や砂礫などの不純物を含むもの、そういった２種類のアスファルトの塊が見つかっています。縄文時代は、きれいなほうよりも、不純物を含んだアスファルトの塊が多いという状況です（スライド27）。また、古代・中世になると、不純物を含んだアスファルトの塊がほぼ全てというような状況です。

阿賀野市でもアスファルトが出る遺跡が見つかっており、さまざまな実験をされているのですが、不純物を含むアスファルト塊のほうが、不純物を含まないアスファルト塊よりも接着力が強かったというような報告もありまして、そういったことも割合に影響している可能性があると考えております。

もう１つ、縄文時代の遺構の中で焼土遺構、土が焼けた遺構も非常に多く見つかっています（スライド28）。この赤い部分が土が焼けている部分です。炭や灰なども、その焼けた土の周りから見つかります（スライド29）。ここは遺構の断面部分にあたりますが、赤い土が見られ、さらに間層を挟んでまた土が焼けた層が見られるので、１回だけではなくて複数回にわたってこういう焼成行為を行ったということがわかります。

その焼土遺構からどういったものが出るのかということですが、焼けた骨がたくさん出土しています（スライド30）。分析をしてもらった結果、トゲウオ科とサケ科が大半を占めていました（スライド31）。それ以外では、コイ科ですとかハゼ科、トビエイ科、その他ということです。魚類以外も若干出ていますけれど、ほとんどが魚類の骨という結果が得られています。トゲウオ科にしてもサケ科にしても、河川を遡上、回遊してくる魚で、調べてもらった結果、大きさも大型のものから小型のものまで見られたということで、異なる季節に獲得した状況が推測されています。また、トビエイといった海洋魚も見られることから、日本海までの活動範囲などが考えられています。ちなみに、トゲウオ科やサケ科の中には稚魚も多く含まれるということで、網を使った漁撈も行っていたことが指摘されています。

花粉分析に関しては、樹木花粉ですとハンノキ属やブナ属などが多いということで、周辺の環境としてはジメジメした湿地が広がっていたと推定されています（スライド32上）。湿地の中の高い所を利用して活動を行っていたと推測されます。ちなみに、弥生・古墳時代でも、古代・中世でも、同様な花粉の傾向が見られます。

縄文時代の大沢谷内遺跡あるいは大沢谷内北遺跡の性格ですが、これまで見てきた土器の組成ですとか石器の組成など、一般の集落とは違いがあるということで、特殊な性格の遺跡なんだろうと考えております。定住集落というよりは、ほかに拠点となる集落があって、キャンプサイト的に、大沢谷内遺跡の場所に人がやってきて、アスファルトなどの物資の流通などに利用した遺跡だったのではないかとい

う指摘があります。

弥生時代・古墳時代

次に弥生時代と古墳時代についてですが、大沢谷内遺跡ではこの時期の資料は非常に少なく、遺構についてもはっきりしない状況です。

これは弥生土器です（スライド34･35）。弥生時代の後半の土器です。古墳時代の遺物も非常に少ない状況です。こういった古墳時代の甕（スライド36・37）も見つかってはいますが、非常に少ない状況です。これも古墳時代の土器で高杯です（スライド38）。翡翠の勾玉も出ています。

これは大沢谷内遺跡周辺の古墳の分布を示した図です（スライド39）。大沢谷内遺跡の範囲がここで、丘陵のほうには古津八幡山遺跡や古墳であったり、三沢塚、通称円塚古墳ですとか、あとエゾ塚古墳など、丘陵のほうに古墳が点々とあるので、場合によっては大沢谷内遺跡の周辺に、まだ見つかっていない弥生時代ですとか古墳時代の集落があったりして、古墳についてもまだ見つかっていない古墳があるのかもしれません。ただ今のところは、はっきりわかっていない状況です。

飛鳥時代・奈良時代前半

次に飛鳥時代と奈良時代の前半について見ていきたいと思います。

これが大沢谷内遺跡の３・４区の写真になります（スライド41）。ちなみに、時代が新しくなるにつれて土が堆積していくので、遺跡の調査を行う時には新しい時代の遺構を最初に掘るわけです。この３・４区という場所ですが、縄文時代の遺構や遺物も見つかっているので、調査を行う順番としては、最初に飛鳥時代の調査を行ったあとに、さらに掘り下げて縄文時代の調査を行ったというような経過になります。これはその上層の飛鳥時代の調査の写真ということです。左側が北、右側が南の方角になるのですが、南側では、縄文時代でもお話したように、古代・中世にも谷が存在していました。

これは上層の遺構平面図です（スライド42）。上が７世紀後半の飛鳥時代の遺構平面図で、この茶色く塗ってあるのが掘立柱建物です。赤く線状にあるのが杭列、柵ですね。またこの緑色に塗ってあるのが遺物が集中して出た遺構で、谷への落ち際、斜面の落ち際の場所で見つかっています。飛鳥時代にはこの２か所で、奈良時代前半には３か所で、遺物が集中する遺構が見つかっているということです。ほかに井戸が２基見つかっています。

実際の写真を見ていきたいと思います。これが谷の写真です（スライド43）。右側が南で、本来もっと谷が落ち込んでいくのですが、調査では全部を下げきったわけではなくて、一部だけ下げるという調査を行っております。その谷への斜面、落ち際からは遺物が集中してまとまる地点が確認されています（スライド44）。須恵器ですとか、木製品なども出土しています。これは斎串です（スライド45）。祭祀に関連して使う資料です。また、鏃形の木製品も出ています（スライド46）。その遺物集中遺構ではこういった土器も出ています（スライド47）。例えばこの須恵器の高杯ですと、口の部分、器の部分が欠けて出土しています。おそらく意図的に打ち欠いているのだと思いますが、そういった儀礼行為を行った場所と考えられます。

ほかにも、土製の中央に穴をあけた円盤形の土製品ですとか、先ほどの写真でも出た斎串、鏃形の木製品、刀形の木製品、弓形の木製品、舟形の木製品なども出ています（スライド48）。ほかにも鉄鏃や刀子なども出土しています。

SX945という遺物集中遺構については、土製円盤や斎串などが、このような分布で出土しているということで（スライド49）、これはその想像イラストになります（スライド50）。このように、律令時代には斜面、谷の落ち込み部において、水辺の祭祀儀礼を行っていたのだろうと考えられます。

大沢谷地遺跡のすぐ近く、田上町になりますが、行屋崎遺跡という遺跡があり、そこも飛鳥時代の遺跡です。これは大沢谷内遺跡と行屋崎遺跡の祭祀遺物を比較した表になります（スライド51）。例えば、斎串はどちらでも出ていますが、刀形の木製品は大沢谷内遺跡では出ているのですが、行屋崎遺跡では出ていないです。鉄製品については、鉄鏃や刀子は大沢谷内遺跡では出ていますが、行屋崎遺跡では出ていません。代わりに、行屋崎遺跡では鈴ですとか、耳環と呼ばれる耳飾りが出ていたりします。あと行屋崎遺跡では土製品が多く出ていて、手づくね土器ですとか、人形の土製品、それと動物形の土製品なども出ていますが、大沢谷内遺跡ではそのような土製品は出ていません。どちらかというと行屋崎遺跡のほうが古い傾向があると言えるかと思います。

大沢谷内遺跡の斜面の遺物集中地点では、九九木簡も出ています（スライド52）。左側に釈文を入れてありますが、九九の練習をした木簡が出ています。間違いが多かったりするのですが、例えば七九六十

一ですとか、七九四十七ですとか間違えたりしています。一般集落では出土しない資料で、役所関係、役人がいたということをよく示す資料と言えます。

これはアスファルトが付いた飛鳥時代の平瓶です(スライド53左)。また、こちらは漆が付着した横瓶と呼んでいる、液体を入れる瓶です(スライド53右)。ちなみに、大沢谷内遺跡では平安時代の出土品として、漆要具、繊維状のものに漆が付いていて絞ったような状態の資料も出ており、漆の生産から漆の利用なども行っていたということがわかっています。

ほかに飛鳥時代の資料としては、縄文時代でも出ていましたが、木製の櫂、舟をこぐ道具ですとか櫛なども出ています（スライド54)。右側２つが櫂で、大きめの櫂もあったりします。また、農具である木製の鍬なども出ています。

これも珍しいというか、なかなか出ない資料ですが、円面硯と呼ばれる硯も見つかっています（スライド55)。左上が飛鳥時代の円面硯で、右側が奈良時代前半の円面硯です。下に参考としてイラストがあります。全体が残っていないのですが、丸くなっている部分に墨を入れて利用します。これはその脚の部分で、花の文様、花弁のような文様を線刻した硯です。また、左下の写真ですが奈良三彩の壺です。白だとか緑だとか褐色の釉を塗った焼き物ですね。これも一般集落ではまず出ない資料です。これらは、大沢谷内遺跡が役所に関連した遺跡であることを推測させる資料と言えます。

ほかにも、鍛冶の際に空気を送り込むための筒状の送風管である羽口や、鍛冶の際に出る鉄滓なども出土しています(スライド56)。これは紡錘車と呼んでいる機織りの道具です。右下の写真は、須恵器の甕の肩のところに、須恵器の杯、お茶椀が溶着した資料になります。これは失敗品なので、遺跡の近くに須恵器の窯があったかもしれないということを推測させる資料です。窯はまだ見つかっていませんが。これらの資料は、集落の中で、機織りや鍛冶も行っていたということを示す資料かと思います。

また、飛鳥時代の遺構としては、このように丸木舟を井戸側に転用した井戸も見つかっています（スライド57)。

これは飛鳥時代の土器です(スライド58)。注目されるのがこのように外面を磨いている土器です。通常、この時期ですと、木の板目でなでたりするのが新潟では一般的なのですが、このように外面を磨いた土器なども出ていたりしています。

飛鳥時代には日本書紀の中で、越の国から燃ゆる土と水を、天智天皇のいる滋賀県の大津宮まで献上したという記載があります。大沢谷内遺跡はこの記事と同じ時期の遺跡でもあり、アスファルト塊を出土しているということで、その関連性についても注目されます。

また、７世紀は渟足柵だとか磐舟柵など、新潟が注目される時期と言えるかと思いますが、まだよくわかっていない時期でもあります。新潟県埋蔵文化財センターの田中祐樹さんは、先ほどの土器や行屋崎遺跡の土器も含めて、東北との関連ですとか、また、東北でも具体的にどの辺と交流があったのかといった研究も進めているので、今後、そのあたりの研究の進展が期待できるかと思います。

奈良時代後半・平安時代

続いて奈良時代の後半から平安時代ということで見ていきたいと思います。

先ほど飛鳥時代と奈良時代の前半のお話をさせていただきましたが、その時期の遺構は１区から４区の地点で見つかっています(スライド60)。谷を挟んで南側に行きますと、飛鳥時代や奈良時代の前半の資料はほぼ見つかっていない状況なので、時代によって利用する空間が変化したということがわかっています。

奈良時代の後半、おおむね８世紀の後半になると、１～４区では資料がなくなって、代わりに谷を挟んだ南側で、遺構や遺物が多く確認できるようになります。奈良時代の後半から平安時代の遺構については、掘立柱建物が21棟、井戸が31基、耕作関連の凹地状遺構、これは主に水田として利用していたと考えられる四角い落ち込みの遺構ですが、これが14基見つかっています。あと畝状遺構と呼んでいる畑の畝間の溝も見つかっています。

右側が拡大した図になりますが、この赤いところが掘立柱建物です。大沢谷内遺跡では、これまでに奈良時代や平安時代の竪穴住居は見つかっておらず、建物についてはいずれも掘立柱建物です。それと、紫色で示してありますが、井戸が31基出ています。また、青く塗ってあるのが溝や水田などの遺構です。９区の青く塗ってあるのが水田に関連した遺構ということになります。

大沢谷内遺跡の８区という所では、コの字状の雨落ち溝の内部で掘立柱建物が確認されています（スライド61)。これは拡大した写真です(スライド62)。作業員さんが立っている所が柱の場所です。２間３

間の建物が見つかっています。

これはその柱の断面、半分に割った状態の写真になります（スライド63）。この建物は、こういう四角い形の柱穴が掘られていたということです。新潟県では柱穴は基本的に円形が多く、四角形の柱穴はやや格の高い建物に多い傾向があるかと思います。これはその掘り上がりで、ここが柱の部分です（スライド64）。これはその排水用に建物の周りに掘られた雨落ち溝の断面です（スライド65）。このような建物も見つかっています。

それと大沢谷内遺跡では古代・中世を含めて水田が見つかっています（スライド66）。図の左側が平面図、右側が写真です。この黄色く塗ってあるのが中世の水田で、赤く塗ってあるのが古代の水田の跡です。また、格子状に筋のようなものがありますが、これは古代の耕作痕です。中世の水田の下にも古代の耕作痕が見つかっているので、古代にはこの赤い部分だけではなく、もう少し広い範囲で水田が広がっていたことになりますが、中世の水田で壊されて、中世の水田がある所についてははっきりしない、耕作痕だけ確認できるということになります。

これは平安時代の井戸です（スライド67）。これはその断面で、掘り進めていくと丸木舟を転用した井戸枠、井戸側が見つかっています（スライド68）。

これもまた別の平安時代の井戸側をもつ井戸の写真です（スライド69）。これはその断面で、この井戸も丸木舟を転用した井戸側が井戸に設置されていました（スライド70）。こんな状態で設置されていたということです（スライド71）。これはその井戸側を持ち帰ってきた写真ですが、この面で左右がつながるので、もともと１つの丸木舟だったのを切断して、丸い井戸側に転用したということがわかりました。なお、丸木舟として使用されていた時の縄をくくるための穴も確認できます（スライド73）。

これは古代と中世の井戸とを比較した図です（スライド74）。素掘りの、特に井戸側を設けない井戸というのが大半を占めます。ただし、飛鳥・奈良・平安時代だと全体の14％で井戸側を持つ井戸が見つかっているのに対し、中世だとだいぶ減って１％となります。井戸側を持つ井戸というのは、集落の中で特殊な井戸だったということが言えるかと思います。

また、古代の井戸の底からは完全な形の土器が出る場合があります（スライド75･76）。井戸の祭祀に関連した出土品と言えるかと思います。こういう完全な土器が出土する井戸もまたまれで、全体の井戸の中の12％でこういう完全な土器が出ています（スライド77）。

これは大沢谷内遺跡の井戸について、長軸の長さと深さをプロットした図になります（スライド78）。赤く塗ってあるのが完全な土器が出た井戸で、四角は井戸側を設けた井戸です。この図からは、井戸側を設けた井戸や、大きかったり深かったりする井戸から完全な土器が出る場合が多い傾向がうかがえます。そういった大きな井戸であったり、井戸側を設けるような井戸が、集落の井戸の中でも特殊な井戸として利用されていて、そういう土器祭祀などを行っていたということが推測されます。

平安時代の資料として、ベルトにつける飾り具、石帯が出土しています（スライド79）。

ほかに珍しい資料として越州窯系青磁が出ています（スライド80･81）。越州窯というのは中国の浙江省の窯で焼かれた資料で、新潟県内では大沢谷内遺跡を含めて数遺跡でしか出土していません。北九州ではある程度出土しているということですが、北陸や東北地方では非常に限られる珍しい資料ということです。

これは緑釉陶器で、緑色の釉をつけた焼き物です（スライド82上）。また灰釉陶器といって灰色や白っぽい色の釉をつけた焼き物も出ています（スライド82下）。これらは猿投窯の製品ということがわかっています。緑釉陶器や灰釉陶器も大沢谷内遺跡では一定量出土していますが、一般集落ではあまり出ない資料と言えます。

これは黒色土器の内面の写真ですが、こういう渦巻状の文様を持つ土器も出ています（スライド83）。これもあまり見ない資料です。公的な、役所に関連するような遺跡で出たりする資料かと思います。

あと墨書土器です（スライド84）。「寺」や「田」と書かれた墨書土器も出ています。

次にこの時期のアスファルト関連資料についても少し見てみます（スライド85）。左側は須恵器の杯と呼んでいる、お茶椀の写真です。上が外面で、下が内面の写真です。内側にアスファルトが付着しており、外側にも点々とアスファルトがついている資料です。右は須恵器の台を持つお茶椀ですが、内側には漆がべったりとついていて、外側にも少し漆が付着しています。パレットとして利用した可能性があります。飛鳥時代のところで少し話に出ましたが、こういう漆要具も出ています。アスファルトや漆を

平安時代にも利用していたことがうかがえる資料かと思います。

あと土錘、網につける錘や、製塩土器、塩をつくった土器、それと羽口、鍛冶に関連する資料なども飛鳥時代・奈良時代前半と同様に出土しています（スライド86）。

また鉄斧も出土しています（スライド87左）。左側は上から見た写真で、右側が横から見た写真です。これなどは木の伐採や加工などに使った可能性があります。なお、鉄を研いだ砥石も多く出ています（スライド87右）。

これは木の下駄の未成品ですので、木を加工する技術者も存在したということがわかります（スライド88）。

鎌倉時代・室町時代

鎌倉時代と室町時代に入ります。掘立柱建物が21棟、井戸が140基、水田跡が31基、ほかに畑の跡も見つかっています（スライド90）。この赤いところが掘立柱建物です。中世、鎌倉時代・室町時代になると遺跡の範囲が広がっていて、奈良時代の後半以降、谷の南側がおもに使われていたのですが、中世になると谷の北側も含めて利用されるようになります。８・９区の周りでは四角い水田の遺構が31基見つかっています。この点線で示したのが微高地、高い所です。高い所に建物をつくって、その周りの少し下がった部分で水田を行っていたことが確認されています。

これは先ほどと同じ図・写真になりますが、中世の水田はこの四角い範囲で、周りには用排水の溝が掘られています（スライド91）。このように整然と配置された水田遺構が見つかっています。

古代と中世の種実同定ではイネが定量見つかっています（スライド92右）。なお、自然科学分析や遺構などからは、中世になって水田が拡大したと推測されます。また、中世ですとアワだとかナス、ウリ、エゴマなど畑の作物も確認されています。

これは中世の遺構です（スライド93）。木製品などが出土しています。これはその拡大写真で、このように鍬なども出ています（スライド94）。また、井戸からは四角い方形状の鉄製品なども出ています（スライド95）。

この紫色の部分が井戸になります（スライド96）。井戸の中からは櫛だとか笄、髪を整える道具なども出ています。右上は、曲物を転用した井戸側の写真です。これがその井戸側として転用されていた曲物です（スライド97）。この曲物にはアスファルトが付着していました（スライド98）。油井の可能性も推測されます。

また、擂鉢の内面にもアスファルトがついていたりします（スライド99）。これも擂鉢ですが、その外側にも内側にもアスファルトが付着しており、アスファルトの容器として利用していた可能性も推測させる資料です。あと荷札木簡にもアスファルトが付着していました（スライド99左下）。これなどは箆としても使ったのではないかと指摘されています。

これは先ほども出てきた鍬です（スライド100上）。一木でつくった鍬です。こちらは柄がはめ込み式の鍬です（スライド100左下）。これは木の楔です。こういった農具関係の資料も出ております。なお、これは桜の皮を使った結合補助具です（スライド100右下）。

これは田下駄です（スライド101右）。水田の遺構とともに、こういった農具関係の資料が出ています。また、下駄の未成品も出ているので、中世にも木製品をつくっていたということがわかります（スライド101左）。

井戸からは櫛や箸なども出ています（スライド102）。鉄製品では、刀子や鉄鏃、釘、釣針なども出ています（スライド103上）。これは蓋状鉄製品です（スライド103左下）。用途がまだはっきりしないのですが、こういった珍しい蓋状の鉄製品なども出ています。右下は砥石です。

これは先ほども写真であった笄で、骨角製です（スライド104左）。髪を整える資料ですね。あと栗形と呼んでいる刀の鞘に付けてひもを結ぶ骨角製品も出ています（スライド104右）。非常に精巧な加工がされています。こういったものも一般集落ではまず見られません。中世も非常に有力な集落であったということがわかります。

漆器も多く出土しています。これは黒い漆と赤い漆で文様を描いた漆器です（スライド105左）。この内面にはアスファルトがびっしりとついているので、アスファルトの容器として利用した可能性がある資料と言えます。また、漆器の未成品も出ています（スライド105右上）。このことから、漆器を製作していたことがわかります。これは糸巻具で、機織の道具も出ています（スライド105右下）。

このように、大規模な水田耕作を行っている一方、木の加工や織物など、様々な生業を行っていたことが、飛鳥時代も含めてですがうかがえます。新津丘

陵の近くにある遺跡ということで、そういう特徴があるのだろうと推測されます。

おわりに

去年の11月ですが、圃場整備の関係で大沢谷内遺跡の周辺について試掘・確認調査を行いました。これまで説明していたのが、大沢谷内遺跡全体の中のこの部分です（スライド107）。この部分の調査成果についてこれまでお話をさせていただきました。大沢谷内遺跡の範囲は広くて、調査した以外の周辺の状況はまだ不明な部分が多いのですが、この微高地で建物が見つかっているので、この斜めに走る道路に沿って微高地がずっと丘陵のほうへのびていくのかなと思っていました。そして、圃場整備の関係で遺跡の南側についても調査を行った結果、この紫色で塗った範囲に微高地が存在するのがわかりました。途中で曲がって南西方向にのびていくということがわかりました。なお、赤い所で古代の遺構や遺物がたくさん出たので、遺跡の範囲を今後修正しないといけないのですが、そういう発見がありました。

あと、大沢谷内遺跡は室町時代、今のところ15世紀前後を境に、ばったり資料が出なくなります。その原因ですが、江戸時代の絵図の中に鎌倉潟が描かれていて、大沢谷内遺跡もその中に入ると推測されます（スライド108）。下はＡ地点とＢ地点をつないだ土層ですが、この真ん中の層は未分解有機物をたくさん含んだ層、いわゆるガツボ層になります。発掘調査をしていると、このように黒い土、ガツボ層が中世の遺構を覆うような形で確認されます。ですので、15世紀前後に、おそらく河川の氾濫などを受けて湿地帯ができ、深い部分については潟になったのだと推測されます。そして、それが原因で大沢谷内遺跡の集落については廃絶、移動を余儀なくされたのだろうと考えています。

最後にアスファルト関連の話ですが、これは金津の「石油の世界館」の近くで石油が滲出している露頭の写真です（スライド109）。小・中学校の理科の授業で見学に来る場合も多いのですが、周辺は新津油田地帯で、明治から大正時代にかけて石油業で栄えた場所です。金津村の中野貫一氏は、日本の石油王とまで呼ばれました。

最近では、2007年に新津油田は地質学から見て日本の貴重な自然資源であるとして地質100選に認定されました。また、2018年には新津油田金津鉱場跡として国史跡にも指定されています。我が国の近代エネルギー産業の発展を知る上で、重要な遺構が良好な状態で多く残されているということで、新潟市では５か所目となる史跡になったということです。整備もされているので、機会がありましたらハイキングがてら行っていただければと思います。

これまで見てきたように、大沢谷内遺跡は縄文時代から中世にかけて石油資源が利用されていたことがわかる遺跡です。縄文時代から近代まで石油がこの地域で脈々と受け継がれてきた重要な天然資源であったことを今に伝える遺跡であると言えるでしょう。

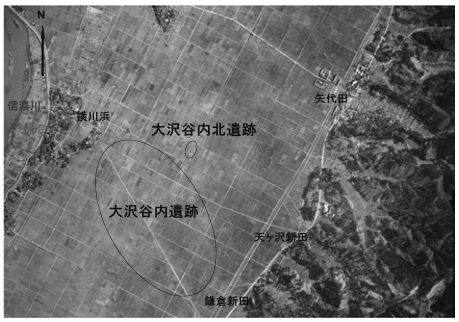
以上で、報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

スライド1

1. はじめに

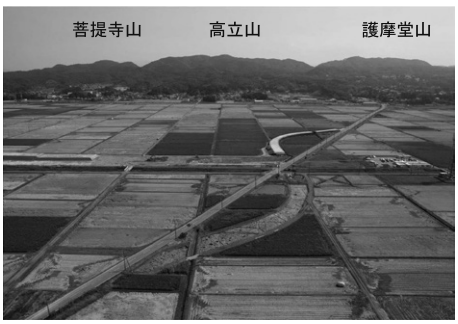
スライド2

スライド3



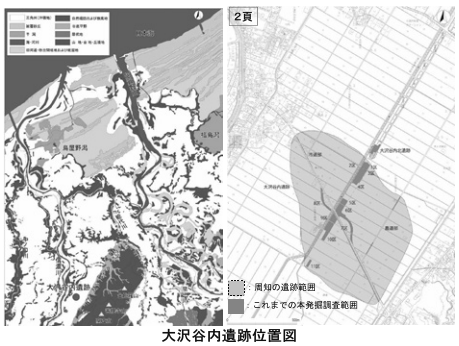
大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡

スライド4



大沢谷内遺跡遠景（北西から）

スライド5



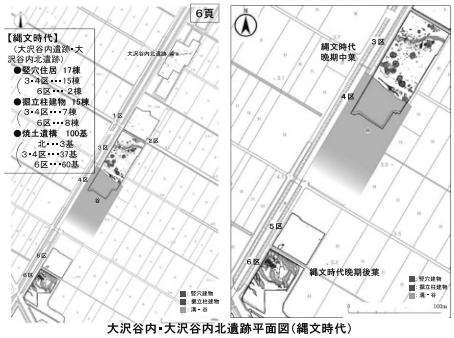
大沢谷内遺跡位置図

スライド6

スライド7

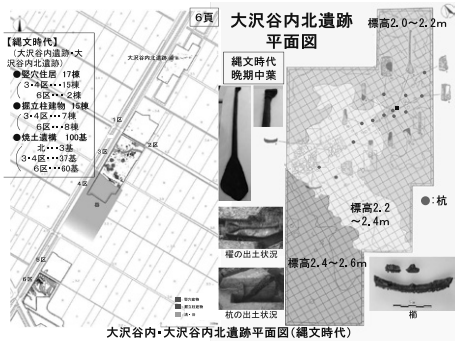
2. 縄文時代

スライド8



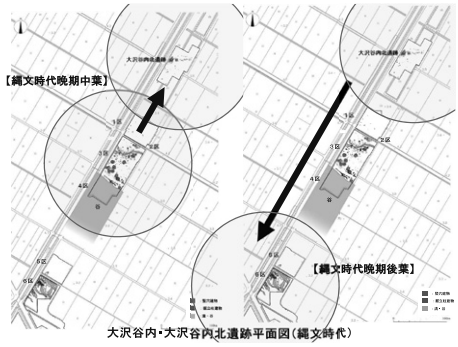
大沢谷内・大沢谷内北遺跡平面図（縄文時代）

スライド9



大沢谷内・大沢谷内北遺跡平面図（縄文時代）

スライド10



大沢谷内・大沢谷内北遺跡平面図（縄文時代）

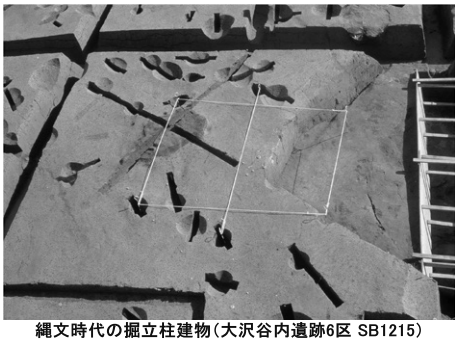
スライド11

縄文時代の竪穴住居群（大沢谷内遺跡3・4区）

スライド12

縄文時代の竪穴住居（大沢谷内遺跡6区 SI262）

スライド13


縄文時代の掘立柱建物（大沢谷内遺跡6区 SB1215）

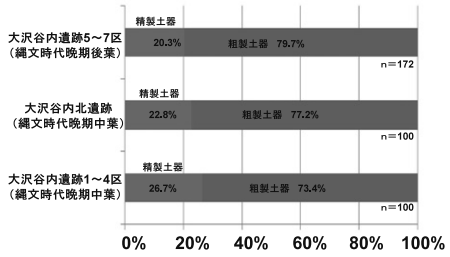
スライド14

縄文時代の掘立柱建物（大沢谷内遺跡6区 SB1）

スライド15

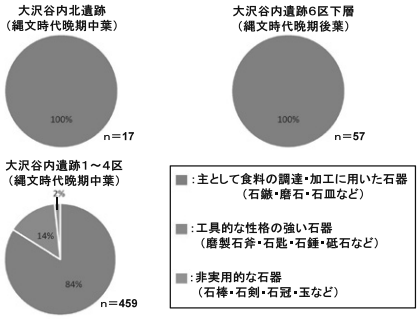
縄文時代の土器（1～4区）

スライド16



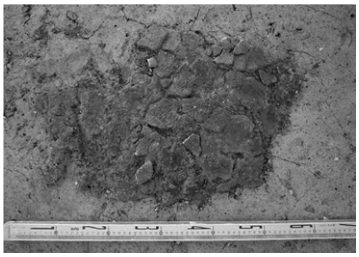
大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡における
精製土器と粗製土器の内訳

スライド17



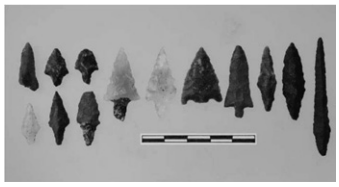
大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡出土の石器組成

スライド18



アスファルト塊出土状況（大沢谷内遺跡3・4区）

スライド19



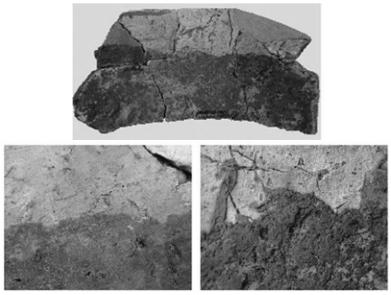
石鏃（大沢谷内遺跡3・4区）

スライド20

アスファルトが付着した土器・石器、アスファルト塊
（大沢谷内遺跡3・4区）

スライド21

スライド22

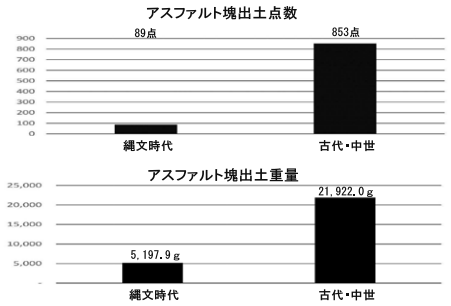


アスファルトが付着した深鉢内面（上）とその拡大写真（下）

スライド23

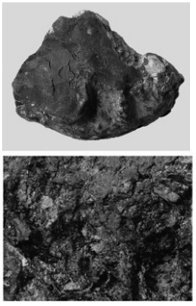
アスファルト塊を溶解した土器と実験の様子

スライド24



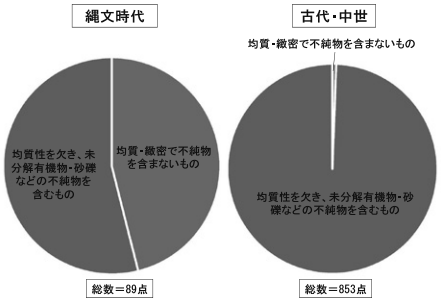
大沢谷内遺跡出土のアスファルト塊の点数・重量

スライド25



アスファルト塊の拡大写真

スライド26

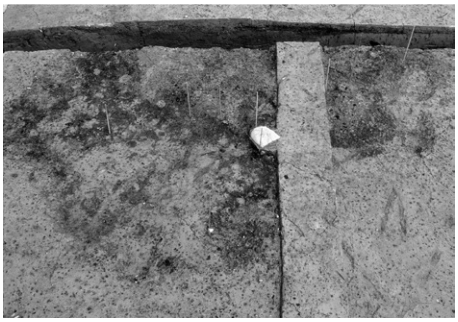


大沢谷内遺跡出土のアスファルト塊の性状

スライド27

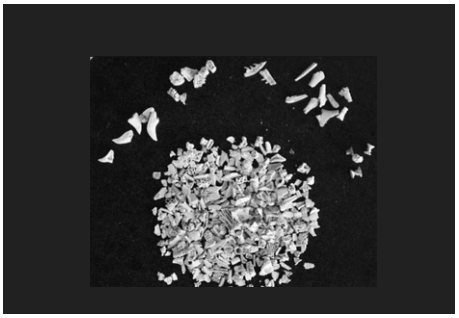
縄文時代の焼土遺構（大沢谷内遺跡6区 F204）

スライド28



縄文時代の焼土遺構（大沢谷内遺跡6区 F204）

スライド29



大沢谷内遺跡焼土遺構出土の焼骨

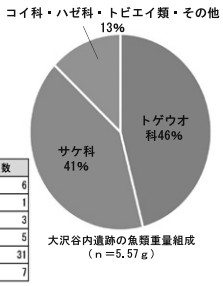
スライド30

【魚類】

分類	点数
トゲウオ科	2,610
サケ科	1,369
コイ科	5
ハゼ科	3
トビエイ類	2
その他	192

【魚類以外】

分類		点数
哺乳網	小型哺乳類	6
	小型哺乳類？	1
	ニホンジカ？	3
鳥類網	不明	5
爬虫網	ヘビ亜目	31
両生網	無尾目	7



大沢谷内遺跡焼土遺構出土の焼骨分類別点数と魚類重量組成

スライド31

花粉分析による樹木花粉トップ３（時代別）

	縄文時代	弥生・古墳時代	古代・中世
1	ハンノキ属	ハンノキ属	ハンノキ属
2	ブナ属	スギ	スギ
3	コナラ属コナラ亜属	コナラ属コナラ亜属	コナラ属コナラ亜属

木製品の樹種トップ５（時代別）

	縄文時代	古代・中世
1	ハンノキ属ハンノキ亜属	スギ
2	トネリコ属	クリ
3	ヤマグワ	ケヤキ
4	エゴノキ属	ハンノキ属ハンノキ節
5	ヤナギ属	ヒノキ

大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡の花粉・樹種

スライド32

3. 弥生時代・古墳時代

スライド33

大沢谷内遺跡出土の弥生土器

スライド34

大沢谷内遺跡出土の弥生土器

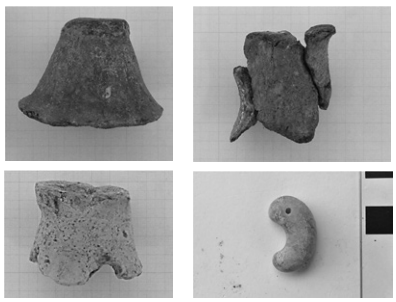
スライド35

大沢谷内遺跡出土の古墳時代の土器

スライド36

大沢谷内遺跡出土の古墳時代の土器

スライド37



大沢谷内遺跡出土の古墳時代の土器・玉

スライド38

大沢谷内遺跡と周辺の古墳

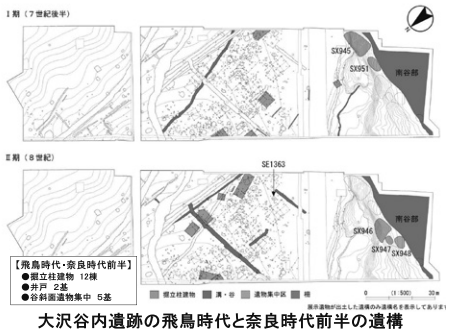
スライド39

4. 飛鳥時代・奈良時代前半（古代）

スライド40

大沢谷内遺跡3・4区遠景（西から）

スライド41



大沢谷内遺跡の飛鳥時代と奈良時代前半の遺構

スライド42

大沢谷内遺跡南谷部のようす

スライド43

飛鳥時代の遺物集中遺構（大沢谷内遺跡4区 SX945）

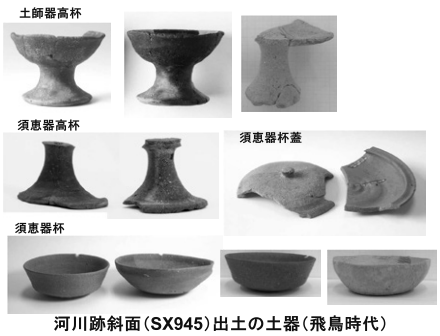
スライド44

大沢谷内遺跡斎串出土状況（SX945）

スライド45

鏃形木製品出土状況（大沢谷内遺跡4区 SX951）

スライド46

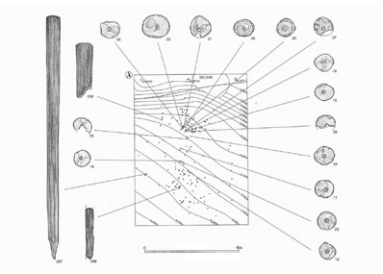


河川跡斜面（SX945）出土の土器（飛鳥時代）

スライド47

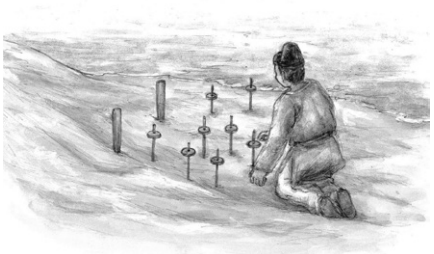
1～4区　河川跡斜面出土の遺物（飛鳥～奈良時代前半）

スライド48



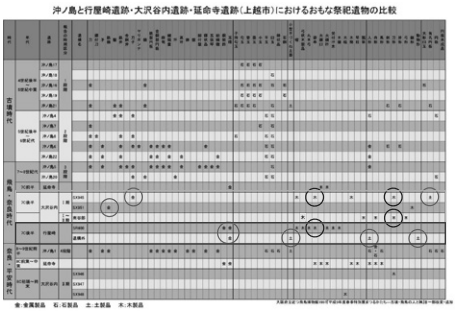
大沢谷内遺跡SX945土製有孔円盤・斎串出土状況
（飛鳥時代）

スライド49

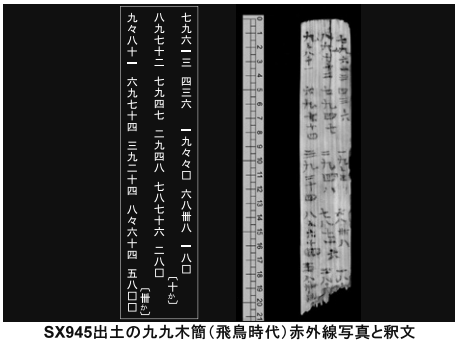


大沢谷内遺跡の祭祀風景想像イラスト

スライド50

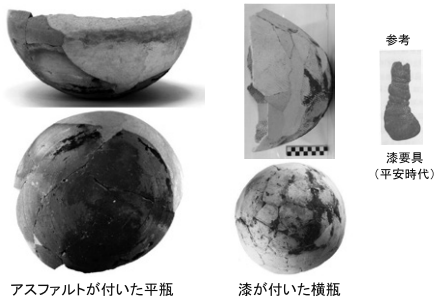


スライド51



SX945出土の九九木簡（飛鳥時代）赤外線写真と釈文

スライド52

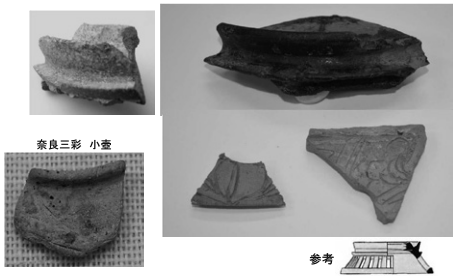


SX946出土のアスファルト・漆付着土器（飛鳥時代）

スライド53

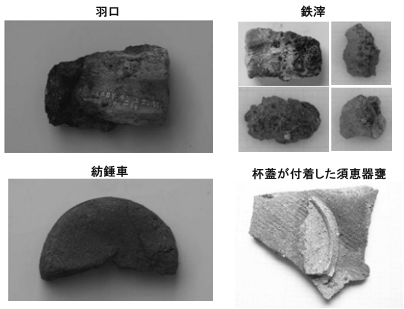
大沢谷内遺跡の飛鳥時代の出土遺物（1～4区）

スライド54



円面硯（飛鳥時代・奈良時代前半）と
奈良三彩（奈良時代前半）

スライド55



大沢谷内遺跡の飛鳥時代・奈良時代前半の出土遺物

スライド56

丸木舟を転用した飛鳥時代の井戸
（大沢谷内遺跡4区 SE1363）

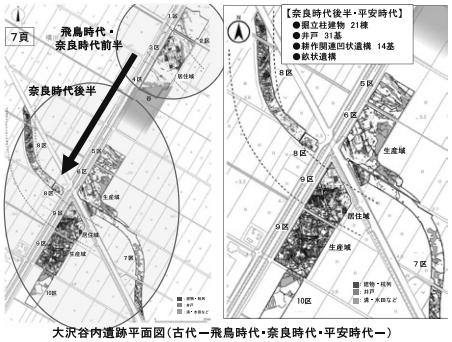
スライド57

大沢谷内遺跡出土の飛鳥時代の土器

スライド58

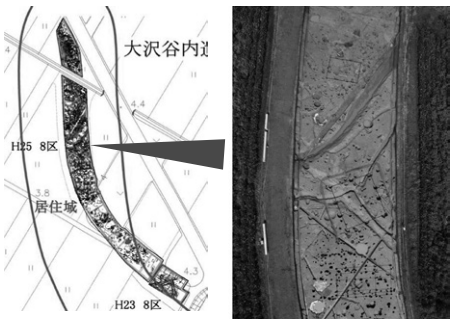
5. 奈良時代後半・平安時代（古代）

スライド59



大沢谷内遺跡平面図（古代ー飛鳥時代・奈良時代・平安時代ー）

スライド60



大沢谷内遺跡8区空中写真（上は北）

スライド61

平安時代の掘立柱建物（大沢谷内遺跡8区 SB4001）

スライド62

平安時代の掘立柱建物の柱穴断面
（大沢谷内遺跡8区 SB4001）

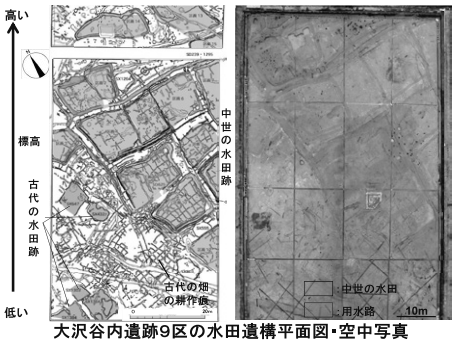
スライド63

掘立柱建物跡（平安時代・SB4001）柱穴

スライド64

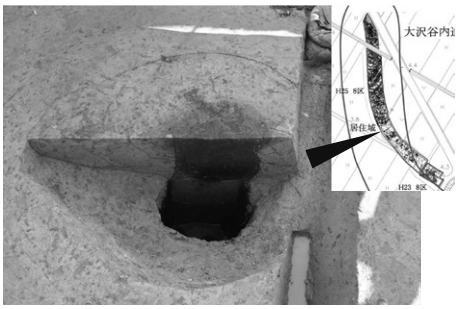
掘立柱建物跡（平安時代・SB4001）周溝

スライド65



大沢谷内遺跡9区の水田遺構平面図・空中写真

スライド66



井戸（平安時代・SE2383）

スライド67

平安時代の井戸断面（大沢谷内遺跡8区 SE2383）

スライド68

平安時代の井戸（大沢谷内遺跡9区 SE3416）

スライド69

平安時代の井戸断面（大沢谷内遺跡9区 SE3416）

スライド70

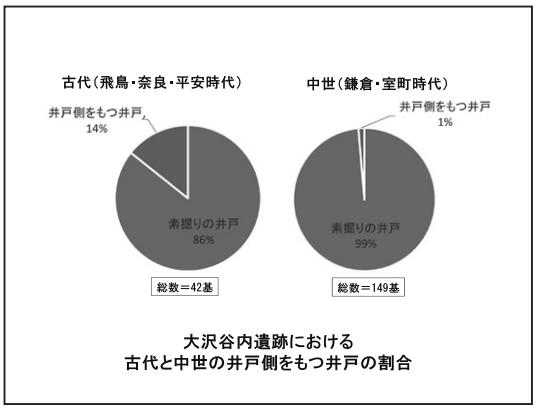
平安時代の井戸側（大沢谷内遺跡9区 SE3416）

スライド71

平安時代の井戸側（大沢谷内遺跡9区 SE3416）

スライド72

スライド73



大沢谷内遺跡における
古代と中世の井戸側をもつ井戸の割合

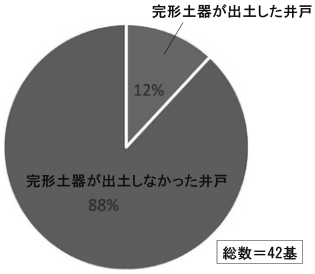
スライド74

平安時代の井戸底から出土した須恵器椀
（大沢谷内遺跡8区 SE2383）

スライド75

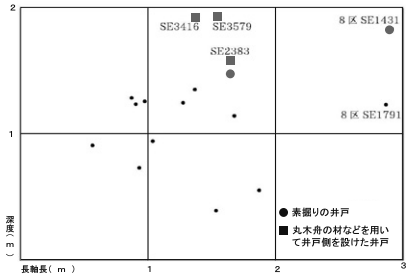
平安時代の井戸底から出土した土師器椀
（大沢谷内遺跡8区 SE1431）

スライド76



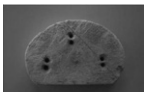
古代（飛鳥・奈良・平安時代）における
井戸底から完形土器が出土した井戸の割合

スライド77



大沢谷内遺跡における古代の井戸の長軸長と深度
（赤塗りは井戸底から完形土器が出土した井戸）

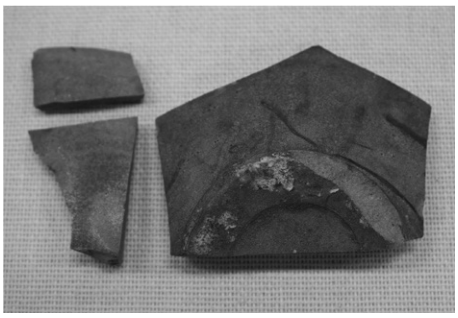
スライド78



参考　馬越遺跡（加茂市）

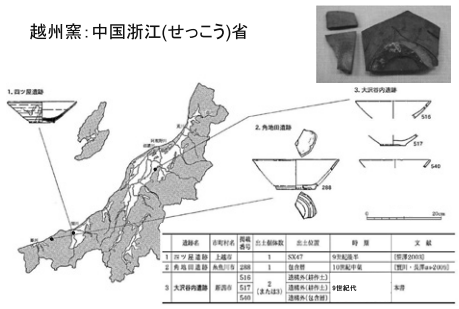
石帯（平安時代）

スライド79



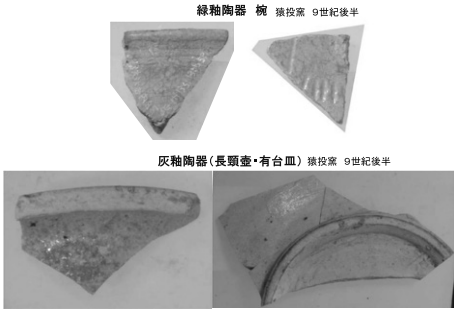
越州窯系青磁（平安時代）

スライド80



新潟県における越州窯系青磁出土遺跡

スライド81

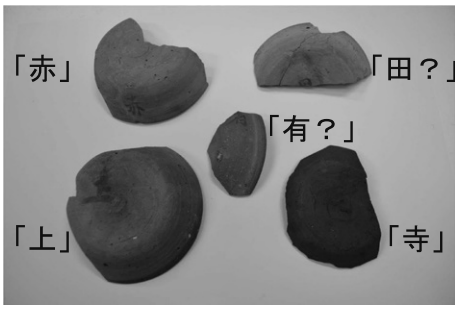


緑釉・灰釉陶器（平安時代）

スライド82

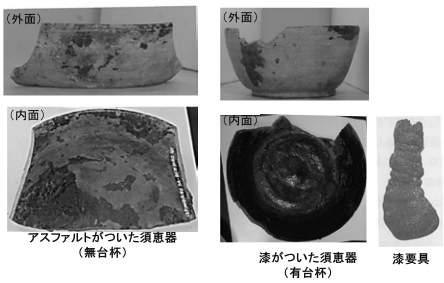
暗文が描かれた黒色土器の内面（平安時代）

スライド83



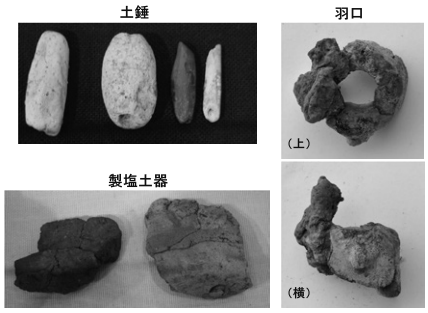
墨書土器（平安時代）

スライド84



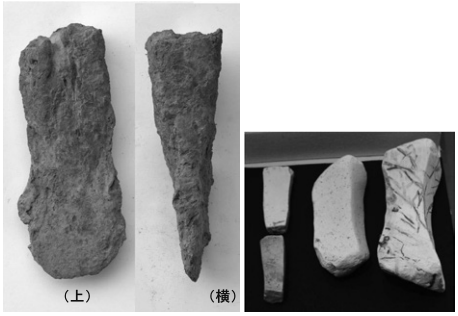
アスファルト・漆が付着した土器と漆要具（平安時代）

スライド85



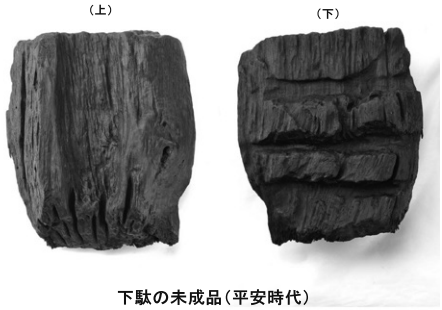
大沢谷内遺跡の土製品・羽口（平安時代）

スライド86



大沢谷内遺跡の鉄斧と砥石（平安時代）

スライド87

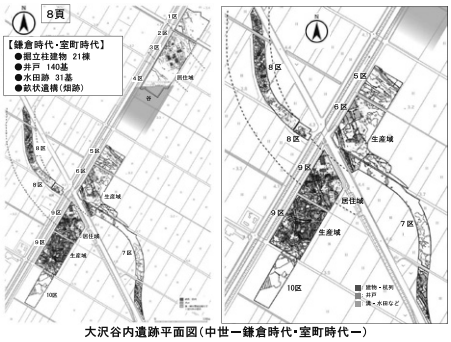


下駄の未成品（平安時代）

スライド88

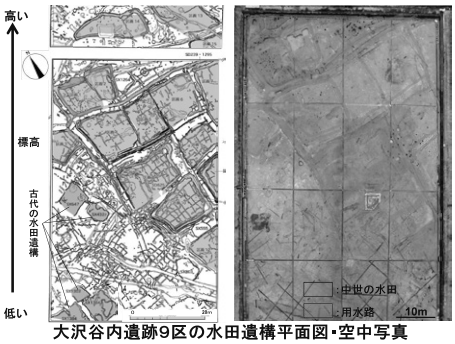
6. 鎌倉時代・室町時代（中世）

スライド89



大沢谷内遺跡平面図（中世ー鎌倉時代・室町時代ー）

スライド90



大沢谷内遺跡9区の水田遺構平面図・空中写真

スライド91

花粉分析による樹木花粉トップ３（時代別）

	縄文時代	弥生・古墳時代	古代・中世
1	ハンノキ属	ハンノキ属	ハンノキ属
2	ブナ属	スギ	スギ
3	コナラ属コナラ亜属	コナラ属コナラ亜属	コナラ属コナラ亜属

木製品の樹種トップ５（時代別）

	縄文時代	古代・中世
1	ハンノキ属ハンノキ亜属	スギ
2	トネリコ属	クリ
3	ヤマグワ	ケヤキ
4	エゴノキ属	ハンノキ属ハンノキ節
5	ヤナギ属	ヒノキ

種実同定による草本種実トップ15（時代別）

	草本種実	
	古代	中世
1	ウリ類	イヌビエ属
2	オニバス	イネ
3	スゲ属	アワ
4	ホタルイ属	キカラスウリ
5	タデ属	ウキヤガラ
6	カナムグラ	アサ
7	ナス	マメ科
8	キク亜科	ホタルイ属
9	ヒョウタン類	シソ属
10	ツリフネソウ	ササゲ属
11	トウガン	タデ属
12	マメ科	ナス
13	イネ	ウリ類
14	ウキヤガラ	スゲ属
15	イヌホウズキ	エゴマ

大沢谷内遺跡・大沢谷内北遺跡の花粉・樹種・種実

スライド92

中世の水溜状遺構調査風景
（大沢谷内遺跡8区 SX1306）

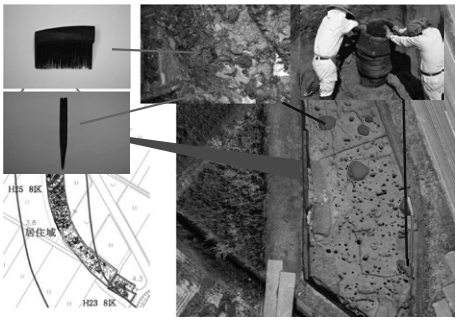
スライド93

中世の水溜状遺構の遺物出土状況
（大沢谷内遺跡8区 SX1306）

スライド94

方形状鉄製品の出土状況（大沢谷内遺跡8区 SE834）

スライド95

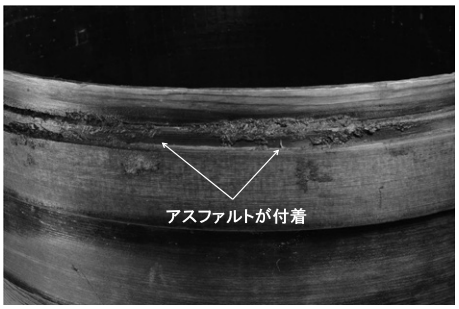


大沢谷内遺跡空中写真（上は東）

スライド96

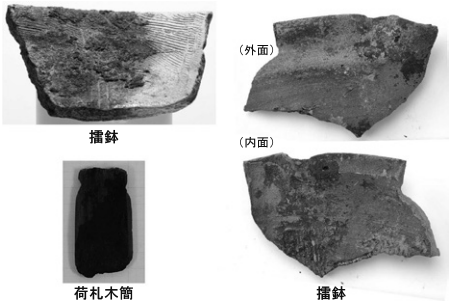
井戸側として利用された曲物（中世）

スライド97



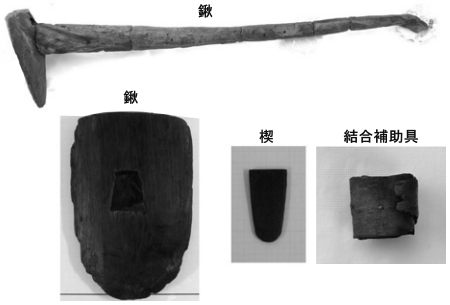
井戸枠として利用された曲物（中世）

スライド98



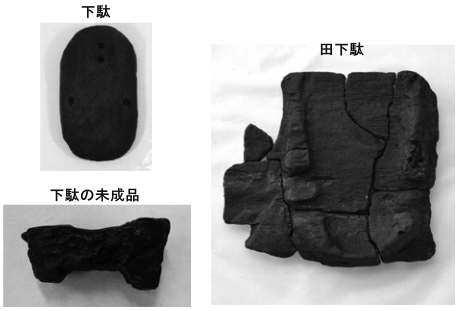
アスファルトが付着した土器・木製品（中世）

スライド99



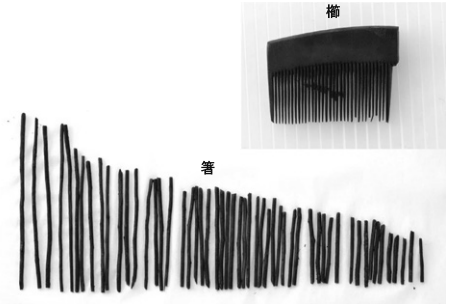
木製農工具・結合補助具（中世）

スライド100



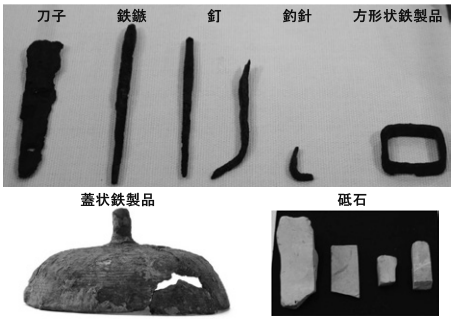
下駄・田下駄（中世）

スライド101



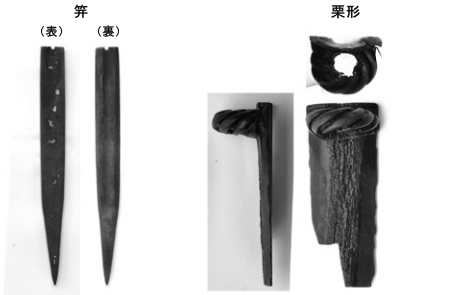
木製の櫛・箸（中世）

スライド102



金属製品・砥石（中世）

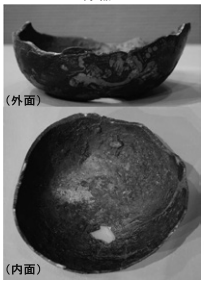
スライド103



骨角製品（中世）

スライド104

漆器　　漆器の未成品



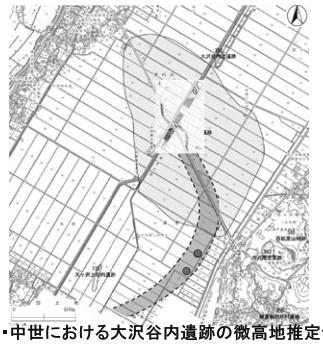
糸巻具

漆器と機織具（中世）

スライド105

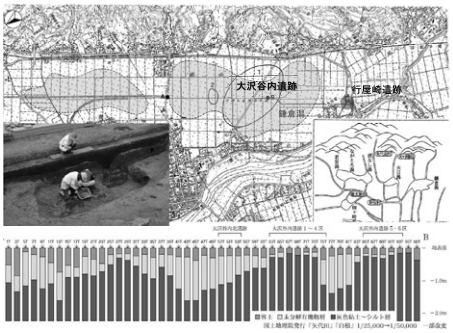
7. おわりに

スライド106

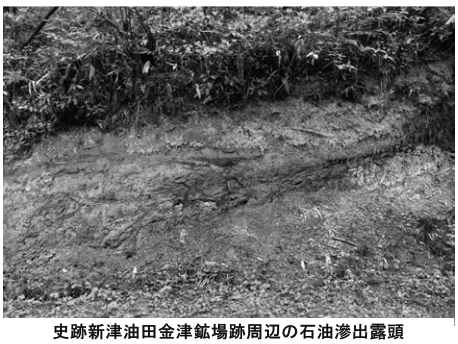


古代・中世における大沢谷内遺跡の微高地推定ライン

スライド107



スライド108



史跡新津油田金津鉱場跡周辺の石油滲出露頭

スライド109

新津油田

・明治７(1874)年～平成８(1996)年の約120年間にわたり操業。
・明治時代から大正時代にかけて産油量日本一に。
・金津村の中野貫一氏は日本の石油王とまで呼ばれた。

■平成19(2007)年５月10日
「日本の地質100選」に認定
（新津油田は地質学からみて日本の貴重な自然資源である）

■平成30(2018)年10月15日
新津油田金津鉱場跡が国史跡に指定
（我が国近代エネルギー産業の発展を知る上で重要な遺構が良好な状態で多く残されている）

スライド110

・大沢谷内遺跡‥‥縄文時代からすでに新津丘陵周辺で石油資源が利用されていたことがわかるとともに、石油が近代までこの地域で脈々と受け継がれてきた重要な天然資源であったことを今に伝える。

スライド111

写真・図出展一覧

スライド６右・７・９・10左・11・17・18・25・27・31・32・60・66・74・77・78・90・92：新潟市教育委員会2020『大沢谷内遺跡Ⅵ』から作成
スライド10右：新潟市教育委員会2010『大沢谷内北遺跡』から作成
スライド39・49・108：新潟市教育委員会2012『大沢谷内遺跡Ⅱ』から作成
スライド42：新潟県南蒲原郡田上町教育委員会2015『行屋崎遺跡』から作成
スライド50：画　野崎裕美（市文化財センター）
スライド61・81・96：新潟市教育委員会2015『大沢谷内遺跡Ⅳ』から作成

第２章　企画展の概要と企画展関連講演会アンケート結果

令和２年度は、史跡古津八幡山 弥生の丘展示館で企画展を３回開催した（企画展１～３）。なお、企画展２については、弥生の丘展示館を第１会場、市文化財センターを第２会場として実施した。また、企画展の期間中には、外部から講師をお招きするなどし、関連講演会（第１章に収録）を３回実施したほか、市文化財センターの企画展担当職員による展示解説を行った。

講演会はいずれも市文化財センターの研修室で行ったが、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、募集定員を減らしたほか、事前申し込み制とした。さらに、当日はマスクの着用や受付での検温・アルコール消毒などの対策を講じた。各講演会では参加者を対象にアンケートを実施した。

以下では、企画展及び関連講演会の概要と、関連講演会のアンケート結果について記す。

（１）令和２年度「史跡古津八幡山　弥生の丘展示館」企画展の概要

（Ａ）企画展

企画展１　「古津八幡山遺跡発掘調査速報展２ー令和元年度の発掘調査成果ー」

開催期間　令和２年４月14日（火）～９月６日（日）

会　　場　史跡古津八幡山　弥生の丘展示館

概　　要　史跡古津八幡山遺跡では、史跡をより適切に保存・活用していくために、史跡内外における遺跡の状況把握を目的とした確認調査を行っている。

令和元年度は、標高約50mの遺跡の最高所から一段下がった、標高約25mの史跡指定地外において発掘調査を行い、大形竪穴住居の構造や周辺の状況などの把握を行った。

本企画展では、令和元年度に実施した発掘調査の成果について、写真やイラストなどとともに展示・解説を行った。

展示解説　令和２年８月16日（日）
13：30～　市文化財センター職員

企画展２　「天王山式土器からみた東日本の弥生社会ー古津八幡山遺跡成立期の動向ー」

開催期間　令和２年９月15日（火）～12月20日（日）

会　　場　史跡古津八幡山　弥生の丘展示館（第１会場）
市文化財センター（第２会場）

概　　要　古津八幡山遺跡は紀元１世紀に出現した北越最大規模の高地性環濠集落である。

出土する土器には東北系・北陸系・在地系の３系統があり、ムラには様々な地域の人々が一緒に暮らしていたと考えられる。

東北系土器を代表するのが縄目文様のついた「天王山式土器」という特徴的な土器である。よく似た土器は北海道から北陸地域にまで分布しており、当時の人々が広域に交流していたことを示している。

本企画展では、天王山式土器に描かれた幾つかの特徴的な文様に着目し、古津八幡山遺跡のムラが成立した頃の状況について考察した。

展示解説　令和２年10月11日（日・第２会場）
15：30～　市文化財センター職員
令和２年11月29日（日・第１会場）
13：30～　市文化財センター職員

企画展３　「大沢谷内遺跡展ーアスファルトを利用した縄文時代から中世の遺跡ー」

開催期間　令和３年１月５日（火）～令和３年３月28日（日）

会　　場　史跡古津八幡山 弥生の丘展示館

概　　要　大沢谷内遺跡は、これまで国道403号小須戸田上バイパスの整備などに伴い計25次に及ぶ発掘調査が行われている。

縄文時代から室町時代にかけての遺跡で、時代によって様々な利用が行われ、性格も異なるが、各時代とも周辺で産出されるアスファルトを利用した点で共通している。また、アスファルトに加え、木製品の加工や漆の利用など周辺の森林資源も活発に利用していたことが分かっている。

企画展では、各時代を通じて遺跡周辺の様々な資源を巧みに利用していた大沢谷内遺跡について、豊富な出土品を展示するとともに紹介した。

展示解説　令和３年２月14日（日）
13：30～　市文化財センター職員

（B）企画展関連講演会

企画展２関連講演会（第１回）

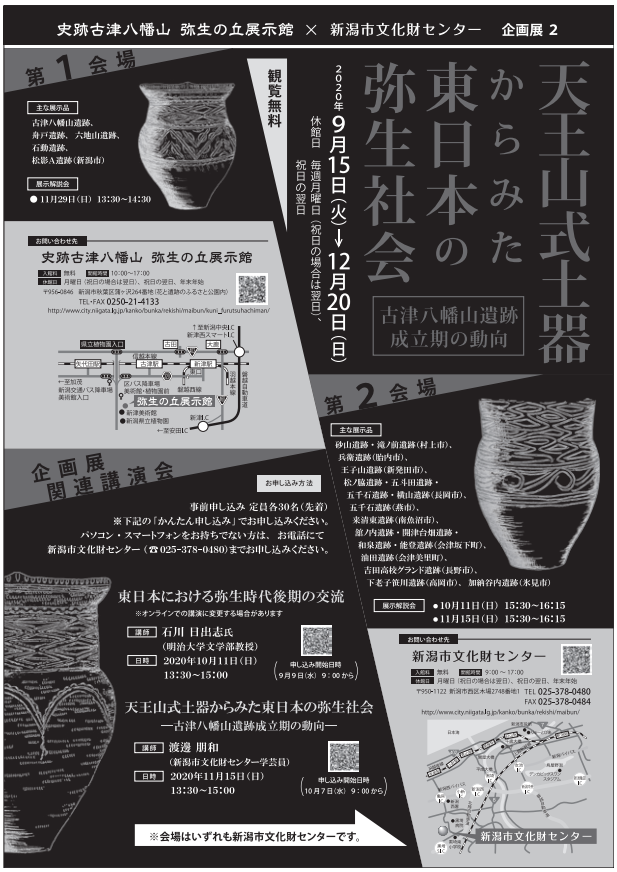
演　題　東日本における弥生時代後期の交流
演　者　石川　日出志氏（明治大学文学部教授）
日　時　令和２年10月11日（日）13：30～15：30
会　場　市文化財センター研修室
人　数　54名

企画展２関連講演会（第２回）

演　題　天王山式土器からみた東日本の弥生社会
　　－古津八幡山遺跡成立期の動向－
演　者　渡邊　朋和（市文化財センター所長）
日　時　令和２年11月15日（日）　13：30～15：30
会　場　市文化財センター研修室
人　数　50名

企画展３関連講演会（第３回）

演　題　縄文時代から中世の大沢谷内遺跡
演　者　相田　泰臣（市文化財センター）
日　時　令和３年２月７日（日）13：30～15：30
会　場　市文化財センター研修室
人　数　31名



企画展２　ポスター

企画展１　ポスター

企画展３　ポスター

（2）企画展関連講演会アンケート結果

アンケートは各講演会ごとに実施した(76頁)。3回分の講演会のアンケート結果を合計した表・グラフは75頁に掲載した。

年齢　講演会参加者の年齢構成は､60代が最も多く、次いで50代、70代、40代と続く。昨年度の講演会では該当がなかった20代が４名、30代が２名いたが、若年層の参加が少ない傾向が続いている。

住まい　参加者の居住エリアは、昨年度に引き続き市外が最も多く、市外・県外を合わせた参加者は全体の約４割を占める。市内参加者では、中央区と西区がほぼ同数で最も多く、それぞれ全体の約１割強を占めており、以下、東区、西蒲区、江南区、秋葉区、北区と続く。

交通手段　交通手段は圧倒的に自家用車が多い。講演会場の文化財センターは、バス等の公共交通機関が非常に限られており、それを反映した結果といえる。

情報入手先　ポスター・チラシが全体の約３割強を占め、有効な広報手段であることがうかがえる。次いでインターネット、新潟市の市報、新潟県が作成しているパンフレット「まいぶんナビ」と続く。今年度はインターネットが増加し、市ホームページと合わせると２割以上を占めることから、スマートフォンやパソコン等を活用した情報収集が増加していることがうかがえる。

講演会について　講演会については、概ね好評であったが、施設全般（照明・空調・バリアフリー）や内容の分かりやすさに関して不満もみられた。

また、意見・要望等の項目では、検討すべき貴重なご意見を多く頂いた。以下に主な内容を箇条書きで示し、今後の検討課題としたい。

講演会場ついての要望

・県外なので場所がよくわからない。
・新津美術館内のホールでやってほしい。
・車を使用せずに行ける交通の便が良い場所。

講演内容について

・文化財ではなく青少年育成者ですが、素人にも非常にわかりやすく、おもしろかった。子供たちは教科書だけの学習では、自分とのつながりがわからず「他人事」として終わってしまうので､「この時代の○○市はこうだったんだよ」という「歴史の流れのなかの自分」を意識してもらう授業を展開したい。
・東北から北陸以西への影響がよくわかった。
・土器が東北系・北陸系の両方から来て文化へ影響を及ぼしたという話がとても新鮮で興味深かった。
・出版物等で個人的に調べても難しい面もあるが、具体的でわかり易い。
・やや専門的な内容であった。土器の出土のあった地域、新潟、福島、東北などの弥生時代の気候、人々の暮らしなどについても簡単にお話があったら、素人としては更にイメージが出来たと思う。
・専門外のせいかもしれないが、細かい内容をこれだけの時間で説明するのはかなり厳しかったと思います。資料の量からすると半日は必要かも。
・一般市民が対象なのか、専門研究者が対象なのかがよくわからない講演会でした。
・研究者の議論は土器研究会ですればよいと思います。
・講演時間が長すぎます。(内容がわかりやすければよいのですが)
・難しい内容だった。
・時間を厳守して欲しい。
・議論は講演の後にして欲しい。
・文様の話が多かったので、文様が分かりやすい資料（イラスト）が欲しかった。
・土器のイラストは分かりやすかったので、印刷物が欲しい。
・白熱した講演会でした。職員の皆様お疲れ様でした。
・面白かったが､関係者､質問者をふくめ上手な（ふつうの人にもわかりやすい）実施方法（シンポ的にするなど）を考えてほしい。
・文様系譜に特化しており、市民向けの講演会としては難しいと思います。内容は濃くて良かったです。
・意見の違う方の話を聞けて良かった。
・土器の関心が深まった。
・大変面白い内容でした。ありがとうございました。
・弥生の丘としては、①阿賀野川を通した交流を扱ってもいいかなと思います。②県内としては、新津丘陵周辺と弥彦角田周辺の関わりもおもしろいと思います（既に何回かやられているようですが)。最後に話された遺跡相互の時期関係を明確にするような作業、企画があれば有意義になるのだと思いました。
・大沢谷内遺跡から火焔型土器が出土しない理由を知りたかった。

・現地見学をした事もあり、理解が深まりました。
・大沢谷内遺跡について幅広い説明をうけられました。
・今後個々の詳細な説明の場があれば良いと思う。
・文章の説明がほとんどないのでややわかりにくい。
・なぜ縄文人がアスファルトを精製したのか不明なのは残念。
・会場が少し寒すぎる。
・今回は大沢谷内遺跡の全体の話だったが、次は縄文晩期の集落（一般集落の違いなど）とか、行屋崎遺跡との比較など、時代をしぼった講演会を希望する。

希望するイベント・講演会について

・考古学入門的講座～基本的理解のために私たちの住む新潟の古い歴史を知りたいと思う。
・東北、北陸、新潟の全般的な古代のこと、交流について。
・ぜひ弥生文化と縄文文化のつなぎめ、共存？についての講演会をお願いします。
・県外の様子なども知りたい。
・新潟県の米作りの歴史について。
・越後国絵図（県立図書館蔵）について。

その他の要望

・子供向けが充実していてとても参考になる。
・縄文と弥生とのつながりも重視した展示も考えてほしい。
・三密を避けるため、もう少し大きい会場だと良いと思う。または入り口の戸を開けておくなど換気よくしてほしい。
・施設は立派ですが入り口が休館の様に見える。
・時間がある時にちょっと訪れることが出来て、有意義な時間をすごすことが出来る大好きな場所です。毎回企画展、展示解説ともに楽しみにしています。
・発掘作業のボランティアがしたい。

史跡　古津八幡山遺跡　弥生の丘展示館

企画展○○関連講演会　アンケート

お越しの皆様へ
本日は史跡古津八幡山遺跡弥生の丘展示館企画展○ 関連講演会
「○○○○○○○○○○○○」にお越しいただき、誠にありがとうございます。
弥生の丘展示館の活動について今後の参考とさせていただくために皆様のご意見をお聞かせ下さい。
ご協力をお願いします。　☆開催日：　令和○ 年○ 月○ 日（○ ）

1　あなたのこと（お客様のプロフィール）を教えてください。

次のそれぞれの質問で、あてはまる項目を１つだけ選び、○で囲んでください。	
① 年齢は	20 歳未満　20 代　30 代　40 代　50 代　60 代　70 代　80 代以上
② 性別は	男性　女性
③ 職業は	小学生　中学生　高校生　大学生（短大・専門学生含む）　会社員　公務員　自営業 教職員　主婦　無職　その他（　　）
④ お住まいは	北区　東区　中央区　江南区　秋葉区　南区　西区　西蒲区 市外（　　市・町・村）　県外（　　都・道・府・県　　市・町・村）
⑤ こちらへの主な交通手段は	自家用車　自転車・バイク　徒歩　タクシー　路線バス・区バス ＪＲ　その他（　　）
⑥ 弥生の丘展示館へ行かれたことはありますか	ない　1回　2~5回　6~9回　10回以上
⑦ 弥生の丘展示館で開催中の企画展２「○○○○○○○○○○○○○○」をご覧になりましたか。	はい　いいえ ※いいえの方に質問です。これからご覧になる予定はありますか。 ある　ない
⑧ 講演会情報の入手先	ポスター・チラシ　市報　その他広報誌　テレビ・ラジオ 新聞　雑誌・情報誌　インターネット　市ホームページ　まいぶんナビ 人から聞いて　弥生の丘展示館を利用して　その他 （　　）

※質問は表・裏の両面にあります。　【ウラ面に続きます】

2　講演会について

次のそれぞれの質問で、あてはまる答えを１つだけ選び、数字を○で囲んでください。 ※答えられない質問は、記入する必要はありません。					
① 講演会：時期	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
② 講演会：場所	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
③ 講演会：内容のわかりやすさ	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
④ 施設全般：映像、照明、空調、バリアフリー	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑤ 職員の対応：言葉づかい、マナー、対応、説明	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑥ 印刷物：わかりやすさ	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑦ 全体の満足度	大変満足	満足	普通	不満	大変不満
⑧ 次回の講演会に参加したいですか？	ぜひ参加したい　できたら参加したい あまり参加したくない　参加しない				
⑨ 弥生の丘展示館周辺施設を利用されたことはありますか？	古津八幡山遺跡歴史の広場　フラワーランド　新津美術館 県立植物園　県埋蔵文化財センター　石油の世界館（石油遺産関係） 中野邸記念館　ビジターセンター　その他（　　）				

※今後の会場の場所についてのご希望をお書きください。
・現在の場所で満足
・別の場所を希望（　場所：　　）
※今回の講演会についてご自由にお書きください。

※ご希望のイベント・講演会等がございましたらお書きください。

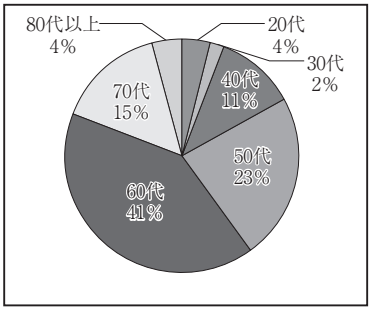
※弥生の丘展示館へのご意見・期待することなど、ございましたらご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました

アンケート用紙（表・裏）

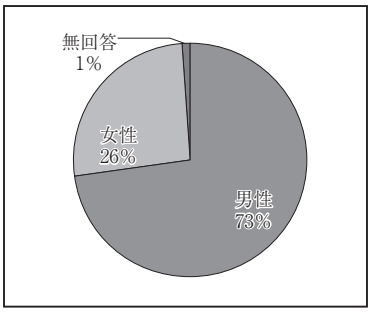
1.年齢

20歳未満	0
20代	4
30代	2
40代	11
50代	22
60代	40
70代	15
80代以上	4
無回答	0
計	98



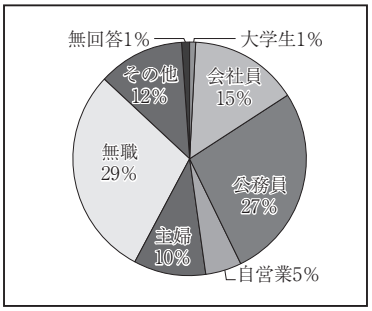
2.性別

男	72
女	25
無回答	1
計	98



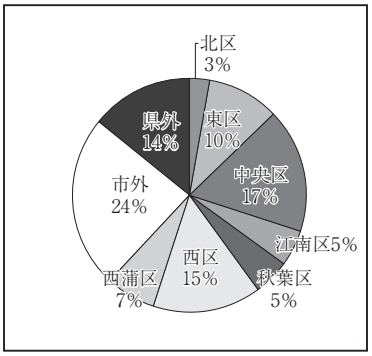
3.職業

小学生	0
中学生	0
高校生	0
大学生	1
会社員	15
公務員	26
自営業	5
教職員	0
主婦	10
無職	28
その他	12
無回答	1
計	98



4.住まい

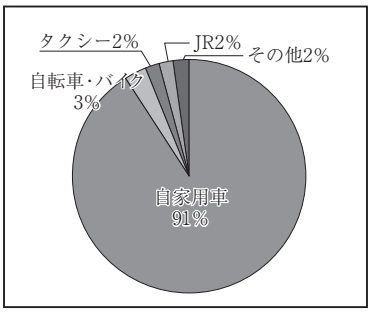
北区	3
東区	10
中央区	16
江南区	5
秋葉区	5
南区	0
西区	15
西蒲区	7
市外	23
県外	14
無回答	0
計	98



5.交通手段

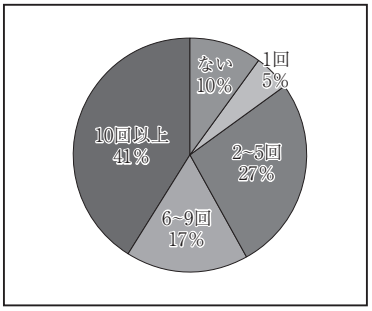
自家用車	90
自転車・バイク	3
徒歩	0
タクシー	2
バス	0
ＪＲ	2
その他	2
無回答	0
計	99

※複数回答あり



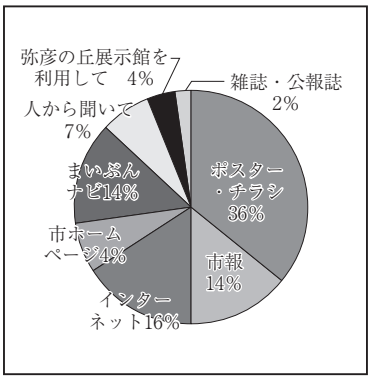
6.弥生の丘展示館来館回数

ない	10
1回	5
2～5回	26
6～9回	17
10回以上	40
無回答	0
計	98



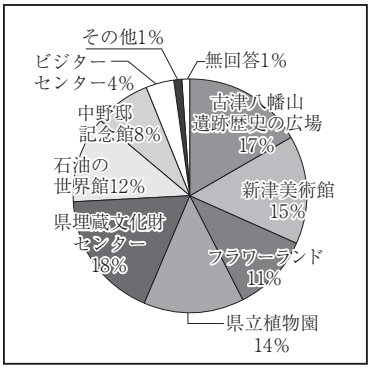
7.講演会情報入手先（複数回答あり）

ポスター・チラシ	50
市報	19
その他広報誌	0
テレビ・ラジオ	0
新聞	0
雑誌・情報誌	0
インターネット	22
市ホームページ	10
まいぶんナビ	20
人から聞いて	9
弥生の丘展示館を利用して	6
その他	3
計	139



8.弥生の丘展示館周辺施設の利用（複数回答あり）

古津八幡山遺跡歴史の広場	74
新津美術館	65
フラワーランド	48
県立植物園	64
県埋蔵文化財センター	79
石油の世界観	54
中野邸記念館	37
ビジターセンター	19
その他	3
無回答	4
計	447



弥生の丘展示館周辺施設の利用（複数回答あり）

	大変満足	満足	普通	不満	大変不満	無回答	計
時期	17	54	20	0	0	7	98
場所	16	52	22	1	1	6	98
内容のわかりやすさ	18	43	19	10	0	8	98
施設全般：照明、空調、バリアフリー	18	50	20	2	0	8	98
職員の対応：言葉づかい、マナー、対応、説明	24	57	11	0	0	6	98
印刷物：わかりやすさ	14	50	21	6	0	7	98
全体の満足度	22	55	11	3	0	7	98

アンケート結果一覧（３回分の講演会の合計）

アンケート結果一覧（講演会別）

	項目		第1回	第2回	第3回	計
プロフィール	年齢	20歳未満	0	0	0	0
		20代	2	2	0	4
		30代	0	1	1	2
		40代	5	4	2	11
		50代	8	10	4	22
		60代	17	10	13	40
		70代	5	6	4	15
		80代以上	1	3	0	4
		無回答	0	0	0	0
		計	38	36	24	98
	性別	男	27	28	17	72
		女	11	7	7	25
		無回答	0	1	0	1
		計	38	36	24	98
	職業	小学生	0	0	0	0
		中学生	0	0	0	0
		高校生	0	0	0	0
		大学生	0	1	0	1
		会社員	4	7	4	15
		公務員	10	11	5	26
		自営業	1	2	2	5
		教職員	0	0	0	0
		主婦	4	2	4	10
		無職	11	11	6	28
		その他	7	2	3	12
		無回答	1	0	0	1
		計	38	36	24	98
	住まい	北区	1	0	2	3
		東区	5	3	2	10
		中央区	8	5	3	16
		江南区	1	3	1	5
		秋葉区	3	2	0	5
		南区	0	0	0	0
		西区	5	5	5	15
		西蒲区	3	3	1	7
		市外	7	7	9	23
		県外	5	8	1	14
		無回答	0	0	0	0
		計	38	36	24	98
	交通手段（複数回答あり）	自家用車	35	34	21	90
		自転車・バイク	1	1	1	3
		徒歩	0	0	0	0
		タクシー	0	0	2	2
		路線バス・区バス	0	0	0	0
		ＪＲ	1	0	1	2
		その他	1	1	0	2
		無回答	0	0	0	0
		計	38	36	25	99
	講演会情報入手先（複数回答あり）	ポスター・チラシ	17	21	12	50
		市報	8	7	4	19
		その他広報誌	0	0	0	0
		テレビ・ラジオ	0	0	0	0
		新聞	0	0	0	0
		雑誌・情報誌	0	0	0	0
		インターネット	12	5	5	22
		市ホームページ	3	3	4	10
		まいぶんナビ	4	9	7	20
		人から聞いて	4	4	1	9
		弥生の丘展示館を利用して	1	2	3	6
		その他	2	1	0	3
		計	51	52	36	139

	項目		第1回	第2回	第3回	計
講演会・講演会場（市文化財センター）などについて	時期（無回答あり）	大変満足	10	5	2	17
		満足	20	18	16	54
		普通	6	9	5	20
		不満	0	0	0	0
		大変不満	0	0	0	0
		無回答	2	4	1	7
		計	38	36	24	98
	場所（無回答あり）	大変満足	6	7	3	16
		満足	21	18	13	52
		普通	8	8	6	22
		不満	1	0	0	1
		大変不満	0	0	1	1
		無回答	2	3	1	6
		計	38	36	24	98
	内容のわかりやすさ（無回答あり）	大変満足	11	4	3	18
		満足	22	10	11	43
		普通	2	10	7	19
		不満	1	8	1	10
		大変不満	0	0	0	0
		無回答	2	4	2	8
		計	38	36	24	98
	施設全体：映像、照明、空調、バリアフリー（無回答あり）	大変満足	9	6	3	18
		満足	23	16	11	50
		普通	4	9	7	20
		不満	0	1	1	2
		大変不満	0	0	0	0
		無回答	2	4	2	8
		計	38	36	24	98
	職員の対応：言葉遣い、マナー対応、説明（無回答あり）	大変満足	11	10	3	24
		満足	22	19	16	57
		普通	3	4	4	11
		不満	0	0	0	0
		大変不満	0	0	0	0
		無回答	2	3	1	6
		計	38	36	24	98
	印刷物：わかりやすさ（無回答あり）	大変満足	7	4	3	14
		満足	22	17	11	50
		普通	7	5	9	21
		不満	0	6	0	6
		大変不満	0	0	0	0
		無回答	2	4	1	7
		計	38	36	24	98
	全体の満足度（無回答あり）	大変満足	13	6	3	22
		満足	22	17	16	55
		普通	1	6	4	11
		不満	0	3	0	3
		大変不満	0	0	0	0
		無回答	2	4	1	7
		計	38	36	24	98
	次回講演会に参加したいか（無回答あり）	ぜひ参加したい	21	20	17	58
		出来たら参加したい	12	12	5	29
		あまり参加したくない	1	0	0	1
		参加しない	1	0	0	1
		無回答	3	4	2	9
		計	38	36	24	98
	今後の会場（無回答あり）	現在の場所でよい	19	21	16	56
		別の場所がよい	3	1	2	6
		無回答	16	14	6	36
		計	38	36	24	98
企画展・企画展示会場（弥生の丘展示館）などについて	項目		第2回目		第3回目	計
	来館回数	ない	5	3	2	10
		1回	2	3	0	5
		2～5回	11	8	7	26
		6～9回	7	8	2	17
		10回以上	13	14	13	40
		無回答	0	0	0	0
		計	38	36	24	98
	開催中の企画展を見た（無回答あり）	はい	11	23	8	42
		いいえ	27	12	15	54
		無回答	0	1	1	2
		計	38	36	24	98
	開催中の企画展を見る予定（無回答あり）	ある	20	11	12	43
		ない	3	0	1	4
		無回答	15	25	11	51
		計	38	36	24	98
	弥生の丘展示館周辺施設の利用（無回答・複数回答あり）	古津八幡山遺跡歴史の広場	29	27	18	74
		新津美術館	26	20	19	65
		フラワーランド	18	15	15	48
		県立植物園	24	22	18	64
		県埋蔵文化財センター	26	30	23	79
		石油の世界観	22	13	19	54
		中野邸記念館	16	10	11	37
		ビジターセンター	6	6	7	19
		その他	1	1	1	3
		無回答	2	2	0	4
		計	170	146	131	447

講師略歴

石川　日出志（いしかわ　ひでし）
新潟県阿賀野市出身
明治大学文学部教授

渡邊　朋和（わたなべ　ともかず）
新潟県新潟市出身
新潟市文化財センター所長

相田　泰臣（あいだ　やすおみ）
新潟県三条市出身
新潟市文化財センター主査

令和２年度
史跡古津八幡山 弥生の丘展示館
企画展関連講演会　記録集

編集・発行　新潟市文化財センター
〒950-1122　新潟市西区木場2748-１
TEL　025-378-0480　　FAX　025-378-0484
発行日　2021年３月30日
印　刷　株式会社ハイングラフ